
堇姫と霞草

木々峰哉子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

堇姫と霞草

【Nコード】

N6162S

【作者名】

木々峰哉子

【あらすじ】

伯爵の妾の娘であるクローヴィアは、メイドとして働く日々を送っていた。しかし、初めて母の墓参りに行った日、王女から茶会の招待状が届き……

プロローグ

昔話を致しましょう。

あるところに、それはそれは立派な伯爵さまがおりました。伯爵さまは、我儘の一つも言わず、しっかりと領地を治めていましたので、領民から、とても好かれておりました。

けれども一つ、伯爵さまには大きな問題がありました。伯爵さまには、後継ぎの子供が一人もいなかったのです。

伯爵さまには、たいそう美しい奥方様がいたものの、この奥方様はとても病弱な性質でしたので、なかなか子宝に恵まれず、伯爵さまは長い間ずっと、頭を悩ませておりました。

そこで、伯爵さまの家来が、伯爵さまにある提案をしました。

お妾に子を作らせてはどうか、と。

伯爵さまは悩みに悩みましたが、このままでは良い訳がありませんでしたので、断腸の思いでお妾を囲い、そしてそのお妾は元気な赤子を産みおとしました。

ところが、それから間もなく、奥方様が赤子を身籠っていることが発覚しました。伯爵さまにとっては願っても無い、正統な後継者です。無事に生まれてきたその赤子は、伯爵さまによって立派な名前を与えられました。

その後、すぐにお妾は流行り病で亡くなりましたが、忘れ形見の赤子は、万が一の時の為にと、屋敷の奥深くでひっそりと育てられました。

屋敷の人間は、奥方様の子供を、その美しい髪の色から『菫姫』と呼び、大層可愛がりでしたが、逆にお妾の子供は、『霞草』と呼ばれ、可愛がられるどころか、ひどい仕打ちを受けるばかりでした。

『菫姫』の10歳のお誕生日の日、『霞草』は姿を消しました。けれども、人は誰も彼女を探しませんでした。

『霞草』は誰に探されることも無く、いつしか人は彼女の存在を

忘れて行ってしまいました。

第1話

『朝というものが、私は大嫌いだ、と最初だから述べておきましよう。何故なら、今日も長い長い一日が始まると言う、残酷な事実を突きつけられますから。』

今日もお空は真っ青です。こう言うと、まるで空の顔色が悪いようです。勿論青は、空にとっては顔色が良いと言うことです。肯定的にとらえて下さいね。別に、お空にああだのこうだの言うつもりはありませんので。

私は、いつも憎たらしい太陽を目を細めて見上げながら、今日も生き延びることが出来ますようにと、いもしない神様に祈り、そして現実を見るべく、窓を閉じました。そして、大きく開け放たれたクロゼットの前に立ちました。

さて、これはどういうことでしょうか。

私、クロゼットの中を掃除した記憶だなんて無いんですが。

油断していた自分が悪い、と言えばそこまでなのでしょうけれど、いくらなんでも、相手にだって良識くらいはあるものだと思っていました。だって、さすがに就寝中の人の部屋に勝手に入って服を奪うだなんて・・・今までの嫌がらせがささやかなものだったために、まさかここまでしてくるとは思いませんでした、というのが本音です。

私は今、寝間着のままです。もちろん、寝間着で外に出られるわけがありませんし、外に出れば、私のことが嫌いな皆さん方が罵声なりなんなりを浴びせるのでしようし。それも、まるでたまたま通りかかった、とでも言うように。

別に、罵声を浴びせられようがどうしようが、私はどうでも良いのですが、それでは、私にとって唯一の味方である方に全てのしわ寄せがいくことになってしまうのです。それは、それだけは避けなければなりません。いくらなんでも、恩をあだで返すのは嫌です。

ならば、どうすべきか。それはもう、一つしか術は無いのですが、それをするとは今度は別の方に迷惑がかかるのです。

私は考えに考えました。あと少して、私たちの朝礼が始まるのですが、このままではもう、何度目か分からない遅刻をすることになりそうです。

それにしても、寝坊したことなど一度も無いのに、これほど遅刻する使用人なんて、私くらいな物でしょう。

話を戻して、私はこのままでは、5分もすれば来るであろう上司に、どうにかして、正当な理由と言う名の嘘をつかなければなりません。真実を言うことは、私がいちばんしてはいけない失態だから、今回は風邪でも引いたと言って、ベッドに入っていればいいでしょう。運が良いことに、私の顔色は年中無休で悪いままですし。

そういえば、名前を名乗っていませんでしたね。私の名前はクロイヴィアと言います。確か、『霞草』の別名で、よく『お前にピツタリだ』と人から言われます。別の意味で。

仕事は、伯爵家のメイドです。最近、メイドがするような仕事をもらっていませんが、制服はメイドが着るそれなので、まだ、一応メイドだと言うことにしています。

この文字の羅列は、私が手に入れた書類の裏側に書かれています。私はお屋敷から出ることを許されておりませんので、日記帳なるものが手に入らないのです。まあ、そもそも買う機会があったとしても、買えるだけのお金がありませんが。ペンは、どうにかある方からもう使わないからと、インクとともに頂けたので、そちらの心配はありません。問題は、紙なのです。

この書類の裏も、こちら辺りが限度のようです。最初の記事を書くのに三枚半も費やしてしまいました。

では、続きは、また裏が白紙の書類を拾えた時に。』

ある都市部の、貴族住居の一角に、その屋敷はあった。

軒を連ねる屋敷の中でも、ひととき大きく、そして立派なその屋敷は、大の大人の倍はあるであろう柵に囲まれており、全容を知る者は少ない。だが、巷では『沼屋敷』という綽名で有名だった。ちなみに、この屋敷には、沼などどこにもありはしない。

一日の中で、一番忙しいであろう朝の時間帯が過ぎ去り、ようやく落ち着きが戻った頃、人目を盗んでは、あちこちで年若い少女たちの話声が響く。

「そういえば、今日はあれ・・・いなかったわね」

「あれと同じ部署の子が、服を盗んだんですって」

「せっかくなら靴だけは残しておけばよかったのに。もしかしたら、寝間着姿で飛び出してきたかもよ？」

「あはは、それは滑稽ねえ」

「どうしてあれが、奥方様に気にいられるのかしら・・・納得がないわ」

「あの、美しい奥方様が・・・どうしてあんな」

「知ってる？あれの母親ってね・・・」

「え、そうなの？」

三人のメイドが、人通りの少ない廊下の端で、お喋りに花を咲かせていた。

誰も、後ろから迫る二つの足音に気付かずに。

「ねえねえ、明日は奥方様とお嬢様がお戻りになれるわ！」

「そうよ。だから、お部屋は綺麗にしておかなくちゃ」

「お土産、今回は何かしら・・・」

「確か、港町の方へ視察に行かれたのでしょうか・・・ほら、あのセーラー服の有名な」

「！あのスィル―のセーラー服って、新しいデザインのが発売されたんでしょ？」

「ええ、そうよ・・・もしかしたら、買ってきて下さるかも！」

二つの足音が、彼女らの数メートル先で止まった。彼女たちは後ろを向いているため、二人には気付かない。

「あなたたち・・・」

決して大きくはないが、少ししゃがれた、独特な声だった。

それは、彼女らにとつて、一番恐れる人物の声だった。

ゆっくりと、彼女らは振り返る。その顔には、冷や汗が滲んでいた。

「無駄口をたたく暇があったら仕事をなさいと、いつも言っているでしょう!!」

「・・・は、はいっ」

三人は慌てて持ち場へと走って行った。

声の主は、ため息をひとつついた。

「まったく、これだから・・・」

「まあまあ。ほら、明日には奥方様達がお戻りになりますし・・・」

「だったら余計に仕事に精を出すべきだと言うに」

「あはは・・・」

そこに立っていたのは、二人のメイドだった。片方は背が高く、一目で随分な高齢だと分かる。枝毛のない白髪を後ろで一つにまとめており、琥珀色の瞳を持つ顔はきりりと引き締まっていた。

もう片方は、小柄で華奢な、先程のメイドたちと大差ない年頃の少女。短い緑の癖っ毛を小さなポニーテールにしており、髪よりも明るい黄緑の大きな瞳が白い肌の中で際立っていた。

「ほらほら、急ぎましようよ・・・私たちだって、時間はありませんもの」

年若いメイドが、高齢のメイドにとりなすように言った。

「そうね」

二人は、周囲を見渡し、他に誰もいないことを確認してから、廊下を歩いて行く。

「あの子・・・いつつもどうやってあそこまで行っているんでしょう」

「さあ、どうやっているのかしらね」

二人は、屋敷の中でも特に目立たない裏庭へとやって来た。先程来た道は、正規の道ではなく、いわゆる隠し通路である。

この庭は、綺麗に整えられてはいるが、基本的に誰も来ない。何故なら、ここに来る人物は、この屋敷では三人しかおらず、そのうちの二人は現在屋敷にはいないからだ。

きよろきよろとあたりを見回し、そして彼女らの近くの茂みへと年若いほうのメイドは声をかけた。

「出てきて大丈夫よ」

すると、近くの茂みがガサガサと音を立てた。

「良かった、これで朝ご飯が食べられる」

のんきな口調とともに茂みから出てきたのは、寝間着を着た、髪がぼさぼさの少女だった。靴は履いておらず、両足に擦り傷や土でついた汚れが目立つ。

「まったく・・・誰がやったのか、見当はついていますね？」

高齡な方のメイドが、ため息交じりに口を開いた。

「はい」

「また、部屋を変えましょうか？それとも・・・」

「いえ、部屋はそのまま大丈夫です。とりあえず、服を頂きたいのですが」

「はいはい。これで何着目でしょうね、あなたのメイド服は」

そう言つて差し出したのは、新品のメイド服だった。

「確か六着目です。前は思い切り泥水をかけられました。でも、メイド長がすぐ近くにおりましたから、すぐに着替えることができましたよ」

少女は、そう言つて笑った。メイド長はそれを見て苦笑した。もう片方のメイドは、相変わらず辺りを見回している。

再び茂みの中へと入って行った少女を横目に、

「・・・そういえば、今日は確か・・・」

頭をあちこちに動かしながら、メイドが呟く。

「ええ、私たちにとっての正念場です。特にレティ、あなたにとっては尚更です」

レティと呼ばれたメイドは、顔を曇らせた。

「今回は、少しでも穏便に済むと良いのですけれど・・・」

「さあ、どうなることやら」

メイド長は再び溜め息をついた。

少女は、ものの1分で先程の寝間着から、新品のメイド服に着替えて出てきた。

「いつもいつも、ありがとうございます、メイド長、それにレティ」「どういたしまして」

ようやくレティは頭を固定し、目の前の少女を見た。

「やはり、今日から私の部屋に来なさい。もう一人分くらいならどうにかありますから」

ため息をつきながらそう言ったメイド長に、少女はにつこりと笑って、

「ありがとうございます」

と深く深く礼をし、立ち去ろうとしたのだが、

「待ちなさい。靴を履かないまま、屋敷をうるつくつもりですか？」

「あ・・・」

彼女の足は、先程よりもさらに汚れていた。

「いくらなんでも、それじゃあ私でもフォローできないわよ。あと、髪の毛も整えないと」

レティの右手には、ひもで縛られた新品のシューズがあった。

「あはは、ごめんごめん」

「まったくもう、クローヴィアったら・・・」

突然、穏やかな笑みを浮かべていたメイド長の顔がこわばった。

「いけません、奥方様がお戻りになられたわ・・・！」

「え？奥方様がお戻りになられるのは、明日のお昼のことでは？」

レティは少し怯えたような口調だった。

「私もそう聞いていたのですが・・・きつと、用事が早く済んだの

でしょう」

「食事はこの後になりそうね」

「ええ、そんなあ・・・」

クローヴィアは、まだ朝食をとってはいなかった。

「さつ、早く靴を履いて！髪は手早くやってあげるから」

レティはエプロンのポケットから小さなヘアブラシを取り出し、慣れた手つきでクローヴィアのぼさぼさの髪をとかしていく。

「まったく・・・ブラシは前にあげたでしょう？」

呆れた顔でレティは言う。

「しょうがないじゃないの。誰かに取られたんだから」

「・・・ご愁傷様」

レティは、これで3個もの自分のブラシがどこかへ行ったことに何ともいえぬ気持ちを抱いた。

「それにしても、奥方様達、どうして一日早くお戻りになったのかしら」

クローヴィアの疑問に答えたのは、メイド長だった。

「分かりませんが・・・もしかしたら、体調がすぐれないのやもしれません」

「それで予定より早く？分からないなあ・・・」

「出来たわ。ほら、靴もはいて」

「う、うん・・・」

僅か数分で、先程のぼさぼさの髪は美しく整えられ、姿かたちは立派なメイドそのものだった。

「さ、急いで急いで」

レティはクローヴィアを急かしたが、クローヴィアはレティに「どうしてレティは来ないの？」

一瞬、レティは言葉に窮したと分かる顔をして、

「え？だって、私が行ったって、ねえ・・・」

そう言ってメイド長と顔を見合わせた。

「ほら、急いで急いで」

メイド長の言葉で、クローヴィアはしぶしぶ、と言つ足取りで玄関へと向かった。

その後ろ姿を見ながら、

「今日は大変なことになりますね」

「ええ、そうなるでしょうよ」

二人の大きなため息が見事に重なったのだった。

第2話

朝の慌ただしい時間帯が過ぎ、ようやく落ち着きを取り戻したと思われた頃、屋敷内は再び忙しさに包まれていた。

明日の昼に帰宅するはずだった、伯爵の奥方と娘が、揃って戻ってきたからだ。

急いでメイドたちが玄関ホールに集結するなか、クローヴィアもその流れに紛れていた。我先に、と少しでも早く駆けつけようとするその姿勢は、一見素晴らしいものだが、大半は、

「早く奥方様のお姿を拝見しなくては！」

「奥方様、今参りますわ！」

「お美しいお嬢様のお顔を早く……！」

というようなものだった。

そんな中、クローヴィアは、

「ああ、早く朝ご飯が食べたい……」

焼き立てのパンやスープなどのことしか頭に無かった。

伯爵家の玄関ホールは、大理石のタイルが敷き詰められ、中央の階段へと続く通路には、臙脂色の絨毯が敷かれている。もちろんメイドたちは、絨毯のすぐ端に整列する。が、いかんせん人数が多いため、両側ともに二列ずつ立ち並び、異様な光景となっていた。

外開きのドアが、仰々しく音を立てて開かれ、逆光によって出来た二つのシルエットが姿を現した。

コツ、と背の高いほうのシルエットが一步中に入った瞬間、

『おかえりなさいませ、奥方様、並びにお嬢様』

とメイドたちの揃った声がホール内に響く。

ホールのシャンデリアに照らされ、ようやく姿を現した渦中の二人は、にこやかにその言葉に応じた。

「あらあら、朝から元気が良いのね」

「本当、忙しいでしょうに……」

楽しそうな、嬉しそうな声と、呆れた、と言わんばかりの声は、一人を除いてメイドたちには届かなかった。

伯爵夫人はにっこりと笑いながら、進み出たメイドに荷物を預けたのに対し、娘は意気地になったように荷物を渡さなかった。事実、にこにこしている母親とは対照的に、娘の顔はお世辞にも笑っているとは言えなかった。

「スピレイア、愛想笑いで良いから、ちゃんと笑いなさい。出迎えてくれた者に対して失礼でしょう」

夫人は母親らしく娘をたしなめたが、娘はツン、としたまま、

「朝の忙しい時間帯ではなくとも、これほどの人数が集まる必要はないでしょう？ お父様が帰って来たならまだしも…それに、出迎えを受けた時はちゃんと笑いました」

しれっとそう言うだけだった。

二人は絨毯の中央を、優雅に歩いて行く。夫人は身に着けていた外套や帽子をメイドに預けながら。娘は何一つ預けずに。

「お嬢様は相変わらずね・・・」

クローヴィアはドアから見て右側の二列目の一番右端に立っていた。そこからでも、スピレイア嬢の不機嫌な様相はすぐに分かった。令嬢は、紺で統一された帽子や外套を身に着けたままだ。

（あの外套をクロゼットに仕舞うのは、きつとまた・・・）

「それにしても、どうして一日早くお戻りになられたのかしら・・・」

「本当、どうしてかしらね」

並んだメイドたちの会話に耳を傾けながら、クローヴィアはいつになったらここから食堂へ向かえるのだろうかと考えていた。

「クローヴィア」

「え、はい」

突然、名前を呼ばれて思わず返事をしたが、彼女の名前を呼ぶ人間は、この屋敷には少ない。

「な、何でしょうかお嬢様」

前のメイドたちの間から見える令嬢の瞳と目が合った。周囲から、ひそひそと話声が聞える。

「後で部屋に来て頂戴」

「は、はい」

それだけ言うと、令嬢はさっさと階段を上って行った。

「お嬢様が、あれに・・・」

「どうということかしら」

さわさわと、風に葉が揺れるような話声に、彼女自身ももったもたと思っただ。

「こら、スピレイア・・・」

慌てて夫人がその後について行った。途中、ちらりと彼女を見たが、声はかけなかった。

二人がホールからいなくなった直後、クローヴィアはすぐさま食堂へと直行した。そのまま残っていたならば、鋭い数多の視線に睨まれていたことだろう。

「朝ご飯、朝ご飯・・・」

彼女が使用人たちの使用する食堂へついた頃には、すでに昼時の少し前になっていた。

食堂は、裏方、と言うこともあり小奇麗な場所ではないが、いつも活気に満ちあふれている場所の一つで、今も専属の料理人達が腕によりをかけて料理を作っているのが見える。

「あ、いたいた・・・」

クローヴィアは、顔なじみの下働きの中年女性に声をかけた。たった今、厨房の奥で食器を洗っていた女性は、顔を上げ、「ちよいと待っておくれ」と言いながら、再び食器洗いを再開した。

「いっつも忙しそうねえ」

しばらく待たされるのが常なので、彼女は近くの背もたれなしの椅子に腰かけて、女性がやってくるのを待った。

食堂内は、蠟燭以外は殆ど明かりが無く、日当たりの悪い場所にあるせいか年中薄暗い。隣の厨房は随分と明るいのだが、食堂が明

るい時など、彼女は見たことが無かったし、これからも無いだろう。
「ああ、お腹が空いた・・・」

もう何度目かも分からない眩きは、忙しい料理人達の喧騒に紛れてすぐに消えた。

それからしばらくして、クローヴィアの空腹度が限界になった頃、先程の女性は、盆に載せた料理を持ってやって来た。盆の上には、まるまる一本のパンとナイフも載っていた。

「お待たせ。いつもいつも、お前さんは大変だねえ」

「そんなことは無いですよ、リマラさんよりかはね」

リマラ、と呼ばれた恰幅の良い中年の女性は、豪快に笑った。

「そうかい？こっちは気楽なもんだよ、なんせ日がな一日食器を洗ってりゃあ良いんだからね」

「でも、立ちっぱなしですし、腰に負担が・・・」

「お前さんはまだ花も恥じらう十代の娘だろうが」

「えへへ・・・」

テーブルに置かれた料理を前に、クローヴィアは目を輝かせた。

スライスされたパン二切れと野菜スープ、それにハムエッグ。全て彼女の好物だ。

「ほら、たんとお食べ。スープとパンは余っているから、いくらでも食べな」

「本当ですか？！いったただっきまーす！！」

勢いよく食べ始めたクローヴィアを傍目に、リマラは余りのパンを切り始めた。彼女がお代わりをすることは、いつものことだった。
「そういえば、奥方様たち、帰って来たんだろう？」

「え？うん、帰って来たよ。あ、私これ食べたからお嬢様の部屋に行かないと」

思い出した途端、面倒だなあ、と彼女は零した。

「おや、奥方様では無く、かい」

「そんないつつもいっつも呼ばれたりはしないけど・・・そうだね、普段なら奥様に呼ばれることはあるけど、お嬢様から呼ばれること

は少ないかな」

「ふうん・・・まあ、せいぜい気をつけな。お前さんはただでさえ敵が多いんだからね」

「うん。いつも気をつけてはいるんだけどね」

気をつけていても、敵は予期せぬところを付いてくる。

「・・・辛くないかい？」

「辛かったらとつくに屋敷から逃げ出してるよ。でも、逃げ出したら、リマラさんが作る美味しいご飯が食べれないもん」

「こんなのが美味しいってかい。お前さんは口が上手いねえ」

「お世辞なんて言つてないよう、あ、パンお代わり」

「・・・はいはい」

リマラは、敵が多いクローヴィアにとって、母親のような存在で、いつもこうやって食事を用意してくれる。本来なら、時間内に来ないクローヴィアの食事など、用意されてはいないのだ。それを、リマラが余った食材で、合間を縫っては作っている。

「そろそろ、昼時だ。急がないと、他のやつらがやってくるよ」

「うん」

最後にスープを飲みほして、クローヴィアは立ち上がった。

「じゃ、ごちそうさまでした！すつごく美味しかった」

「気をつけなよ」

「うん！」

満面の笑みを浮かべ、クローヴィアは駆け足で食堂を出て行った。

「まったく・・・あんなことをしたら、クローヴィアがまた大変な目に遭うでしょう」

「だって、ちょうど近くにいたものですから」

屋敷の中で、もっとも日当たりが良く、窓からの見晴らしが良い

一室で、夫人とその娘が向かい合って茶を飲んでいた。室内の調度品はどれをとつても一目で高級品だと分かるものばかりで、二人が腰掛けている対のソファも言わずもがなだった。

「・・・その外套も帽子も、自分では満足に片付けられないのに」

「だから、クローヴィアを呼ぶのでしょうか？」

「他のメイドでも出来るでしょう？」

「そうですね・・・」

「頼むにしても人目につかない場所になさい」

「・・・はい」

「まあ、確かにあれほど人が集まるとは思わなかったけれど・・・だから、一日早く帰って来たかったのでしょうか？」

「勿論です。私たちの出迎えがメイドの本業ではありませんからね」

夫人は、何故自分の腹からこのような娘が生まれたのか、いつも疑問だった。夫人の姉は、極度の人見知りだったが、夫人は社交的な性質だった。

「どうしたらあなたの人見知りは治るのかしら・・・」

「人見知りではありません。めったやたらに近づいて来るのが嫌なだけです」

「ああ、そう・・・」

今年で１７になる目の前の娘を見て、夫人はため息をつくばかりだった。

「失礼します」

ノックとともに聞えて来た声に、令嬢は顔を少し綻ばせた。

「やれやれ」

母親のため息をものともせず、令嬢は

「どうぞ」

と嬉しそうな声で応えた。

「お待たせいたしました、お嬢様・・・何かご用でしょうか？」

「悪いけど、これ、片付けて頂戴」

そう言って、令嬢は自分の横にあるお世辞にもきれいとはいえない

いたたまれ方をした外套と帽子を指さした。

「かしこまりました」

クローヴィアは顔色一つ変えずに外套と帽子を持ってすぐさま退散しようとしたが、

「ちよつと待って」

と令嬢が引きとめた。

「なんででしょう？」

「終わったらまたここに来て頂戴」

「はい」

クローヴィアが部屋から出て行つてすぐ、彼女は自分で持つてきた旅行用の鞆を広げた。

「やっぱり、ね」

夫人は、何故娘が重たい鞆を自分で持ちたがったのか、うすうす気づいてはいた。そして、歸りに、わざわざ『あの町』に寄つた理由も。

「どうしてあんなに紙を買い込むのかと思ったら……あの子にあげるためだったのね」

「当然です。これほど買つても、私では使い切れません」

テーブルの上には、ひもで縛られた何百枚もの製紙があつた。二人は、歸る途中に製紙業で有名な町でも、特に一級品だと言う店に寄つて来た。そこで買ったのが、この製紙の山である。

「だったら、もっと良いやり方があつたでしょう？取り寄せるとか」

「そうですね、直接渡したかったのです」

「はいはい……」

夫人も確かに、クローヴィアには土産を用意していたし、荷物とともに持つて歸つて来たが、これほど重たくかさばる物にはしなかつた。

「それに、これが一番、喜ばれるんですもの」

「まあ、そうですね」

娘があの子にこれほど懐いたのは、一体何故だろうか。本来

なら、その真逆になるはずだったのに。

夫人にとってクローヴィアは特別な、大事な存在だ。目の前の娘と同じくらいには。だが、だからと言って当の娘が自分と同じようになるのは疑問を禁じ得なかった。

「どうして、あの子がそんなに良いの？」

「それをお母様が仰いますか」

「あなたと私では違うでしょう」

「・・・いいえ、違いなどありません」

「？」

どういう意味かと問おうとした時、再びノックの音が響いた。クローヴィアが戻って来たのだろう。

「どうぞ」

「お嬢様、どうかさいましたか？つて、わあ・・・」

テーブルの上にある白い紙の山に目を輝かせたのは、言うまでも無いだろう。

「お土産よ。あなた、紙が沢山欲しいって言っていたから」

「頂いて、良いのですか？」

「勿論。そのために買って来たのだもの」

「ありがとうございます！お嬢様」

何度も深く礼をするクローヴィアに、彼女はすっかり嬉しくなったのか、めったに見せない満面の笑みを浮かべて見せた。

それを見た夫人は、自分が用意した土産は、後にしておこうと心のうちで決めたのだった。

第3話

「でも、これだけの紙・・・どうやって持って帰りましょう」

クローヴィアにとつての宝の山である沢山の製紙は、彼女一人で持ち帰ることは少々骨が折れるほどであった。しかも、彼女のことを良く思っていない人間など、軽く両の手の指を超える中、紙を抱えて部屋に戻ろうとするなど、自殺行為に等しかった。

「それなら、持って帰らなくても良いんじゃないかしら」

令嬢は割かし真面目に答えた。

「どういう、ことでしょうか？」

首をかしげるクローヴィアに対し、令嬢は、

「だから、紙を使いたいならここに来ればいいのよ」

「えっ、しかし・・・」

いくらなんでも、それはどうかと彼女は思った。自分はいくまでも一使用人でしかなく、何度も何度も主人の部屋を行ったり来たりするのは、無礼だし、余計に目をつけられることになる。

そもそも、そんなことができるほど、彼女は令嬢と親密な関係を築いているとは思っていなかった。確かに、いつも服を片付けたりと言ったこまごまとした仕事は、夫人に呼ばれた時についてとばかりに頼まれることはあったが。

だから、今回のこの土産も、心から驚いていたのだ。まさか、令嬢が自分が喉から手が出るほど欲しがっている製紙を買ってきてくれるなど、思ってもいなかったのだから。

「そんなに部屋が遠いの？」

今まで黙って様子を静観していた夫人が、ようやく口を開いた。

「は、はい・・・あ、でも、今日からメイド長の部屋にお邪魔することになっています」

「メイド長の？」

「あの、今日朝起きたら、制服が無くなっていたものですから・・・」

「・・・」

しまった、とクローヴィアは内心舌打ちをした。あまり良く思われていないことは二人も知っていたが、具体的なことは何一つ言っていなかった。二人には、自分が周囲から冷遇されていることを隠したかったのだ。

「どういう、ことかしら」

最初に口を開いたのは夫人だった。

「私、聞いていないわよ？」

次に口を開いたのは、勿論令嬢だった。

「あ、その・・・えっと、言ったら、心配されるだろうと、思いまして・・・」

「「当たり前でしょう」」

見事に声が重なった。

「今でこそメイドとして働かされているけれど、本当は私の娘よ？心配するに決まっているでしょう！」

夫人は、ソファから立ち上がっていた。淑やかな彼女からは、想像もできない姿だった。

めったに声を荒げない夫人にとっては、随分と大きな声だっただろう。なんせ、娘も、クローヴィアも、目を丸くしていたぐらいなのだ。

「奥様、そのようなことをおいそれと仰るのは・・・」

「事実でしょう？」

「・・・ですが、血の繋がりはありませんし、そんな、娘と言うのは・・・」

「何を言っているの。私にとって、あなたは娘よ」

きっぱりと、夫人は断言した。

「・・・」

「クローヴィアは私の姉だもの」

勿論、本当の姉妹ではない。

それにしても、夫人は今も立ったままクローヴィアを見ているのに対し、娘は冷静に茶を飲みながら、鋭い視線で彼女を射すくめていた。

「・・・」

クローヴィアは、この状況をどうやって打破すべきかと考えたが、思いつきはしなかった。

「あの、ひとまず失礼致します・・・」

これから彼女には、メイドたちが嫌がる雑用ばかりが山積した、今日中に終わるかどうかも怪しい仕事を片付けなければならない。つまり、ここで時間を食うことは、なるたけしたくはないのだ。

このままでは、嘲笑を音楽に仕事を片付けることになるのは火を見るより明らかだ。

一礼して、ひとまず退出すべく振り向いて歩き出そうとした瞬間、手首をつかまれた。

「何処へ行くの？」

薄紫色の、冷たい瞳と眼があつた。

「その、片づけなければならぬ仕事がありまして・・・」

「私よりも、その仕事は大切？」

「はい？」

令嬢は、真剣な面持ちで彼女を見ていた。そこには、冗談の類が入り込む余地は到底なかった。

「えつと・・・」

なんて言えば良いのだろうか、と彼女は思案する。どうしたら、この状況を打破できるだろうか、と。

それと同時に、彼女は自分に対する令嬢の態度の変化に戸惑いを感じてしまった。

先ほどの件もそうだが、彼女自身が何かをしたとは思えないのだから、令嬢の方に何かがあつたのだろうか。

「か、考えさせて下さい」

「は？」

「その、ですから・・・改めて仕事を片づけて、それから、えっと・・・どちらが私にとって大切なのか、判断しますから・・・」

「・・・」

令嬢の顔が、見事に固まっている。クローヴィアは、慌てて

「も、申し訳ありません！私、失礼なことを・・・」

「い、良いわ・・・だったら、さっさとその仕事を片付けて来て頂戴」

「本当に申し訳ありません・・・ですが、今すぐ職場に戻らないと、貴重な睡眠時間が・・・」

「そ、そう・・・」

令嬢の顔が、見事な笑顔を作っている。けれども、とてもひきつっている。それを見て尚、クローヴィアは、

「ひとまず、失礼いたします・・・」

そう言って、部屋を退出した。と言うより、そうするしか最善の方法が思い付かなかった。

それが、最良だとは、彼女は思っていなかっただろうけれど。

クローヴィアがいなくなった後、ようやく婦人は席に着き、娘は何かを考えているのか、目を閉じた。

「良いの？『職場に戻る』って・・・屋敷そのものが『職場』なのに」

「良いのです。それに、考えてくれるそうですし」

「それで、仕事の方が大切だ、って言われたら？」

しばしの、沈黙。

鳥の囀りが、窓の外から聞こえている。もうじき、昼食の時間になる。

「・・・私の相手も、仕事でしょう？」

「そうね、同じ『仕事』、でしょうよ。けれどそれは、義務であり、『強制』ね」

「・・・」

再び、沈黙。落ち着かない静けさが周囲を包みこむ。普段なら気にならない時計の針の刻む音も、風の音も、すべてが耳にこびり付いて行くような、不愉快な感覚。

「今日のお昼は何かしらね」

普段ならさして気に留まらない、何気ないその言葉も、今の状況ではひどく場違いなものようだった。現に、夫人は言わない方が良かっただろうかと考え直した。

しかし、この状況よりかは、沈黙を埋める言葉を放っている方が遥かにマシだと思えたのだ。

「さあ、何でしょう。でもきつと、今頃厨房は慌てているんじゃないかな」

「その原因はあなただけだね」

母親の嫌みを、娘は受け流す。

「これなら、折角ですし、外食してから帰れば良かったですね」

「そうねえ。でも、やっぱり、」

「家に帰りがたかった。だって、」

「娘の顔を、」「姉の顔を、」

「少しでも早く見たかったから」

その直後、二人の笑い声が室内に響いた。

部屋を出てすぐ、クローヴィアは自身の『職場』へと急いだ。

「ああ、どうしょ・・・このままじゃ、今日も睡眠4時間以下・・・」

最近、仕事が多くて長時間の睡眠時間を取れていなかった。本来、メイドたちは最低でも5時間から6時間程度の睡眠時間があるのだが、寝てしまえば翌日に持ち越されてしまう。そうになったら、それこそ徹夜せねばならない。

「やっぱり、強く言えばよかった・・・」

しかし、行かなければよかったとは微塵にも思っていない。

婦人たちがいた部屋は屋敷の最上階で、彼女の職場は屋敷の一階の、一番北側にある。

「レティがやっているのかしら・・・でも、レティにもほかに仕事があるだろうし・・・」

最近、まともに話してくれるようになった、クローヴィアにとつてとても貴重な、稀有な人間。彼女の山積する、他のメイドたちから一方的に押し付けられた仕事を手伝ってくれる、親切な少女。

レティにだって、やらなければならない仕事は沢山あるのだ。厚意に甘えては、いけない。

「急がなくっちゃ」

彼女は今、聴覚を遮断していた。

だから、クスクスと笑う他のメイドたちの声も、沢山の剣のように鋭い悪意の言葉も、彼女には届いていなかった。

階段にさしかかったところで、クローヴィアは周囲を見回した。

「仕掛けは・・・特にないわね」

あまり人の通りが無い、うらさびしいふうに見える木造の階段は、使用人達が使うもので、今の時間帯ならば、殆どが食堂に詰めかけていることだろう。先ほどの、一部の例外を除いて。

彼女は前に、人が少ないからと油断して、そのまま階段を駆け下りようとしたら、木が古かったからか、穴をあけたことがある。踏んだ足は見事に嵌り、足をくじいて大変な目に遭った。

後にメイド長から聞けば、階段に使われている木材が古くなったから、使用を禁止していたらしい。当然、張り紙も張ってあったし、紐で『うっかり』が無いようにと一種のバリケードも作っていた。だが、それが無かった。

故意であることは明らかで、つい最近、レティが紐や張り紙を捨てているメイドたちを目撃したと言っていた。

だからこそ、同じ轍を踏むわけにはいかない。注意は何重にもし

ておいて損は無い。

「そーつと、そーつと・・・」

ゆっくりと階段に足を踏み入れたが、木材特有のギシギシとした音もさほどしなかった。

「あら、大丈夫、かしら・・・」

それから慎重に階段を下りたが、一階に至るまで、何も起きはしなかった。

急ぎ足で『職場に』到着し、クローヴィアは仕事を始めた。

今日は、昨日よりも早く片付きますように、と心の中で祈りながら。

第3話（後書き）

クローヴィアの仕事は、次の話で明らかになる予定です。

第4話

「さて、ちゃっちゃと片付けよう・・・今日こそは、きよ、今日こそは今日中に寝るのよ！」

そんな決意を元に、クローヴィアは仕事を始めた。彼女はメイド服では無く、薄汚れたつなぎ姿だった。

この屋敷では、メイドがやる仕事と言えば、部屋の掃除や洗濯、それとこの屋敷にすむ伯爵一家の世話くらいなのだが、クローヴィアがこれからすることは、それらのどれにも該当しないものだった。

「えっと、手袋手袋・・・あと、鉢にあ、ランタン」

さまざまな道具を手に、彼女は朝、メイド長たちと落ち合った裏庭に出た。裏庭は、彼女が仕事部屋と呼ぶ北側の部屋を出てすぐのところにある。

「さ、今週中にこの庭は終わらせなくっちゃ」

帚を持ち、まずは庭に落ちているゴミや落ち葉を払う。キリが無い類の仕事だが、しなければ見た目が悪い。

「ま、こんな場所、誰も来ないだろうけど」

事実、この庭を知る者は少ない。中庭や、前庭は腕利きの庭師によつて整えられ、美しいことで有名だが、裏庭は存在そのものが知られていないのだ。

そんな場所の掃除をするように指示したのは、主人である伯爵その人だった。

「あの方も、私が嫌いなら追い出せば良いのに」
どうせ、私は妾の子だもの。

クローヴィアの呟きは、誰にも届くことは無かった。

「そもそも、どうして庭師の仕事を私にやらせるかな」

仮にも、彼女はメイドであつて、庭師では無い。

粗方掃き掃除が終わると、次に見た目の悪い枝や葉を鋏で刈つて

いく。裏庭は、中央の池に沿うようにして樹木が植えられ、3重のマルが池を囲んでいる。池を茂みが囲い、その茂みをバラの木が囲い、さらにそのバラの木をまた茂みが囲っている。

「池には魚の一匹もないしねえ」

池には冷たい水が張られているだけで、睡蓮の花が咲くわけでもなければ、カモが泳いでいるわけでもない。ただ、水があるだけだ。バラの木は、まだ季節では無いのか蕾も無く、この空間内にあるのは緑だけで、どこかさびしげだった。

「この花も咲かせない茂みって、一体何の木なのかしら・・・」

きつと調べれば何らかの名前があるのだろうが、クローヴィアには植物の知識はさほどない。

黙々と鋏で作業を続けて行くと、次第に眠気に襲われてくる。パチン、という音が一定間隔で、と言っても不規則ではあるのだが、続いているせいか、いつもこうなってしまう。

「ね、眠たい・・・」

だが、勿論眠る暇などない。うらさびしく、誰も来ない裏庭だが、とてもだだっ広い。無駄にスペースがあるため、手入れにずっとかかりきりだ。

しかも、クローヴィアの仕事はこれだけでは終わらない。ある程度、ここの整備が終わったら、今度は家畜小屋の掃除も待っているのだ。

「担当の人、もう高齢だからって腰を痛めちゃったし」

この屋敷では、基本的に自給自足がルールである。住宅街の中にある屋敷の一つとはいえ、その敷地面積は広大で、畑で作物も育てている。

そういう部署から抜けた人の分の穴埋めは、大抵彼女にお鉢が回ってくる。

それでいて、彼女には碌な給料など支払われてはいない。なんせ、クローヴィアは妾腹の子ではあっても伯爵の娘である。つまり、これは『お手伝い』として扱われているのだ。彼女はメイドとして働

いてはいるが、扱われてはいないのである。

「これで少しでもお給料もらえるんなら、私、もつと働いたった構わないのにね。それか、いつそ離縁して私なんかこの家の人間じゃない、って言うてくれれば良いのに」

クローヴィアは、めったに実の父親と顔を合わせない。一月に一度、会えば多い方だった。それぐらい自分が嫌われているのは知っている。でも、それならどうしてこの屋敷から追い出してくれないのだろうか。

「あー、またループするからこのあたりにしておこう」

どれほど呟いても、どれほど考えても、答えを持っているのは父親で、クローヴィアを娘と思っているかも怪しいその人に、彼女は関わろうとは思っていなかった。

「せめて、お母さんの命日だけはお休みをもらいたいなあ・・・」

彼女の母親は、屋敷から数時間歩いたところにある、共同墓地に埋葬されていた。

毎年、この日だけはと休みをせがむのだが、今までもらえたことは一度も無かった。

「来週かあ・・・」

来週の今日が、母親の命日。

「どうせ、今年も仕事で終わりだろうから良いけど」

とうに、諦めのような物はあった。きつと自分は、良いだけ利用されて、最後は捨てられてお終い。それが分かっていたから。

「使い捨ての道具には、お休みなんていらなんでしょうよ」

自嘲も何も、聞いてくれるのは周りの植物だけ。だから当然、返事は無い。

黙々と作業を続け、とうにか夕方前には作業は大方終了した。

「あら、お空の色が変わってる。次の仕事をしなくっちゃ」

道具を全て背負って、クローヴィアは数時間ぶりに仕事部屋に戻った。ほこり臭くて、綺麗とはお世辞にも言えない粗末な場所。けれど、彼女にとって、ここは一種の避難場所のような物でもあった。

「ちょっと休憩しても、誰も文句言わないよね・・・」

そう言ってもともと置かれていた木製の汚れたテーブルの下に収納されている、小さな同じく木製の椅子を引っ張り出して、それに腰掛ける。

ふと、テーブルに置かれているモノに目がとまった。

「何？コレ・・・」

黄色のリボンで飾られた、小さな、彼女の手に乗つかるくらいの箱が置かれていた。

「随分きれいなね」

この、薄汚れた場所とは似つかわしくない、綺麗で品のあるものだ。

恐る恐るリボンをひも解き、箱のふたを開けると、

「うわー美味しそう」

色とりどりのキャンディが、セロハンに包装されて入っていた。

「あ、メッセーじ付きだ」

『仕事の合間に食べて下さい。きっと忙しくて食事を取る余裕も無いでしょうから』

「この字、奥様のだ」

と言うことは、このキャンディはきっと、夫人からの土産なのだろう。

「ありがたいです、奥様・・・！」

早速一つ口に放る。ちょうど良い甘さと果物の香りが口に広がる。

「これで何とか頑張れそう」

残りのキャンディの入った箱をつなぎのポケットにしまい、道具を確認してからクローヴィアは次の職場へと向かった。

家畜小屋は、裏庭から南側に歩いたところにある。丁度、中庭の後ろ側で、人目につかないと言う意味では裏庭と近かった。

「あらあら、豚さんが一匹減ったのね」

ということは、この家の人間達の胃袋の中におさまったのだろう。「おや、山羊は1匹増えた。春だもの、出産ラッシュね」

今はまだ肌寒い春の初めである。この地方は雪は降らないため、冬でも比較的暖かいが、春先は冬の半ばと同じくらいの冷え込みとなる。

「赤ちゃん山羊が風邪をひかなければ良いけど・・・あ、せっかくだからわらを増やしておこうか。せっかく持って来たんだし」

山羊のいる小屋になるたけ音を立てずに入ると、クローヴィアは背負ってきたわらを下ろし、赤ちゃん山羊の隣に寝床になるくらいの量を敷いておいた。

「これで何とかなるかしら。どうせ、お母さんと一緒に寝るんだろうし」

周囲の山羊は、最初こそ警戒した風だったが、いつもやってくるクローヴィアだと分かった途端に警戒を解いた。

「なんで人間様よりも動物たちと仲良くなってるのかしらねえ」

たまに喉が渴くと、乳を搾らせてもらって飲んでいたりもする。

手早く糞や食べ残しを始末し、わらを敷きつめていると、小屋の外で物音がした。

「ん？」

山羊たちも当然聞こえたのか、音のした方に首を向けている。

「何、野良犬でもやって来た？」

小屋を出て、あたりを見回す。薄暗い世界には、小屋のほかに、

「そこにいるのは誰ですか？」

「！」

ガサツと音がした。

「あの、私特に何もしないので出てきてくれませんか？その・・・私、一応この屋敷のメイドみたいなものですから」

「・・・メイドが、家畜小屋の掃除をするのか？」

聞えて来た声は、クローヴィアと同年齢か、少し上の男性のものだった。

「ええ、私の仕事ですの」

「・・・」

それから少しして、音の正体はクローヴィアの前に現れた。

「えっと・・・どちらさまでしょうか？」

音の正体は、随分と立派な恰好をした青年だった。薄暗くて顔や様相は良くは分からなかったが。

「この屋敷に招かれた客人、のはずだ」

青年はどこか困ったように答えた。

「あらあら・・・お客さまでしたか、それは失礼致しました。こんな恰好で申し訳ないのですが、とりあえず、道に迷ったと言うことでよろしいですね？」

「・・・ああ」

道に迷った、と認めるのはさぞかし屈辱的だろうが、この広さだ、無理も無い。

「では、どちらにご案内いたしましょう」

「ひとまず、玄関まで頼む」

「玄関、正面玄関、と言うことですね」

「ああ」

クローヴィアは、脳内の屋敷の平面図を広げた。家畜小屋から、正面玄関までの最短ルートはどこだろうかと考える。

「それでは、ご案内いたします」

ゆつくりと、最短ルートを辿る。ここで彼女は、置いてきたランタンを持ってくればよかったと後悔した。そうすれば、より確実に道を進むことができたのに。

「お前、名は？」

後ろから、青年が問いかけてくる。

「クローヴィアと申します」

「クローヴィア・・・霞草の別名だな」

「はい」

「何故、メイドが家畜小屋の掃除を？」

「先程も言ったはずですが、それが私の仕事だからです」

「そつか・・・」

それきり、二人の会話は途切れた。

クローヴィアは内心、さつさと小屋に戻って仕事を再開させたくて、次に何をするかを考えていた。今の彼女には、どれだけこの口スを取り戻せるかが最大の関心ごとだった。

「あちらが、正面になります。恐らく、ノックをして名を名乗ればドアが開くはずです。そこで道に迷ったなりなんなりと仰れば、それで万事解決です」

二人は、屋敷の横を通って来ていた。今、二人がいるのは正面玄関に続く前庭の横の茂みの奥だった。

「仕事中にすまなかつたな」

「いえ、お気になさらず。では」

一礼して歩いてきた道を戻ろうとしたクローヴィアに、青年が後ろから声をかけた。

「名前を、言っていなかったな」

「そういえば、そうですね」

彼女には、それこそどうでもよかったのだが。それでも、相手は客人だ、無礼はできない。

しぶしぶ振り返ると、庭の近くの照明で照らされた、青年の顔があった。

「ライファスだ」

「ライファス様、ですか」

漆を塗ったような黒髪に、同じく夜の闇のような黒い瞳。病的な白い肌と相まって、些か頼りなさげに彼女には見えた。

「クローヴィア、とか言つたな。後日改めて礼をしたい」

「いえ、結構です」

「・・・は？」

端正なライファスの顔が、見事にゆがんだ。

「私、この屋敷であまり好かれていないので、なるだけ波風を立てたくありませんから」

「・・・なら、どうすればいい？」

「どうもしなくて良いのです。礼だけで結構です」

「・・・それで本当に良いのか？」

「はい、それだけで」

内心、早く小屋に戻りたい、さっさと帰りたい、とばかり思っているクローヴィアには、ライフアスのやりとりは、鬱陶しいものでしかなかったのだ。

「そうか、分かった・・・」

そう言っ、ライフアスは玄関へと歩いて行った。

それを見送るクローヴィアは、

「今日は早く終わらせたいの・・・」

口の中で転がる飴をかみ砕くほどには苛立っていた。

第5話

『 どうかこうにか、たいへんな一日を乗り切ることができまして、今、こうやって文章を書くことができています。実は、紙をどうやって今私がいる部屋にまで持ってくるか、という最大の懸案は、心優しい奥様が届けて下さったおかげで解決しました。』

奥様は、私の必要な物をここぞとばかりに下さるのですけれど、一体どうして分かるのでしょうか。お嬢様もそうですけれど・・・さて、自分しか読む人間がいらないのにもかかわらず、こう、自分のことを書くのは気恥ずかしい気もいたしますが、これくらいしかうさはらしがありませんから、仕方ありませんね。

それでは本題に入りますが、立派な製紙をお嬢様から頂くことができました！しかも、量がすごいのです。なんと500枚以上あります！しかも製紙だから両面に書くことができます。つまりは本にするなら1000ページです！凄いです・・・本人にちゃんとお礼はしましたが、ここにもしておきましょう。お嬢様、本当にありがとうございます！！

そして、奥様からもお土産を頂きました。奥様からは、綺麗な色の、飴でした。早速一つ舐めました、とっても美味しかったです。ですが、残念なことに、少々、いえ、とても苛々してしまうことがあったので、なんと、かみ碎いてしまいました。本当に勿体ないです・・・飴なんて、めったに口にできないものなのに。

そうそう、山羊の赤ちゃんが可愛かったんですよ。今朝生まれたばかりなのか、色も他の山羊たちとは違ってましたね。わらを敷いておいてあげたから、これで寒い思いもしないでしょう。あ、そういえばオスなのかしら、メスなのかしら・・・明日、確認しておかなければなりませんね。

それで、その苛々してしまったことですが、お客様が、しかもあらかじめ来ることが分かっていた訳ではないお客様が、屋敷内で迷

つていたんです。それで、まあ、案内して差し上げたのですけど・
何と云うかまあ、頼りげの無い、優男でございましたわよ。それだ
けなら、まあ、別に良いのですけれど、その方のせいで仕事が終わ
るのが遅れてしましましてねえ。

後で聞いた話、お嬢様に会いに来られたとか。名前はライフアス
つて言っていましたけれど・・・昔小耳にはさんだセルベラン侯爵
家の二男坊なんですってね。そりゃあ、立派な服を着ていましたし、
貴族のお坊ちゃんなのは予想ができましたけれど・・・確か、セル
ベラン家の二男坊って、お嬢様の婚約者ですものね。会に来るのは
当然と言えば当然です。

まあ、あのような頼りない優男な方がお嬢様の将来の夫君だと思
うと、お嬢様が哀れと言いましょるか・・・これ以上書くと不敬で
お咎めを受けそうなので、このあたりにしておきます。

そうそう！明日から、仕事が減るんですって！なんでも、メイド
長様が伯爵に進言してくださったとか。しかも、奥様もお嬢様もそ
の意見に全面的に賛成だとかで、私は明日から、今日の半分以下の
仕事で済むんです。でも、それで家畜小屋の仕事が無くなってしま
ったので、明日で山羊さん達含めた動物たちとはお別れです。

それで、肝心の仕事なんですが・・・衣装部屋の整理ですって。
それだけなら、別に良いのですけれど、奥様の、衣装部屋の整理
なんです。ちょっと待って欲しいのは、これでどれだけのメイドさ
ん達を敵に回すのかしらってことなんですよネエ。だって、私ただ
でさえこの屋敷で嫌われているんですよ？理由は、まあ、妾の子だ
から、とか、伯爵に嫌われているから、とかなんでしょうけれど、
そういう人たちは大抵奥様とかお嬢様のファンだったりなので、正
直生き残れるかどうか・・・

明日も早いので、今日はここまでにしておきます。では』

フェテリエス伯爵一家の朝は早い。それはつまり、使用人の朝はさらに早い、ということの意味する。

最も早く仕事を始めるのは屋敷の使用人をまとめる執事だが、メイドたちの朝も当然早い。そして、ただでさえ早起きなメイド長と同室のクローヴィアは、当然メイド長に起こされる。

本来のメイドたちの仕事開始時刻は6時である。

しかし、クローヴィアの仕事開始時間は、執事とメイド長に次いで早かった。

「・・・おはようございます。今日も太陽が昇る前ですね」

おはよう、と寝ぼけ眼のクローヴィアにメイド長が言った後、クローヴィアがメイド長に返した言葉は、既に朝の挨拶のようなものとなっていた。

「何度も言いましたが、太陽とともに起きる日など、メイドを続ける限りは来るはずが無いのです」

「その通りですね・・・」

あくびを噛み殺しながら、クローヴィアは手早くメイド服に着替える。とうに着替えを済ませたメイド長に遅れを取ってはならない。空はまだ薄暗く、室内は明かりを灯さなければ良くは見えない。

そんな中、なるだけ音をたてないように注意をしながら、着替えをすませ、そしてようやく席に着く。

朝食の支度をしているメイド長を見ながら、クローヴィアはどうしてこうなったのかとぼんやり考えていた。

メイド長と同室になってから、クローヴィアの朝食はメイド長が担当している。

もともと自身の朝食を自炊で済ませていた彼女だが、クローヴィアの分もついでにと用意してくれる。というよりも、料理が苦手なクローヴィアに作らせたら、朝から十分に仕事をするのができなくなるのだ。それくらいに、クローヴィアは料理が苦手だった。

メイド長の部屋は、もともと小さな厨房のような場所だったため、

キッチンが備え付けられている。決して広くはないが、ベッドとタンス、それと必要最低限の家具一式しか置かれていないため、二人でも十分生活できる程度のスペースはあった。

キッチンのすぐ後ろに置かれた丸テーブルを二人で囲み、ゆつくりと紅茶をすすり、朝食を取るだけのささやかな、けれども特別な時間は、クローヴィアの楽しみな時間である。

メイド長は多忙の身であるため、二人で食事を摂れるのは朝しかないのだ。

「さ、できましたよ」

いつもの仕事用のエプロンでは無く、私用の薄紫色のエプロン姿をしているのを見ることがするのは、クローヴィアにとって特別なことだった。

このエプロンをしているときは、仕事上の上司では無く、厳しくも優しい母親のように、彼女の眼には映っていたから。

「・・・クローヴィア。朝の五分がどれほど貴重かは知っているでしょう。さっさと食べなさい」

「は、はいっ」

つい、メイド長に見入っていたなどと、言えるはずも無かった。

二人が同室になって、二週間目の朝だった。

「人生とは失敗の連続です。ですから、失敗してしまったことにシヨックを受け、折れてしまっってはなりません。重要なのは、失敗によつて得た経験を、次に生かすことなのです。・・・良いですか、人生とは、ある意味、失敗からどれほどの経験値を積むことができるか、ということにかかっているのです。『失敗の経験値』と言う言葉がありますね？これは、忌むべきものでは無く、次へと繋がる貴重な過程となるものなのですよ」

柔らかな、春の暖かな風のような声が、空間に響き渡る。

ぴんと張り詰めた、美しい水面のような静寂は、彼女の声をむしる助長するものとなり、静かではあっても、居心地の悪い静けさは程遠かった。

無駄に広い、少々間の抜けたような空間にいるのは二人だけ。

「さて、これで満足いただけましたか？」

先程から、教え諭すように語り続けていた女性が、少し間を開けてから再び口を開いた。

少々、皮肉を込めたように聞えるだろうと考えて、本当、自分は嫌な性格の人間だと自己嫌悪に陥って、そして、何故、私は清らかでなければならぬのだろうかと考えて、ああ、自分は聖女の愛娘だったのだったか、と思い出し、再び自己嫌悪というループ。終わりの見えない螺旋を何度も行き来しているようだ、と彼女は心のうちで笑う。

「満足、という言葉の定義をあなたと議論するのは骨が折れそうですから、そういうことにしておきます。ただ・・・」

少しばかりの皮肉を振りかけられた相手は、それに全く影響を受けなかった、と露骨に顯すような冷めた態度で、目の前の女性を見据えていた。

結局は、平行線。

「私は、あなたとここで会話を成立させなければならないのだそうです」

相手は、面倒くさげにそう言う。

「それは私も聞いていますが、正直、あなたが精神異常患者だとは全く思えないのです」

彼女は、今日、この数時間で何度も呟いた言葉を繰り返す。

「そうでしょうね、あなたは心優しいから」

相手は、今日、この数時間で初めての言葉を呟いた。

「はぐらかさないで下さいな。あなたは、私で無くとも、会話を成立させることができるでしょうし、そもそも精神に異常をきたして

などおりません。そうでしょうか？」

はぐらかされたことへの苛立ちよりも、平行線が平行線のままであることへの未練は大きい。

「ええ、まあ。正直な話をしますと、私はあなたにだけはお会いしたくなかったものでして。それが、『異常』と取られた原因かもしれないけれど」

「私と会いたくなかったのですか。それは初耳です」

彼女は、初めて眉を上げる。

「あなたに会いたくない人間など、どれほど探しても私くらいな物でしょうね。実際、あなたはそういう存在だ」

「・・・そのような言葉が、私を縛り付けるのでしょうか。だからこそ、私はあなたと会いたかったのですが」

彼女は、初めて笑みを消す。

「あなたの欲しい言葉を喋ったつもりはありませんがね」

相手はあくまでも冷めたまま。

「私にとって、毎日褒め殺されることがどれほど辛いことか」

「あなたは・・・何と言いましょねえ・・・まあ、とても優しい訳ではないのでしょうか。けれど、仮面はもう取れませんか」

「取れたなら、とうの昔に取りましたよ。それを許さないのは、他でもない私自身なのかもしれません」

話しているのに、二人にはなれない。

結局は、平行線。

結局は、一人と一人。

彼女は、いつも一人。

相手は、永久に一人。

「ええ、あなたは、結局今の居場所にしがみついているだけですか
ら」

一人が、一人へ。

自分そっくりな、けれど大きく違う相手へ。言葉を放り投げて、
そのまま。

「あなたがそれを諦めることができたのに、私はできませんでした。立場の違いはあれど、重責であることは変わりませんのにな」

「・・・遠まわしに自分が臆病だと言って欲しいと、そういうことなのでしょうけれど、あなたは臆病なわけではありませんよ。臆病なんてそんな、そんな高尚なものじゃあ、無いでしょう」

「ええ、その通りです」

初めて罵られた事実など、彼女は目もくれず。

「たとえば、あなたのその執着は、生きたい、という願望ととてもよく似ているように僕には思えるのです。つまりは、生きるための仮面であり、生きたいから仮面を貼り付けた・・・違いますか？」

「それが正解なのでしょう。だから、私はあなたと話しているのです」

彼女は初めて心からの笑みを。

「やはり、あなたでしたか。私を精神異常患者に仕立て上げたのは」
「おめでとうございます。それが本質であり、変わることの無い真実です」

彼女は、声を上げて笑う。かみしめるように、笑う。

「話相手が欲しかったのですか？それなら、他にもいくらでも手はあつたはずでは」

「上っ面の話し相手など不要です。だから」

「あなたは初めてルールを曲げた」

「それでも、曲げるほどの価値はありましたよ？あなたは、私の本質に辿りつけた最初の人です」

「最後の人にならないことを願いますよ」

相手は初めて目をそらし、

「あらあら・・・これで私が殺されたなら、世界情勢はどうなるのでしょうか。本当なら、何一つ変わらないはず、変わらないのが当たり前なのに」

彼女は目をぐるりと回す。

「あなたがこの世界からいなくなつたならば、少なくとも太陽が無

くなるのと何ら大差はないでしょう」

相手は真面目な顔で言う。その視線の先は、高窓越しの、曇天。
「それを否定できるくらいに、気楽な立場に生まれたかったのがねえ」

突如、雷鳴。眩しい、一瞬の光ののちに、

「これで、僕は精神異常患者から、ただの精神異常者に戻るわけですか」

「どれほどの違いがありましたか？」

「近いようで、遠いのです。ほら、今は隠れている太陽と、月くらいには」

「・・・そうですか」

「では、僕はこれで」

雨が降り始めた。ざあざあとやかましい音が、室内にも響き渡る。最後に、一つだけ

彼女は、何ともいえぬ表情で、相手を見つめた。

「なんででしょう」

「私は、一応預言者なのですが」

「それくらいは知っています」

「ですから、一つだけ」

「・・・」

「あなたがこれから出会う方は、あなたを愛するでしょう。ただし雷鳴が響く、広い広い、空間で、彼女は一人、向かいを見つめる。向かいの椅子には、誰も腰掛けてはおらず、テーブルの上には、冷めてしまった、全く手のつけられていない二つの紅茶のティーカップ。

「精々気をつけることですね」

彼女は笑う。慈愛に満ちた顔で、まるで、目の前に花畑が広がっているかのように。

「一組の平行線に、交わりをもたらしたくないのなら」

第6話

発端は、いつも些細で小さな波紋から。

崩壊は、いつも些細で小さな亀裂から。

「始まりは、あなたの一言から・・・」

人間の皮を被った魔女は、これから先に起こるであろう愉快的な演目に、笑う。

「あなたがいい子ぶっていたとしても、結局結果は変わらないわあ」
愉快で滑稽な、全てが全て、予定調和の舞台の上で、踊らされるは『操り人形』。

雨はようやく降りやんで、青空が顔を見せた頃、

「さあて、始めましょうかあ…楽しい楽しい舞台の幕開けよ」

魔女は言う。

最初の目的とは違うはずだけでも、到達点は、同一。

小さな復讐は、大きな享樂へ。

「エディラちゃんのためにい…派手に始めてあげましょうねえ」

手元には、意図的にボロボロにされた小さな肖像画。

「情報から遮断されたアンタにも、届くくらいど派手にさあ！」

魔女は肖像画をあっけなく破る。紙くずとなったそれは、青い焔に包まれ消え去った。

真つ赤な爪に滴る赤黒い血が、冷たい地べたに一滴。

その一滴は、瞬時に広がって行った。

青くなりだしたはずの空は再び暗雲に包まれ、そして。

その日、クローヴィアは生まれて初めて屋敷の外に出た。

空は雲の多い青空で、馬車の窓から顔を出しながら、彼女は街並

みを食い入るように見ていた。

「そんなに珍しいものかしら？」

クローヴィアの隣に座る令嬢は首をかしげ、向かいに一人で座る夫人はにこやかな顔で沈黙を保っている。

「はいっ！私にとつて、初めての『外』ですから」

上機嫌で応えるクローヴィアに、夫人は笑顔で返し、令嬢は首を更にかしげるだけだった。

「そんなに凄い？」

「初めて、という付加価値がついたらこうなるわよ、あなただって
「そういうものなの？」

「はい」

クローヴィアは嬉しそうに言う。

「本当は、不謹慎なんですけどね、今日は母さんの命日だから・・・」

「きつと、あの人も喜んでいるわよ、娘が会いに来てくれるのだから」

「だと、良いんですけれど・・・」

クローヴィアはこの日のためにと夫人が用意してくれた喪服に身を包んでおり、その手には生前、母が好いていたというスカシユリの花束があった。

「スカシユリって、太陽みたいな色ですよ」

「そうね。あなたの母親は病気がちな人だったから、力強い太陽の色に憧れていたのかもしれないわ」

「・・・そうなのかもしれませんね」

彼女の母親は、彼女が幼い時に病死しているため、顔すらおぼろげにしか憶えていない。

現に彼女は、自分の母親が好いていた花すら今日、初めて知ったぐらいなのだ。

「そういえば、」

今まで黙っていた令嬢が口を開いた。

「植物園の温室の花がそろそろ咲くんじやないかしら」

「植物園？」

クローヴィアは首をかしげた。屋敷には温室などは無い。

「ええ、そう。花好きのエマニエル王女が建てた植物園。これから行く墓地をさらに北に行ったところにあるの」

令嬢はクローヴィアの座る方の窓から見える墓地の更に向こうを指差して説明した。

その時、令嬢の頬がクローヴィアのそれと触れ、思わず令嬢が顔を赤らめたのを、夫人は見なかったことにしたし、当のクローヴィアは説明に聞き入るのに夢中で全く気にしてなどいなかった。

「そうね、もうそんな時期になるのね」

しみじみとした口調で、夫人は言う。

「毎年母様と私は、王女に招待されて植物園に行くの。温室の中にあるサロンでお茶会があるのよ」

「それはすごいですね」

サロンとは何か分からないし、お茶会がどのように行われるのか上手く想像できないクローヴィアには、とにかくすごい行事、とかイメージが出来なかった。それは、偶像上の存在しない何かに憧れるような感覚。

「でも、私・・・今年はお茶会の日に学校へ行かないといけないのよね」

元の位置に戻りはしたが、先ほどよりも距離を詰めて令嬢が座っていることに、やはりクローヴィアは気付いていない。

「王女様のお誘いを断ったりって、出来るんですか？」

令嬢の方を向けば、思ったよりも近くに顔がありはしたが、疑問に対する返答の方が彼女の優先度は高かった。

「そこなの・・・学校を休むわけにもいかなくなってしまったし・・・」

「大変ですね、お嬢様」

「何言ってるの。あなたが代わりに行くのよ」

「え？」

真剣な令嬢の眼差しが、すぐそこにあつた。

「まあ、それで良いんじゃないかしら。あなたも一応伯爵家の人間なのだし」

横から夫人が助け船を出す。

「ですが、それでは迷惑がかかりませんか？」

「大丈夫大丈夫。政治的な思惑なんて一切関係ない、ただのお遊びみたいなものだから」

にこやかに夫人は笑い、

「行ってくれるでしょう？おねえさま」

意地の悪い笑みで令嬢はクローヴィアを見据えた。

「・・・でも、私・・・お出かけ用の服なんて持ってないですし・・・」

「それくらい、用意すればいいのよ。なんなら、私の服を貸しましょう」

「駄目よ。あなたの服ではクローヴィアには大き過ぎるもの・・・
そうだわ」

何かひらめいた、と言わんばかりの顔で、夫人は提案した。

「帰りに買って帰りましょう」

「え？」

「丁度スピレイアの夜会用のドレスを新調しなくてはいけなかったところだから、ついでに済ませてしまいましょうね」

「・・・また、買うの？」

少々げんなりとした様子の令嬢に対し、夫人は変わらず

「仕方ないでしょう。相手が相手なのよ？あなたの将来の夫は、あ
ろうことか侯爵家の人間なのなもの」

ああ、あの頼りげの無い貴族のお坊ちゃんか、とクローヴィアは
苛立たい記憶を呼び覚ます。

「・・・クローヴィア、どうかしたの？すごく変な顔をしているわ」
「え？あ、すいません・・・なんでもありません」

思わず、顔を思いだして苛立ってしまった。その後、色々と厄介なことが相手のせいで重なり、彼女の睡眠時間は前日よりさらに削られることになったのだ。

とは言っても、大幅に寝るのが遅れたのは、彼女が紙に文章を書いていたからなのだが。

「あなたが、セルベラン様を案内してくれたのでしょうか？彼、不思議がっていたわ・・・メイドが薄汚れた作業着姿だったって」

「もしかして、それが労働時間が大幅に減った理由ですか？」

だったらなんだか嫌だ、とクローヴィアは思った。

「いえ、それは一つの理由でしかないわ。ただ単に、メイドのする仕事では無いって、母様が父様に言っただけ。あ、そうそう、これでああなたは正式なメイドよ。これからはちゃんとお給料ももらえるわ」

「そうなんですか？」

「ええ」

「有難うございます！奥さま、お嬢様」

「良いのよ、当り前のことをしただけだから」

「そうよ、あなたは働き過ぎなのよ」

「そんなことは・・・」

「二人とも、到着したわよ」

気付けば、馬車は止まっていた。

慣れない馬車から慎重に降りて、クローヴィアは大きく深呼吸する。肌寒い風が、今は心地よかった。

墓地は中央に大きな一本道があり、その横に整然と墓が並んでいる。

周囲は住宅地なのに、一歩踏み入れただけで別世界に來たような静けさだった。

「綺麗な空・・・」

屋敷の敷地内から見る空と、何一つ変わらないはずのそれが、とても澄んで見えたのは、気のせいでは無いと彼女は思った。

先ほど、屋敷の門から外に出て、見上げた空と繋がっているこの空が、クローヴィアには羨ましかった。

際限無くどこにでも繋がっている空は、今までずっと同じ場所にいた自分とは、正反対だから。

「屋敷の外の空なんて、これから飽きるほど見れるわよ」

令嬢の言葉に、彼女は顔を綻ばせた。

「本当ですか？ だったら、すごく嬉しいです」

「嘘じゃ、無いわよ」

自由な空の下にいる自分が、何のしがらみも無いのだと錯覚してしまうようではあったが、それでも幸せだと、彼女は確かに感じていた。

「さあ、行きましょうか・・・あなたの母親のお墓は、墓地の最奥部にあるの」

風になびく髪を手で抑えながら、夫人は道の中央を歩き出した。

「最奥に、ですか」

遅れないようにと急ぎ足で後を追う令嬢とクローヴィアは、

「ええ、あまり人が立ち入らないからって・・・まったくあの人は夫人が怒っているのでは、思い、不用意な発言は控えようと決め込んだのだった。

「人は人を羨む生き物ですな」

泣いている人が彼女は苦手だ。けれどそれをおくびにも出さず、彼女は淡々と語りかける。

「けれど、欠点は誰しもあるのです」

先ほど手渡した彼女のハンカチは、相手の涙でぐっしりと濡れていた。それほどの涙がよく出るものだと言いきながら、彼女はさらに言葉を紡ぐ。

「人から羨まれる方にも、欠点の一つくらいはあるのです」

「欠点・・・？ 噓よ、あの人になんかそんなの」

相手の甲高い声を聞き流しながら、彼女はゆるりと首を振る。

「あなたが羨ましがるところには、その方なりの欠点や課題があって、それを解決せんともがいているのですよ」

「違う、違うわ・・・価値観が違うのよ、だから・・・」

「価値観の違い・・・そうですね、価値観は違うでしょう。あなたにとっての凄いこと、その方にとっての凄いこと、それはきっと違うはずです」

「・・・つまり、私の凄いことって、全然凄くないのよ。だから、だから・・・っ、あんなこと、言われっ・・・」

再び泣きだした相手を宥めるべく、彼女は優しげな声を出す。

「あなたは優しい方です」

「・・・え？」

「だから、そうやって長所ばかりを見つけれられる」

「優しい？ 私が・・・？」

にっこりと笑い、そして、

「それは、あなたの長所ですよ」

彼女は自身が苦手とする人間を相手にする時、必ず自分が下手になるようにしていた。それでいて、話の主導権は自身が握る。そうすることで、話は円滑に進んでいく。

「良いですか？ あなたはとても人を見る目がお有りのようです。そしてそれが、私にはとても羨ましいことです」

「あなたが・・・ですか」

意図的に、哀しげな顔を作る。実際には、少しも哀しくは無いのだが。

「私は・・・沢山の方とお会いしてきましたし、これからもお会いしていくでしょうけれど、そのような細やかなところにまでは・・・とてもとても気付けませんもの」

「でも、私、私・・・」

「大丈夫、あなたはもう一人で立っているのですから、歩き出すこともきつと、出来ますよ」

席を立ち、相手へと近寄る。柔らかく相手の肩に手をおくと、相手はようやく顔を上げた。

「それでも、後ろが怖くて前を向けないのなら・・・またここへ来て下さい。振り切る勇気が出せないのなら」

「無理です、だって、私・・・失敗ばかりしてきて、また・・・」

「後ろ、それは即ち己の過去。後ろが怖いのは、あなただけでは無いのです。だから、怖がる必要はありません。失敗の無い人生など、歩む人はいません。誰しも己の過去に悔いを持つことくらい、ありますから」

「・・・あなたにも、そういうことは、あるの？」

たおやかに微笑んで、彼女はしっかりと頷く。

「私は、後悔だらけの人生を歩んできましたけれど・・・それでよかった、と思うことがあるのです」

「それで、よかった・・・？」

「はい。人は本来、生きることがとても大変なのです。それは、人という生き物がとても、とてもとても優しいからなのです。でも、あなたはきつと、歩き出せる。あなたは強い人だから。けれど、あなたは辛くなるかもしれない。あなたは優しい人だから」

「本当に・・・また、私・・・できる？」

「はい」

「だから、もしも本当に逃げ出したくなったら、ここへ逃げてください」

彼女の微笑みは、それこそ聖女のそれそのものだと言つ。

それが人工的に作られたものだ、気付けないから。

そして今日も一人、その笑顔に騙される。

「・・・ありがとう、ございました。あの、その・・・また、来ても良いですか？」

「・・・ええ、もちろん」

どうせ、もう二度と来れないだろうけれど。

相手が帰って、一人になった部屋。高窓は夕焼け空を切り取って、床は朱色に染まっていた。

「本当、本当に・・・あの子は羨ましい」

たった今帰って行った、あの少女。

「辛くなるくらいに、沢山の人の中で生きていけるあの子が」

自分と正反対の世界で生きる、自分とは正反対の、まるで鏡合わせみたいな、おない年の少女。

「どうして望まない人にばかり、与えられるのかしらね・・・私はここから出ることすらできないのに・・・」

一人が嫌だった。ずっと一人が嫌だった。けれど、何も知らない無知な人間達は、彼女に一人を強要した。大勢の都合に巻き込まれて、飲み込まれて。

「・・・青空、見たいわね」

ずっとあの少女と話していたため、青空を見る機会を逸してしまった。

「そうだ、そうしましょう・・・そうよ、私は、だって、私は・・・」

板張りの床を、音も立てずに彼女は進む。

彼女しか入れない、唯一の私的な空間には、小さなこげ茶のテーブルとイス。そしてベッドとタンスだけ。

テーブルの上には、封が切られた手紙が一通。

「久しぶりに・・・あの子に会えれば、きっと」

私の望みは叶うはず。

絶対に客人には見せない笑みを浮かべ、声を上げて笑う。

それだけが、彼女をこんな場所に追いやった、相手への抵抗だった。

第7話

柔らかな日差しが溢れる小さな部屋で、彼女は眠っていた。
誰も邪魔立てしない空間。

鳥のさえずりと、暖かな風の音。

開いた窓からひらりと赤い花弁が、彼女の流れるような髪に一つ、
二つ。

「相変わらずの昼寝好き、ですね」

邪魔立てするものはおらずとも、彼女の傍には青年が一人。

彼女は答えない。

今もまだ、深い深い眠りの底に。

「ああ、そうそう・・・招待状が届いておりましたよ」

青年がジャケットの内ポケットから取り出したのは、一通の封筒。

「お嬢様にコレが届いたのは・・・初めてでしたか」

忌々しげに封筒を見つめる青年は、今にも破りそう。

それでも、そんな自分を抑えるように、彼は封筒をベッドの脇の
テーブルにそつと置いた。

青年の視線の先には、起きる気配の無い少女。

「どうか・・・どうか、行かないと、そう仰ってください」

それは懇願するような、縋るような。

青年の思いなど露も知らない少女は、幸せそう。

「・・・」

少女が何かを呟いて、青年の顔は強張った。

それは、彼を今も追い詰める、『過去』と言う名の罪悪。

「ねえ、お嬢様」

彼は笑う。

それは自嘲。

「私が彼をあなたから奪ったと知ったら・・・あなたは」
その言葉の続きは、口から零れることは、無かった。

母親の前だけでは、泣いても良いと決めた。

けれど、母親に会える日は、いつまで経っても来なかった。だから、彼女は泣かなかった。

こんな惨めな姿を晒せるのは、母親その人だけだったから。

「・・・やっと、来れたよ」

母親は答えない。

「あのね、私・・・決めたことが、あるの」

「母さんは、反対するかもしれないって、そう思ったんだけど、けれど、私ね、」

「決めたの、だから」

「――」

確かな決意は、風にかき消された。

クローヴィアは思う。

きつと、母のもとへ、風が届けてくれたのだらうと。

「これ・・・母さんと、私だけの、秘密だよ？」

涙が零れた頬を、風が掠める。

綺麗な人だった。

おぼろげな記憶の中の、実の母親は、とても綺麗な人だった。

今ではもう、霞んで、ぼやけて、はっきりとした輪郭を取り留めていないけれど。

「・・・うん、頑張るね」

耳を澄ましてようやく聞こえるくらいの、小さな音。けれど、彼女にはしっかりと聞こえていた。

――頑張ってね。

数年ぶりに、母の声を聞いた。

彼女は、ぼやけていた、今にも消えそうだった母親の顔が、クリ

アに見えた気がした。

「さて、と」

後ろを向き、彼女は声をかける。

「お待たせいたしました。では、行きましょう」

「・・・もう、良いの？」

躊躇いがちに、夫人が答えた。

「はい。ちゃんと、話すべきことは話しましたから」

クローヴィアは、翳りの無い笑顔で応えた。

「ねえ、クローヴィア」

令嬢が、ためらいがちに言う。

「こんなときに言うのも、それこそ不謹慎なんだけれど・・・」

「え？」

渋い顔で令嬢は口を開いた。

「あなた宛に、これ・・・」

「・・・え？」

令嬢が、クローヴィアに差し出したのは、一通の封筒。

「・・・エマニエル王女殿下から、あなたに」

「どうして、ですか？どうして、王女様が、私に・・・」

煌びやかな、洗練された、一通の封筒。

宛名には、クローヴィア・リュヘテ・フェテリエス様と美しい字体で書かれていた。

「・・・お嬢、様・・・どうして、どうしてですか？お嬢様が、お教えになられたのですか？」

令嬢は、ふると首を横に振った。

「だって、提案したの、ついさっきのことでしょう？だから、私も驚いているの・・・どうして、

王女からの手紙が、馬車の座席に置いてあったのか・・・」

「・・・風が冷たいわ。馬車に戻りましょうか」

「「はい」」

ひとまず、三人は停めてある馬車のもとへ戻ることにした。

「よろしかったのですか？スピレイア嬢を招待なさらいで」

調度品から、手拭の一つにおけるまで、全てが全て、超一級品の品に包まれた豪華な広い部屋で、職人が丹精込めて作り上げた衣装に身を包む少女が一人、机に向かい、思索にふけていた。

その脇には、落ち着いた色で統一された服に身を包んだ、少女よりいくらか年上であることが分かる女性が一人。

少女は、美しく整えられた赤毛を揺らしながら、女性の方を向いた。

「ええ。どうせ、したって断つただろうから」

それに、と声は続ける。

「会おうと思えば、いつだって会えるもの」

「そうですか。では、この、スピレイア嬢の代わりに招待した方は……」

この地方では珍しい、薄紫の瞳と髪を持つ女性は、つるのない眼鏡のレンズ越しに、少女の手元の便箋に目をやった。

「スピレイアの屋敷で働く使用人、よ」

「使用人、ですか」

それは意外、と言うような顔で、女性は言う。

「と言っても、妾腹の子だから……まあ、伯爵家の人間、と言えるでしょう」

「あの実直な伯爵に、側室などいたのですか？」

人が、自分が知っていることを、知らない風に聞いたとしたなら、こんな顔なのだろうか、と少女は考えながら、自分の言いたいことを簡潔にまとめる。

「みたいね」

「クローヴィア……霞草の別名ですね」

「ええ、そうね」

少女が何かを考え過ぎていると、言葉が単調になる癖に、女性は気付いていた。

（私のことなど考えても、無意味でしょうに）

「どんな方、なのでしょう」

「さあ・・・けれど、分かることは一つ」

「？何です」

「あのスピレイアが、執心するような、そんな子だということ」

一瞬の沈黙。

少女にとっても女性にとっても、スピレイアは特殊な人間としてカテゴライズされていた。

「・・・さようですか」

「早く、会ってみたいわ・・・」

「確かに、興味深い方、ですわね」

「だから、今年のお茶会はうんと盛り上げないと・・・それと、あの子」にも、送ったし」

「あの子？」

「『北狼』とすごく仲の悪い・・・『南狼』のご令嬢に」

「・・・今回、その『北狼』の令嬢には」

「送ったわよ？もちろん」

「何がなさりたいんです？姫様は」

頭痛がしてきたような気がして、女性は頭を押さえた。

「別に、ただの・・・暇つぶしよ」

「・・・姫様、スピレイア嬢から断られたのがそれほど嫌ですか？」

少女が目を細めたのを見て、女性は凶星だと言うことに気付いた。（やれやれ・・・断られると分かっていたから出さなかった、というより、『断られる』ということに耐えられなかったのか）

「・・・断られた、なんて言ったかしら」

「どうせ、腹いせなのでしょう・・・私は何も致しませんからね」
「腹いせだなんてとんでもない。私は、退屈しのぎがしたいだけだ」

もの」

苛立たしげに、少女は言う。

「それを人は、『腹いせ』と言うのでございます」

「……今日のおやつは？」

「三種のマカロン、だそうですが」

「そう……それ、あなた全部食べて良いわよ」

「また、ですか？」

女性は、甘いものが苦手である。それを少女は知っていた。

「食欲が、無いのよ」

「そう言つて、朝食も、昼食も……終いにはお夕飯まで私に押しつけて……ダイエツトなさつたら、骨と皮になるのが関の山だとあれほど申し上げましたのに……」

「ダイエツトなんか、したくないわ。本当に食欲が無いだけよ」

「姫様」

「なあに？」

ぱちくりと、大粒のコハク色の瞳が、女性を捉える。

（何もしなければ、綺麗でたおやかなお姫様なのに……）

「やはり、スピレイア嬢にも来ていただきましょうね。向こうも、恐らく用事があるなんて嘘でしょうし」

「……あの子が来るかしら」

「来てもらえば、良いのでは？」

「……そうね」

「どうせ、そのクローヴィアと言う娘あての招待状に、もう一人分、同封したのでしょうか？」

「……あなた、心でも読めるの？」

「まさか」

女性は、にっこりと笑い、そして

「そんなことができたなら今頃……ここにはおりませんよ。そうでしょう？ 姫様」

「そうね……やっぱり、おやつは食べるわ」

「かしこまりました」
月が綺麗な、夜のことだった。

第8話（前書き）

次回から、本格的な『お茶会編』になります。今回は、序盤というか、序章というか・・・

第8話

雲の多い青空は、彼が一番好きな空だ。

舗装された石畳の上を早足で進んでいくと、時間帯が時間帯のため、彼以外には、歩く人物はさほどいない背景が視界の隅を通り過ぎて行く。目まぐるしく変わって行く風景の中にと、世界が流れて行っているのか、それとも自分が流れて行っているのか、どちらなのか分からなくなりそうだった。

彼は目的地へと近づけば近づくほど早足になり、彼の右手が持つ、大きな旅行力バンが歩きたびに音を立てながら揺れ、中に入っている荷物が少ないことをこれでもかと知らしめるのを恨めしく思っているにしても、速度を緩めることはなかった。

「騒動を起こして何が楽しいのか、自分にはサッパリだ」

彼は急いでいる訳ではない。目的地へ近付くと早足になるのは、昔からの彼の癖だった。

これから向かうのは、彼自身は会いたくない相手の許。しかも、渡さなければならぬのは、彼自身に少しも影響しない催し物の招待状だった。

招待状を届けるように命じた張本人は、彼に、この招待状だけは直接本人に渡すように、と念を押した。その理由をその人は少しも教えることなく、さっさと渡してこいと言わんばかりに彼を部屋から追い出した。

「自分が姫様に仕えているのは、別に使いつ走りになるためでは無いんですけどねぇ・・・」

思わずそう呟く彼の頭の中には、意地っ張りな小さい主人の姿があった。

当の目的地は、出発地の城から歩いて数時間ほどだろうか。つまりは、馬車で行かなければならないほどの遠さだ。しかし、彼は馬に乗るのは良くて、馬車だけは好きになれなかった。よって、こ

うして歩いて向かっているのである。

「さつさと済ませて帰るに限りますね、これは。帰りは・・・馬を拾うことにして」

城を出てからかれこれ4時間たち、ようやく目的地の全貌が彼の目の前に姿を現した。見晴らしの良い丘の上に、その目的地はあった。少しずつ、彼の足取りは重くなるが、止まることは無かった。

「『南狼』のご令嬢、か・・・『北狼』の方にもさつき届けました
が・・・」

本来なら10分もあれば登り切れたであろう丘を、30分もかけて登り、ようやく彼は今、王都にあるアルドネク伯爵家の屋敷の正門前に立った。

アルドネク伯爵家は、この国の南方に広大な領地を持つ、由緒正しい名家である。また、昔から国内外で武勲を立てた武人を何人も輩出してきた、国内有数の武家としても有名だった。

そして、北方に広大な領地を持つステイラブル伯爵家とは犬猿の仲であった。ステイラブル家は、昔から優秀な文官を多数輩出しており、アルドネク家と並ぶ名家だ。

「きつと『彼』が出てくるんだろうな・・・ああ、嫌ですねえ、まったく」

ため息をつきながら、彼は近づいてきた召使の男性に取り次ぎを頼んだのだった。

空は美しいグラデーションにより、少しずつ橙色から蒼へと変色していく。

目まぐるしい世界の中に飛び込んで行った自分が、あまりにも場違いで、クローヴィアは泣きなくなった。

先ほど、屋敷へ戻り、夫人の部屋で茶を御馳走になり、どうにか

ひとどこちついたところだが、つい先ほどまでは、泣きそうな自分を抑えるので精いっぱいだった。

「大丈夫？」

「ええ、もう大丈夫です・・・」

彼女が腰かける向かいのソファには、心配そうな顔の夫人が腰かけている。

「やっぱり、スピレイアに行かせるべきだったわね・・・」

厚めのマグカップを両手で包み込むように持ちながら、クローヴイアは首を横に振る。

「いえ、行けたこと自体は、とてもとても楽しかったのです」

事実、今日の出来事は、彼女にとって、楽しい思い出として記憶されることだろう。多少、不可思議ではあっただろうが。ただ、そうであるがゆえに、彼女は泣きなくなったのだ。

「なら・・・どうして？」

夫人は首をかしげる。普段は後ろで一つにまとめられている髪を下ろしているため、美しい紫色の髪が揺れた。

「・・・自分が、自分じゃあ無いみたいで、まるで自分を遠くから見ているみたいだったんです。普段なら、絶対に言わないことを言ったり」

「そう・・・」

向かう馬車の中、夫人は彼女に『いつものあなたでいれば大丈夫』と言った。それに安心したはずの彼女だったが、いざと言うとき、何故か空回りしてしまったのだ。

それはまるで、いつもなら歌える歌が、上ずってしっくりこないような感覚。

「ねえ、何があったの？」

「・・・王女様に」

その後、とぎれとぎれの彼女の告白を辛抱強く聞いた夫人は、どうしてこんなことになってしまったのかと後悔することしか出来なかった。

全ては、つい数時間前の、王女主催の茶会に遡る。

「・・・どうぞ、こちらへ」

来て欲しくない人間がやってきたとしても、彼は嫌な顔はもちろんできない。つまり、彼はいつもと同じような営業スマイルとでもいふべき笑顔を張り付け、正面の相手を見据えた。その際、眼鏡をかけ直し、自分の目の錯覚では無いことも確認した。

客人がどのような要件で来たのかは分かっている。彼は、招かざる客人の傍に置かれている、大きなかばんを見やった。

「申し訳ありませんねえ、こちらとしても、わざわざこのような真似は不本意極まりないのですが」

なら何故やって来たのか、と彼は言いたくなかったが、相手は客人だ、ぶしつけなことはできない。それに、相手だって好きでやって来たわけではない。目の前の客人に怒りの矛先を向けるのはお門違いも良いところだった。

一番内装の豪華な応接室へと客人を通し、顔見知りのメイドに接待用の茶の手配をさせる。客人はソファに腰掛け、彼の様子をうかがっている。

「さて、ご用件は？」

客人の向かいのソファに腰掛け、彼は口を開けた。

「あなたのことですから、もう察しておられるかと思いますが・・・これです」

重苦しい言葉と共にテーブルの上に置かれたのは、一通の封筒だった。

「・・・そういうことですか」

彼は視界が真暗になったような錯覚に陥った。いつもならば気にならない眩しいシャンデリアの光が今は鬱陶しくなり、時計の針な

どの、静かではあっても止まない法則的な音すらも雑音のように頭の中に響き渡る。

（頭痛がひどくなったな・・・）

今朝から頭痛がしたが、それはやはり、予感がしたからだろう。

この封筒がやってくる、という予感が。

「あの御仁のことですから、『北狼』のご令嬢にも手配されたのでしょうか？」

「ええ、まあ」

齒切れの悪い客人の返答に、彼は溜め息をついた。

「・・・判断をするのは主人ですが、一応申しておきます」

「当日、南北の狼がそろうことはありませんよ、きっと」

それは、彼自身の願望であり、客人の望みでもあった。

「・・・そうなることを祈ってやみません」

「あなたも相変わらず大変ですね」

「・・・あの、胃薬・・・貰えませんか」

「今、用意させましょう」

（この人も可哀想に・・・）

彼は、目の前の客人に同情しながら、近くのメイドに胃薬と水を用意させるよう言い付けた。

客人が胃薬を飲み終えた頃、

「そういえば、今年もあなたがたの仲裁役であるフェリエス家に招待状を送ったようなのですがね、どうもいつもの令嬢では無い方を招待するようです」

「・・・いつもの令嬢と言ったら、スピレイア嬢のことでしょうが・・・フェリエス伯爵には娘は一人だけでは？」

もちろん、直系の娘は、という話ですが。と彼は付け足した。

「その、直系の娘ではない娘・・・つまり、あまり知られていない側室の令嬢を招待した、ということでしょう」

「王女殿下は何がなさりたいのでしょうか」

彼からしたら、フェテリエス家の醜聞と繋がる側室の娘を公の舞台に上がらせるのは、フェテリエス家にとって、大きな痛手にしかならないことのように思えた。

「さあ、私には何とも・・・あ、フェテリエス伯爵の側室と言えば・・・」

「今日が命日のはずですが」

あの、美しい女性がこの世からいなくなって、今日で14年。

彼は、彼女と面識があった。最後に会ったのは、彼女が亡くなる10日前のことだった。

「・・・お美しい方でしたね」

客人はどこか遠い目をし、彼は黙って頷いた。

「っと、では、私はそろそろ失礼いたします」

「そうですか」

立ち上がり、形ばかりの握手を交わす。

「お互い、大変ですね」

「ええ、本当に」

玄関まで客人を見送ると、帰り際、客人は思い出したように振り返り、そして

「貴家のお嬢様にお伝えください」

「分かりました」

彼は頷き、客人は頭を軽く下げ、次の目的地へと向かった。

客人が見えなくなつたころ、

「・・・馬車の手配をしておかなくては」

彼は眼鏡をかけ直し、足早に屋敷内へと戻った。その顔には、焦りと逼迫感が如実に表れていた。

カツカツと、普段なら音を立てずに歩く廊下の上を、取り乱したように急ぎながら彼は進む。

廊下の端を歩くメイドたちが不審がつていることになど気にも留めず、彼は、

「思い通りになど、させてたまるものか・・・！」

その瞳に確かな決意と暗い感情を併せ持ち、自分の望む展開になるようにと、頭の中で策を講じ始めた。

「お嬢様・・・っ！」

屋敷の奥深く、一部の人間しか立ち入れない部屋の、ドアの前。

彼は、ノックすることも忘れ、ドアを開けた。

第8話（後書き）

次回は主人公サイドというか、本筋に戻ると言いますか・・・更新速度が一時的に落ちる可能性がありますので、ご了承ください。

第9話

おまじないとは、あくまでも気休めでしか無いのだと、思い知らせるかのような大雨が大地を濡らし、ざあざあという音が室内にまで響いていた。

「そ、そんなあ・・・」

楽しみにしていた今日という日は、無条件で青天だとばかり思っていたクローヴィアにとって、この天気は心が折れるだけだった。せつかくめかしこんだというのに、これでは意味が無いと言わんばかりにため息をついては、窓を見ている。

雨音の響く広間には、彼女を含めた3人がいた。

「・・・」

これから学校へと向かう令嬢は、向かいの席で窓を見ながらため息をついているクローヴィアになんと声をかければいいのかを考え、そして思いつくことができなかったため、それをごまかそうとミルクティーをすすった。

それを見て呆れたようにため息をつく夫人は、クローヴィアの隣に腰掛けながら優雅に令嬢とは違う茶を楽しんでいた。

内心、どうして肝心な時に言葉が出ないのだろうか、昔からの自分と娘の欠点を憎々しげに思いながら。

「まあ、室内だから天気は関係ないのだし、気にすることはないわ」
夫人が励ますようにそう言うも、クローヴィアの顔は哀しげなままだった。

「ですが、せつかくの庭の綺麗なお花が見れないのです・・・」

「今回こっきりのことではないのよ？きっと、また機会はあるわ」

「そうでしょうか・・・」

彼女の手には、握りしめられた、布製の小さな黒い人形があった。それは、彼女の友人であるレティがくれた、晴れになるためのまじ

ないの人形だった。

「私は、そろそろ行くわね」

ミルクティーを飲み終えた令嬢は、そう告げるとさっさと広間から出て行った。それは単に、かける言葉が最後の最後まで思いつかなかったからなのだが。

（どうしていつもいつも肝心な時に・・・！）

はた目から見れば苛立っているようにしか見えない彼女の姿に、呆れながらも夫人は声をかけた。

「ええ、気をつけて行ってらっしゃいな」

「いつてらっしゃいませ、お嬢様・・・」

その声を聞いて、令嬢は泣きたくなくなった。

静かすぎる室内に違和感を覚え、彼女はきよろきよろとあたりを見回した。

おかしい、いつもならいるはずの人が、いない。

「エリー、エリー？どこにいるの？」

たった今日を覚ましたばかりの彼女の視界はまだぼやけており、頭もすっきりしていない状況だった。そのため、ベッドから降りても足取りはおぼつかないままだった。

「エリー？」

彼女の声に応える声は無く、部屋はしんと静まり返っている。いつもなら、誰かが必ずいるはずなのに。

室内をうろつくとさまよいながら、彼女は名前を呼び続ける。

「エリー、どこにいるの？」

「ここにおりますよ」

「！エリー、そこにいたの？」

彼女が慌てて後ろを振り向くと、そこには彼女が探していた『エ

リー』が立っていた。

「どうかされたのですか、お嬢様」

「部屋が、とっても静かだから・・・誰もいないのかと思って」

「案じられることなど、何もありませんよ」

『エリー』は彼女をなだめるように、優しく言葉をかけた。その顔は、とても慈愛に満ちていた。

「本当？」

探していたその人が見つかり、ほっとしたのか、彼女は確信を得ようとするべく何度も訊ね、そのたびに『エリー』は、彼女の望む答えを与え続けた。

室内は年頃の少女の部屋らしく、可愛い白やピンクを基調とした調度品が空間を埋めているためか、男性である『エリー』が室内にいるのは、どこかしっくりこないように映っていたが、当の本人は気にしてなどいないようだった。

「ところで、エリー」

「なんででしょう、お嬢様」

「・・・私、やっぱり行くわ、お茶会に」

「え？」

つい今までは柔らかい笑みを浮かべていた彼の顔がこわばった。

「今日の・・・午後からだったかしら？私ね、お会いしたい人がいるのよ」

「お会いしたい・・・方？」

彼の脳裏には、既にその人物の顔が浮かんでいた。

「ええ、ステイラブル家のあの人に」

「・・・ですが、」

浮かんだがゆえに、会うな、と言いたかったが、彼の立場では、ストレートに言うことは出来なかった。

「言いたいことは分かるわ。でも、でもそれって、私には関係の無いことでしょう？だって、私はたまたまこの家に生まれただけなのですもの。そんな家の都合で人間関係に制限がつかなくて嫌よ」

「分かりました。レイヤ嬢にお会いしたいのならば、私がお膳立てを整えましょう」

「・・・だから、今日行つてはいけない、と？」

このとき、彼女はあることに気付いた。それは、彼に言つてはいけない真実だった。

その真実に気付いてしまったからこそ、遠まわしな彼の言葉に、苛立ちながらも彼女は諦め始めたようだった。

「要約すれば、そうなりますね」

「衝突が面倒くさいから？それともそのあとの事後処理？」

「いいえ」

「それでは、お嬢様は利用されるだけです」

「利用？」

思いがけなかった言葉に、彼女は首をかしげた。

「北狼の、参謀殿に・・・ね」

「参謀？誰、それ」

「分かりませんか？」

「・・・あ」

言葉を発した次の瞬間には、彼女の顔には彼の言葉に納得した、という表情が如実に表れていた。

「ですから、どうかお願いします、今日は、王女の茶会には・・・」

「分かったわ。今日は行かない」

「その代わり、出かけませんか？」

「どこに？雨が・・・降っているのに」

ベッドのすぐ横の窓は、降る雨で濡れていた。

「それは、着いてからのお楽しみです」

彼女が好きな、柔らかな笑顔で彼は言った。

「お氣をつけて行つてらっしゃいませ」

「ええ、ありがとう」

馬車に乗り込む際、声をかけた使用人は、彼女の顔を見はしなかった。

空は土砂降りの雨を躊躇い無く地面へと落としていたが、彼女はどこか楽しげで、使用人の声など耳半分、というていだった。

なんせ、今日は、

「久しぶりの外出ね・・・」

彼女にとって、数少ない、外に出られる日だったから。

彼女を乗せた馬車は、雨で人気のない大通りを少し急ぎ気味で走る。目指す場所は王都の外れであるため、急がなければ遅刻してしまいそうだった。

「まったく、あのお姫様はどうしたのかしらね・・・」

彼女の手には、きつかけをくれた姫からの手紙があった。

この招待状を受け取った時、彼女は出向くつもりはなかった。しかし、出向かざるを得なくなってしまった。結果的に、彼女はエマリエル王女の策に引っかかってしまったのだ。

それは腹立たしいことだが、外に出ることが出来たのもまた事実であるため、この苛立ちは保留にしておくことにし、今は久しぶりの外出を楽しむことにした。

「そういえば・・・フェテリエス家の子も来るんだったわね」

本妻の子であるスピレイアではなく、側室の子、クローヴィアに招待をしたと聞いた。そして、そのクローヴィアと言う少女は、今日、出席するとも。それを聞いたとき、彼女は今日、茶会に参加することを決めた。その少女の母親と、彼女は面識があり、どのような少女なのか、興味をもったのだ。

フェテリエス家は、昔から彼女の家と、アルドネク家のご機嫌取りをしなければならぬ、苦勞の絶えない家系であるが、その分、両家からの恩恵と、王室からの信賴により、繁栄し続けてきたという側面もあった。つまり、良いとこどりなのだ。

現当主が美しい妻を迎え入れたこともあり、末代までフェテリエス家は安泰であろうと言われたものだが、その妻がなかなか子を授けられなかった。そして、『彼女』が妾となった。

「……どうして、いつもいつも、歴史は思うようにならないのかしらねえ」

『彼女』の死は、少なからず、この国にとって損害であると彼女は思う。だからこそ、何故、『彼女』があの様な境遇に追いやられたのか、納得がいかなかった。

その時、馬車が思い切り音を立てて揺れた。
「っ！」

視界が、反転していく。

馬車が横転、彼女は出入りのドアに体を打ち付け、そして、
「痛い、なあもう……」

先ほどまでの天井は、壁となっていた。現在の天井となったもう片方の壁は、窓枠のガラスが割れ、ガラスの無くなった窓枠から、雨が降り注いでいた。

窓枠はさほど大きくはないが、彼女ならどうにか出られそうな幅だった。彼女は窓枠に手をかけ、どうにか馬車から脱出した。

「な、なんとか出られたわ……」

ざあざあ降りの雨が鬱陶しかったが、あいにく傘は馬車の中だし、また戻るのも面倒だった。

「お嬢様、御無事で何よりです……」

「……クウレン」

彼女の目の前には、傷だらけの馬丁が立っていた。

よろよろと頼りない足取りで地面を歩きながら、馬丁は彼女のもとへと歩み寄り、すぐさま自分の身に着けていたジャケットを彼女に被せた。

「ああ、良かった……それにしても、どうしてこんなことに？」
「……それが、」

クウレンは、申し訳なさそうに視線をずらした。その視線の先を、

彼女は追った。

「うそでしょう？一体誰がこんなことを・・・」

右側の二つの車輪だったはずの二つのそれは、馬車から少し離れたところに倒れていた。

「申し訳ありません、私が、整備を怠ったから、だからこんなことに・・・！」

クウレンは申し訳なさそうな、悔しそうな、そんな顔だった。

「いいえ、それは違うわ。だって、あなたは何度も何度も点検していたし、それは誰もが分かっていることだもの」

「ですが・・・」

クウレンの体にはあちこち擦り傷があり、左足を庇っていた。

雨は弱まることを知らないかのように降っている。このままここにとどまれば、二人とも確実に風邪をひいてしまうだろうし、既に二人とも、ぬれ鼠の有様だった。

ここから王女の温室までは随分な距離がある。歩いて行くにも道を知らないし、クウレンは足を負傷している。

「八方ふさがりね」

これからどうしたものかとどれほど考えても、あまり良い案は思いつかなかった。

第9話（後書き）

長らくお待たせしてしまい、申し訳ありません・・・これから、
速度は少しは早くなるはず、です・・・

第10話

「ようこそいらつしやいました。短い時間ではありますけれど、楽しんで行つて下さいな」

一つにまとめられた美しい赤毛、キラキラと輝くコハク色の瞳。そして雪のように白いドレスというその姿に、クローヴィアは昔一度だけ読んだ、お伽噺の姫君を思い出していた。

「・・・綺麗」

その言葉が、当の彼女に届くことはなかったのだが。

今の光景を、前日の彼女が少しでも予想していたのであれば、もっとやりようがあったのに、と後悔しているのを隠しながら、笑顔の仮面は鮮やかな花のようにほころんだ。

「まさか・・・あなただけがいらつしやるなんて、思ってもいなかったわ」

「わ、わた・・・わたし、も、ビックリ、しました・・・」

向かいに座る、かちこちに固まった少女をみやりながら、彼女は考える。さて、これからどうしたものだろうか。確かに、クローヴィアには山ほど聞きたいことはある。けれども、それはあくまでもクローヴィア主体では無く、スピレイアであったり、レイヤであったり、あるいは。

温室内には雨音がバグググラウンドミュージックのように鳴り響いており、ある種の静けさが形作られていた。透明な温室の中には、彼女と、クローヴィアの二人だけ。

「そういえば、お母様が具合を崩されたそうね？」

白い、華奢なテーブルの向こうには、お茶を3杯飲みほして尚、お茶をすすり続けている少女がこしかけている。まるで、みずのみのりのようだと彼女は思った。

「は、はいっ、えっと、お部屋で、今休んでいます・・・」

「大丈夫かしら」

「奥さ・・・お、お母様は、少し休めば、大丈夫、って」

「そう、ならいいのだけれど」

ローズティをすすりながら、彼女はクローヴィアをちらと見やる。霞草は挿掬表現だが、目の前の少女には、褒め言葉なのかもしれない。目を引くような美人ではないが、清楚な美しさのようなものにじみ出ている。大輪の薔薇では無く、控えめな白い小花。まさしくクローヴィアは、『霞草』と呼ぶべき少女と言えるだろう。今は緊張しているのか、顔はこわばっているが。

「そんなに緊張なさないで？私、あなたにお会いできるのをたのしみにしていたのよ」

「それは、と、とても嬉しい、です」

この日の為に用意したのであるう薄紅色のドレスは、彼女の白い肌によく映えていたし、大人しめの細やかな造花の髪飾りは、彼女だからこそ似合うような、そんな危ういバランスで輝いていた。

・・・見立てたのは夫人ね、随分な力の入れようだこと。まあ、確かにこの子の衣装だものねえ。

目の前の少女、クローヴィアのことを、フェリエス夫人が可愛がっているのは知っている。でなければ、少女をここに連れてくるはずがないし、手の込んだ衣装で着飾らせたりはしないだろう。

「ところで、これからどうしましょうか？わたくしね、てつきり沢山の方がいらつしやると思って、だからこんなにたくさんテーブルなり椅子なり用意したのよ。お茶もお菓子もね」

「わ、わた、わたしも、そうだとばかり・・・」

今日、出席すると返事を出してきたのはクローヴィアを含めて15人。そのうちフェリエス夫人は別室で休んでいるし、スピレイアは学校に行くとかで欠席。あとの12人は全員が今日になって『急用ができたため欠席する』という旨の速達を王女に出した。そして、今に至る。

「まあ、せっかくだから、温室ではなくて、別の場所を案内するわ」
「別の、場所？」

クローヴィアは首をかしげた。今日はこの温室での茶会の為にここにいるのだ。

「温室のすぐ隣にある、私の隠れ家に行きましょう」

につこりと、いたずらをたくらむ子供のような顔で、エマニエルは微笑んだ。

「かく、れが・・・ですか」

「ええ、私にとって、数少ないプライベートな場所よ」

「良い、のですか？私、なんかがお邪魔しても」

「ええ、だって、二人でにこにこ仮面貼り付けて、上っ面のお茶会なんて退屈でしょう？今日は仮面舞踏会のところを急ぎよ変更して・・・そうだわ」

とても良いアイデアが思いついたと物語る顔で、

「少し遊びましょう」

すつくと立ち上がって、彼女はクローヴィアの手を引っ張った。

クローヴィアの顔は、さらにかちこちに固まってしまった。

クレネール王国の第4王女エマニエルは、花好きの姫君として知られている。けれども、その花好きがこうじて出来た温室の隣にある、小さな屋敷は、花で彩られることも無ければ、緑豊かな庭があるわけでもなく、とてもこじんまりとしたものだった。建設者に対し、彼女が言ったことはただ一つ。『丈夫なことだけが取り柄になるように』だった。現に、二階建ての屋敷は堅固なことが一目でわかりはするが、決して王族の姫君が利用しているとは到底思えない様である。

「・・・竜巻がきても、不思議の国には飛ばされなさそうですね」

雨は相も変わらず土砂降りのままだった。というのに、二人とも傘は差していなかった。

「何かおつしやつた？」

「あ、いえ・・・」

小さな入り口用のドアには、重厚な南京錠がぶら下がっており、エマニエルの取りだした、少し黒ずんだ金色の鍵と南京錠は、どこかちぐはぐな組み合わせだった。

「さあ、どうぞ」

ギイ、と扉があき、エマニエルはクローヴィアを先に入らせ、自分分は少し間を開けてから中へ入った。直後、ボタンと大きな音を立てて扉が閉まったかと思うと、立て続けにガチャリと鍵の閉まる音が響いた。

「え？」

「どうかしたの？」

クローヴィアが何に驚いているのか、少しも分からないと言うような声だった。薄暗いホール内でも、エマニエルの赤毛ははっきりと分かり、それは暗闇の中に灯る焰のように、彼女へと迫ってくる。
「・・・」

「さあ、早く」

クローヴィアの手を取り、スタスタとエマニエルは歩き出した。あまり横幅の無い廊下はホール同様薄暗く、二人の足音が甲高く響くだけだった。

それから、入口と同じような重厚な南京錠のかかったドアの前に着くまで、エマニエルは一言も発しなかった。

今度の鍵は、金色ではなく、黒ずんだ銀色の鍵だった。やはり、それらはちぐはぐだった。先ほどと同じように、室内にはクローヴィアが先に入り、エマニエルは最後に入った。そして、またも鍵の閉まる音がした。

「うわあ」

薄暗い廊下とは裏腹に、室内は光に満ち溢れていた。天井の大窓や、壁を埋め尽くすようなステンドグラスの鮮やかな窓が、室内に不可思議な様相を呈していた。外は雨のはずだと言うのに、だ。

「気に入ったかしら？」

「はい、とても」

クローヴィアは内心、これからどうなるのだろうかと不安ではあったのだが、それ以上にこの部屋に心を奪われていた。ガラスで出来た地球儀や世界地図に、随分と不可思議な、実用性があるのかどうか怪しい砂時計。それと、クローヴィアの頭一つ分の大きさの瓶に入った、水中で咲く菊に似た花など、普段はなかなか見かけないであろうものばかりが絨毯を見えなくさせていた。

「綺麗でしょう。これはずっと昔に頂いたもののよ」

そう言つてエマニエルが手に取つたのは、先ほど彼女が使つていた金と銀の鍵と同じものだった。

「これは、スペアですか？」

「ええ、そう。さて・・・」

エマニエルは髪をまとめていたリボンを引き、濡れた髪をはらつたかと思うと、自身のドレスの腰のリボンもほどき始めた。

「・・・？」

首をかしげながら、クローヴィアはその始終を見ていた。

リボンをほどき、そして上質な絹のドレスを邪魔くさそうに脱ぎ払い、今は丈の短いドレスと同じ白のワンピース姿になっていた。足を飾っていた白いシューズも脱ぎ捨て、王女とは思えないほどの軽装になった彼女に対し、さすがのクローヴィアも目を瞠った。

「あの、えっと・・・」

「濡れて重たくないの？そのドレスも髪飾りも。それと足、靴擦れ起こしているわよ」

「そう、ですけど・・・」

人前で服を脱ぐだなんて、そんなのいくらなんでも常識外れだ。それくらい良識は、クローヴィアだって持っている。けれども、エマニエルは何故クローヴィアがそんな顔をしているのか分からないようだった。

「ここはどこ？社交界のど真ん中？違うでしょう。ここは私のプラ

イベートな場所だつて、さつき言つたはず。まあ、嫌なら靴だけでもさつさと脱ぎなさい。靴擦れに効く薬、塗つてあげるから」

そう言つと、エマニエルは部屋の奥へと行つてしまい、クローヴィアはその後を追うしかなかった。

部屋の奥には円状の見るからに柔らかそうなベッドやドレッサーと言つた、少女らしい調度品が置かれていた。エマニエルはクローヴィアにドレッサーのスツールに座るよう促し、薬箱から塗り薬を取りだした。彼女はクローヴィアの真向かいに椅子を持って来て、そこに腰かけた。彼女の視線は、クローヴィアの傷んだ素足を見ていた。

「少し、話につきあつてくれるかしら」

「お話に、ですか？」

温室の時よりも、クローヴィアは緊張していなかった。警戒心が強くなつてはいたが。

「私ね、将来はどこかのお偉方の息子に嫁ぐのが決まっているから、色恋沙汰つて縁遠いものだったのよ」

「はあ・・・」

「でも、昔一度だけ、と言つよりも一瞬だけ、恋をしたことがあるの」

クローヴィアの足に塗り薬を塗りながら、エマニエルは続ける。

「私、その一瞬の恋が、一生分の恋だつて、つい最近までは思つていたのだけれどね、考え方を変えたの」

「考え方？」

「そう、考え方。別に、生じた感情を相手に伝えるだけが恋では無いでしょう？思つただけでも、それは『恋』なのよ。だから、伝えなければ、恋はし放題なのよね」

「まあ、そう、なりますね」

そういうクローヴィアは、恋なんて一度もしたことが無いし、そもそも相手がいなかった。

「で、結婚するまでに、そういう、一方通行の、相手が私の想いな

んて気付かないような、そんな恋を沢山しようって、決めたの」

「それは、えつと・・・頑張って、下さい」

「それでね、ここからが問題なのよ」

「？」

てつきりここで終わると思った話に思わぬ続きがあり、一体いつになったら自分の左足は床に戻るのだろうかとかクローヴィアが考えていると、再び彼女の話が始まった。

「私、ちよつと厄介な人を好きになってしまったのよ」

「厄介、ですか」

「ええ。なんて言えば良いのかしらね・・・まあ、簡単に言えば、絶対に可能性の無い人を好きになったのよ」

「可能性なんて、殆ど無いのでは？」

エマニエルは一国の、それも直系の王女であり、彼女と結婚できる人間など、それこそ数えるほどしかない。つまり、可能性の無い人間の方がずっと多いはずだ。

「そう言うことではないのよ。あなたが言いたいののは、たとえば私が農村部の純朴な青年に恋をしたとか、まあ、そういうことでしよう？」

「ええ、まあそうです」

「違うのよ。そう言うことじゃあ、無いの。だって、その青年が何か武勲を立てたとか、功績が認められて爵位を賜わったりでもしたら、可能性はゼロではないから。でもね、私の相手は、そう言う可能性も何もかも、全てがゼロなの」

「どういう、ことですか？」

「まだ、分からない？」

今までじつとクローヴィアの左足を見ていたエマニエルのコハクの瞳が、ゆつくりとクローヴィアの顔をとらえた。

「ええ、私、その・・・もの分かりが悪いので」

「なら、はつきりと言いましょか。私ね、ある女の子を好きになっってしまったのよ」

「はあ・・・って、え？」

王女の顔は、真剣そのものだった。

「まあ、当然の反応よね。好きなだけ驚いて良いわよ」

「あ、えつと冗談では無いんですね」

「なんであなたに冗談を言う必要があるのよ」

「それもそうですね」

大きくため息をつき、エマニエルは再び話した。クローヴィアの左足は、未だ彼女の手に包まれていた。

「最初は、言わなければ良いのだから楽なものだと思ったのだけれどね、ちよくちよく会う機会があるから、抑えが利かなくなりそうなのよ」

「つまり、自分の思いを言ってしまうかもしれないと」

「そう。それで、どうしたものかしら、と悩んでいるというわけなの」

「・・・うーん、むしろ、言ってしまった方がいいんじゃないませんか？その方が、いろんな意味でスッキリしますし」

「それができたなら、とつくのとうにしているわ」

「何故、です——いたっ」

左足に思い切り爪を立てられた。足から、真つ赤な雫が伝って床に落ちた。

「ああ、ごめんなさいね。今、血止めの薬を塗るわ」

自身の指についた血を舐めとった後、まるで窓を閉めに行くような、そんな自然な動作で薬箱から薬を取り出したかと思うと、エマニエルは先ほどと同じように薬を塗り始めた。

「何故、できないか、と言われたらそうね・・・まあ、あなたにもこれは関係するかしら」

「？」

クローヴィアの中で警報音のようなものが鳴り響いていた。目の前の彼女は危険だと、知らせていた。けれど、逃げるすべは無かった。

「私が好きになったのはね、あなたの妹よ」

この時、クローヴィアは思考がストップしてしまつて、言葉が何も出てこなかった。

「………えつと、え？え、あの、つまり……」

「スピレイアのことを、私は好きになつてしまったの」

「ああ、なるほど、そういうこと、ですか……」

ストップした思考は滅茶苦茶に動き出し、冷静さを欠いている。このままではまずいと思つてゐるのに、動揺は抑えきれなかった。

「だから、同封されていたでしょう？スピレイアへの招待状」

「は、い。でも、お、お嬢様は」

「学校に行かなければいけないからと言って、断つた」

「……はい」

「それ、多分嘘よ」

「……はい」

クローヴィアはうすうす気づいていた。学校へ行かなければならない、というその名分が、ありもしない虚偽であることを。けれど、クローヴィア自身がそのようなことを言えるわけがあるはずもなかった。

「きつと、感づいたのですね。私の気持ちに」

「……だ、だから、避けたと？」

「恐らくはそうでしょう。まあ、仕方ないわね、あの子は勘が鋭いし、洞察力もあるから」

「では、どうするのですか？」

スピレイアのことは諦めるのだろうか。クローヴィアの頭の中は、少しずつ混乱し始めていた。

「あら、分からないの？」

「はい。先ほども言いましたけれど、私はもの分かりが悪いので、今度は溜め息ではなく、笑い声だった。とても楽しそうに、王女は笑った。それがクローヴィアにさらなる混乱を招くことになった。手っ取り早いのはね」

笑ったかと思うと、今度はとても冷めた声になった。

「他の人を好きになること、よね」

直後、雷が鳴り、ああ、そうだ、外はまだ雨が降っていたのだったか、とクローヴィアはぼんやりと考えていた。

「そうです、ね・・・他の人を好きになれば」

「たとえば、あなたとか」

「え？」

再び、雷が鳴った。

てっきり、冗談だと思って見た王女の顔は、笑ってもいなければ怒ってもおらず、ただただ、平静で、冷静で、穏やかだった。

「さ、手当ても終わったし、本題に入りましょうか。それにしてもあなた、随分と傷が多いのね」

ようやく左足が解放された。王女は立ち上がり、温室の時のようにクローヴィアの手を引っ張り、無理やり立たせると、鼻がぶつかりそうなほど顔を近づけた。

「今までのお話は？」

警戒心も警報音も、すべてどこかへ飛んでしまっていた。この時クローヴィアは、無防備そのものだった。

「忘れて良いわ。どうせ、すぐに思い出すから」

「どういう、ことで」

言葉を言いきる前に、クローヴィアの視界は反転した。

第10話（後書き）

はい、お待たせいたしました。もっと早くあげたかったのですが・

・
どうしてクローヴィアが落ち込んだのか、の核心部分は次で分かりそうかと・・

第11話

赤い幕の隙間から見える天窓のステンドグラスに描かれた、綺麗な人魚の少女と目があつたような気がして、クローヴィアはふと目をそらした。ずっと見つめていたら、吸い込まれてしまうような気がしたのだ。

「何を見ていたの？」

目をそらした先には、コハク色の瞳があつた。

「天窓の、ステンドグラス綺麗ですね」

「ああ、あれね」

「ところで、エマニエル王女様」

「長つたらしいからエマルで良いわ」

「では、エマル様」

「何かしら」

「これはどういうことでしょうか」

「何が？」

「あの、えつと・・・」

「あなたが答えないのが悪いのよ」

「・・・」

先程、視界が反転したと思ったら、自身の瞳のすぐ上に、王女のコハク色の瞳があつた。王女が自分をベッドの上に押し倒し、自分の上に乗っかっていることは分かったのだが、その瞳が何故だか怖くて、彼女は視線をそらした。しかしその逸らした先も、綺麗であるがゆえに不気味というか、うすら寒さを覚え、視線を戻した。戻したらそこには変わらず二つのコハク色が待ち受けているだけだった。

「何も私は別に、あなたに対して無茶な要求はしていないと思うのだけど？」

「お言葉ですが、私からしたら、どれをとつても無茶以外はありません」

「そう。でもそれならその無茶に付き合ってもらうしかないわねえ」
「拒否権の有無は」

「あつたとしても、それを私が認めると思ふの？」

「・・・」

「まあ、これも何かの縁だと思えば良いのよ」

「・・・」

「今、『そんな縁なら断ち切りたい』つて思った？」

「いいえ。人はそれを」

「被害妄想と呼ぶ、かしら？」

「・・・楽しいですか？」

「少なくとも、仮面張り付けて上っ面だけで笑うよりかは、ずっと」

「私は、エマル様の『退屈なこと』を楽しみにしていたのですけれど」

「残念だったわね。きつとあなたの可愛い妹が仕組んだのよ」

「え・・・？」

「嘘よ、嘘。あなた、自分の妹のこと信じられないの？」

「からかつつもりだった王女の言葉とは裏腹に、帰つて来た言葉はほの暗い。」

「・・・正直、私・・・お嬢様のことは、苦手なものですから」

「それた視線が、言葉の信憑性を高めていた。エマニエルの視線は、クローヴィアの視線を追っている。」

「苦手？向こうはあなたのこと、すごく慕っているみたいなのに」

「意外だ、と大げさなまでに王女は表現した。そしてそれは、あからさま過ぎて、どこか滑稽だった。」

「だからなんです」

「まとめるなら、あんな可愛らしい子に慕われるのは嫌な気持ちはしないけれど、でも自分は側室の子供だし、どんな目で見られるかわからないし・・・そしてそれ以上に、自分が惨めになるし？」

「・・・・・・・・・・王女様」

「何よ。反抗するならしなさいよ」

コハク色を見るその瞳は、定まりそうで、定まらない、不安定なもの。

「その通りです。だから、私・・・奥方様のことは好きでも、お嬢様のことは・・・」

「なるほどねえ。まあ、分からない話でもないわ」

「そうですか？」

王女に自分の立場が何故分かると言うのだろうか、と彼女は考えたが、すぐに思い当たった。彼女は、『王女』だ。王室に名を連ねる一員なのだ。

「私はもちろん王妃の嫡子だけれど、すぐ下の妹は第二妃の子だし、二歳年上の兄は、今ではもう無い亡国の姫の子だし、ってあげたら枚挙にいとまがないのよね」

そう言うと、王女は一人うんうんと頷いた。何かに深く納得したようだった。

「あなたたちとはちょっと違うけれど、まあ、そんな感じの人がいるわ。その人は近々、ある国の王子に嫁ぐことになっているのだけど、それが生まれた時から決められていたの。でね、もうすぐ、殺されるの」

「殺される？どうして」

何故、嫁ぐのに殺されてしまうのか。話があべこべだった。

「えつとね・・・なんて言えば良いのかしら。あ、これ、重要機密事項だから、他言しないでね？」

「今さらですね」

「今更ね。で、その姉様は、嫁いだら殺されるわ。そのために姫としての教育を受け、そして死ぬの。それがその姉様の存在理由だからって」

「死ぬために、生きていますか。正しいようで、間違っているような」

「間違いに決まっているでしょう。人生を全うする、と言う意味ではそうかもしれないけれど、人生は死ぬためじゃあ無くて、生きるために送るものよ」

「・・・そうです、ね」

「で、ここからが本題ね。どうしてその姉様は死ななければならぬのか」

王女の声に耳を傾けながら、彼女は考えていた。何故、会ったばかりの自分に、これほど内輪の話を、あけっぴろげに話すのだろうか。

「姉様が嫁ぐ国には、昔から土着信仰とでもいうのかしら、まあ、偉い偉い神様がいるのよ。そして、姉様はその花嫁に選ばれてしまったの。生まれおちた、その日に」

「王子に嫁ぐのでは？」

「表向きのおあつらえよ、あくまでも。で、かりそめの結婚式を挙げたら、神様のいるという神殿の最奥に幽閉される。もちろん、食料や水なんて与えられない」

「餓死、ですか」

「でも、それじゃああまりにも不憫だということ、きっと大量の睡眠薬が入った水でも飲まされて、眠るように息を引き取るんですよ」

「何故、花嫁に選ばれたら死ななければならないのですか？」

「神殿の最奥は、その神様の住む場所へと繋がっていて、死んだらそこへ行けるのですって。だから、最後に姉様が着るのは、立派なそれはそれは御立派な花嫁衣装よ。花嫁衣装が死に装束なんて、滑稽だわね」

「だいたいは分かりました、けど・・・」

「けど？」

「それを何故、私に？」

「あなたにお願いがあるから」

「お願いですか」

「その姉様と、会ってやって欲しいの」

「何故」

「あなただから」

「それは理由になりません。それに、どうせ今さっき思い付いたことでしょう？ そんな思い付きを、おいそれとしても良いものか・・・」

「

「でも、姉様は直系の王女じゃないから疎まれてるし、存在していることにしか価値が無いからって、『空気姫』なんて呼ばれているのよ？ 誰でも良いから、話し相手が欲しいはず」

「無ければならない、でもあるだけで価値がある、というか存在にしか価値が無いから『空気姫』ですか」

「そう。空気は存在していることに意味があるけれど、それ以上もそれ以下も無い。だから、価値を欲しがっている。自分の人生に、死ぬための以外の意義を欲しがっている」

「・・・断ります」

「何故？」

「無責任だからです」

「私がお姫様と話して、死にたくないと言ったら両国間でいざこざが起こるのでは？それに、どんな理由であれ、それが使命である人に、これからも人生が続くであろう私が何を言ったって、同情憐憫と言ったものにしかありません。どこるか、余計に傷をつけるだけだと思いますが」

「だからと言って、全てから切り離すの？誰かとのかわりも？」

「だって・・・」

自分は生きる。死ななければならない理由が無いから。けれど彼女は死ぬ。死ななければならない理由があるから。その明快なまでの境界線がある限り、二人の間にある壁が無くなることなど、あるはずがない。クローヴィアはそう考えた。

「生きていて良かったって、思うことすら許されないの？」

「それは、残酷じゃないですか？」

「人生が終わるとき、空しくなりませんか？陽だまりの中にいたのに、今はいないなんて。誰かの暖かさを、失ってしまったって、思っているのは」

「あなたの言葉は、姉様に対して言っているようには聞こえないわ。自分を守ろうと必死になっているようにしか、私には思えない」

「その通りです。私、その人のこと、知り合って、話をしたら、絶対に好きになってしまふと思うから」

「だから？自分が傷つくのが嫌だから？」

「私、嫌なんです。いなくなる人の思い出になるために関わりを持つなんて。それって、私の心に穴があくだけです。空っぽになるだけでしょう？」

「……あのねえ、ローア。たとえその人がいなくなったとしても、過ぎた時間は消えないのよ？どうして思い出を作って、後悔しなければならなの？」

「……」

「私があなたにお願いしたのは、あなたくらいしかないから」

「でも、それなら、それこそお嬢様の方が」

「あの子には、家っていうしがらみがある。でも、あなたにはさほどない。『南北の狼』の影響を受けない。ある程度の自由が確立されている」

「南北の狼？」

「その話はまた今度。で、私のお願い、聞いてくれるかしら」

「是、と答えたらどうしますか」

「近いうちに、あなたを姉様のところへ連れて行くわ」

「……分かりました。その役目、お受けします」

「ありがとう、ローア」

「ローアって」

「クローヴィアって長いから、短縮。ローアの方がすっきりしているでしょう？」

「……」

今になつてクローヴィアは思う。はて、今までの事象は、本当に偶然の産物なのだろうか、と。

偶然にしては、随分と出来過ぎていないか、と。

「もしかして」

その疑念は、後回しにすることにしたらしい。

それ以上に、彼女の中で、ピン、と来たことがあつたのだ。推論だけれども、口にする価値はある、と。

「エマル様が最初に恋した相手つて・・・その姉様、ですか？」

「・・・どうして？」

「さつき、エマル様はお嬢様のことが好きになつたつて仰つていましたけれど、それ以上に、姉様に対する思い入れが強いので、もしかしたら、と思つて」

「もし、それが本当だつたら、どうする？」

「どうもしませんよ。ただ、事実として積もるだけです」

「そう」

それからしばらく、沈黙が続いた。長い沈黙だった。

数分後、沈黙を破つたのはやはりエマルだった。

「あなた、もの分かりが悪い癖に、鋭いわ」

「一瞬つて、どういうことですか？」

「それが、知りたいの？」

「はい」

「14歳の春に、姉様のいる宮殿に忍び込んだの。そして、姉様に見つかつて、一緒にお茶をした。それまでは何もかもが希薄で薄っぺらい人だと思つていたのに、とても豊かで綺麗な心を持つていて、笑顔が・・・笑顔がとても美しく、思わず見とれたわ。凄い美人つて言うよりは、あなたみたいに控えめだけれど、美しかった。多分、心を奪われちゃつたのね」

「だから、」

「その一瞬だけ、私は姉様に恋をした。一生分の恋を、美しい笑顔の姉様に捧げたの」

二つのコハク色が見つめる先を追っても、それは見えなかった。きっとそれは、瞳の奥深くに。

「それで、十分だと思っていたの。でも、一瞬だったのに、永遠になろうとしている。今も心のどこかであの人のことを考えているの。会って話したのはその日だけなのに、ずっと私の心の中に、姉様がいるの。それが辛いから、苦しいから、他の人で代用しようとした」「それで」

「選ばれたのがスピレイア。でも、でもね、もう・・・冷めちゃった」

無機質な声は、鉛のように重たく、少しずつ、自分の奥深へと落ちていく。

「姉様への思いは少しも冷めてはくれないのに、他の人への思いは、すぐに冷めてしまうの。だから、すぐに変えなくちゃ。恋心で無くても良い。なんても良いから、強い思いを向けられる相手が欲しいの。少しでも、姉様のことを考えないで済むように」

「なのに、その姉様のために私と会わせようとしている」

自分でもびっくりするくらい、冷たい声だった。声を発した直後、ローアは自分自身に驚いた。

「結局全部、姉様のため」

「このお茶会も、もしかして・・・」

「毎年、違う子を招いているの。あなたの妹と、継母、それから『南北の狼』の家以外は毎年違うの」

「で、お眼鏡にかなう子は？」

「最終候補のスピレイアは、自分で放棄しちゃったから、あなたに決定ね」

「適当すぎませんか？」

「良いのよ。あなたなら」

何がどう良いのかは分からないし、有耶無耶にされて、そのまま、エマルのペースに流される。意図的にしているのか、違うのかは分からない。けれど、ローアはエマルの願いを聞いてしまった。その

時点で、もう、彼女は流されていた。

「怖いですね」

「何が？」

「コハク色って」

期待していたモノとは大幅に違った『お茶会』が終了し、外に出た頃には雨はあがっていた。

「あなたのお義母さまは先に帰ったわ」

「そんなに、具合が悪かったのですか」

「みたいね」

夫人へと思いをはせたが、会ってみなければ分かりはしない。

あちこちに出来た水溜りをよけながら、二人は停まっている馬車へと歩く。舗装されているとはいえ、雨上がりは歩きづらい。

「近いうちに、手紙を出すから・・・詳細はそれで確かめて頂戴」

「分かりました」

「ねえ、ローア」

「なんでしょうか」

「・・・あのね」

「はい」

馬車の前までついてしまった。時間切れだった。けれど、言わなければならぬことが、互いにあった。そう、クローヴィアにも。

立ち止まった途端に、降りた沈黙。無言の延長の願い入れ。

「やっぱりいいわ」

「そう、ですか？」

彼女には見えない。王女と呼ばれる少女の顔が。馬車に乗り込む彼女の背を見つめる顔が。

ボタン、とドアが閉まった。その時、ようやく彼女はその顔を見

た。けれどもう、遅かった。

「――っ」

ゆっくりと動き出す馬車の中、窓にくっついた彼女の目には。

「どうして・・・」

「――」

ガラス越しの声は届かない。僅かに動いた唇が、なんて言っているのか、彼女には分からなかった。そして、二つのコハク色から流れる涙の意味も。

それから、屋敷に着くまでの間、何故エマニエルが泣いたのか、そして、なんと言ったのかをずっと考えていたが、やはり分かりはしなかった。

しかし、一つだけ言えることがあった。

それは、今日、クローヴィアが来なければ、エマニエルが泣くことは無かった、ということ。

後日、クローヴィアのもとに手紙が届いた。エマニエルが言っていた通り、詳細が記されていたが、最後にあったことについては、何も書かれていなかった。

第11話（後書き）

伏線を色々張るのって、楽しいけれど難しい・・・。

お待たせいたしました。これにてお茶会編はおおむね終了となります。『欠席者』が何をしていたのか、はまたの機会に。

第12話

溜め息を一つつけば、幸せが一つ逃げるのだと言う。医学的なことを言えば、溜め息をつけば心臓に負担がかかるらしい。けれども彼女は、溜め息をつかずには居られなかった。

「何がいけなかったんだろう・・・」

背もたれの無い椅子に腰かけた彼女の手には、随分と質の良い紙の封筒があった。その封筒は既に封を切られており、傍にあるテーブルの上には中に入っていた便箋が置かれていた。

「クローヴィア・リュヘテ・フェリエス様

フィリー王女との茶会の日取りが決定いたしましたので、お知らせいたします。

今月の第24日の正午一時間前に、馬車にてお迎えにあがります。服装は、正規のものとさせていただきます。

エマニエル

茶会の帰り、最後に見た王女の顔は哀しげに歪んでいた。何かをクローヴィアに必死に伝えようとしているようだった。けれど、窓越しには言葉は伝わらない。僅かに動いた唇から発せられた言の葉は、未だに分らないまま。

「それほど落ち込むくらいなら、謝罪の旨の手紙を書けばよいでしょう」

「！び、びっくりさせないで下さい・・・」

先ほど部屋を出て行ったメイド長が戻って来た。屋敷内の点検が終わったのだろう。まさか、背後から突然声をかけられるとは思ってもしなかったが。

「先日の茶会で、まずいことを言ってしまったのでしょう？しかも、

それであろうことが王女を泣かせてしまった。下手をすればおごとになつてなりかねないのですよ」

もつともなことだつた。そう、相手はどれほど口調がくれたものであると、一国の、それも直系の王女なのだ。失態を演じれば、さほど縁が強くなるかと、この家にだつて影響を及ぼしかねない。とは言つても、自身のどの言葉が王女を傷つけたのかは分からないのだが。

「手紙を、ですか？」

「ええ。故意では無かつたのなら、そのことも伝えなければなりませんし・・・傷つけてしまったことに対する、あなたの素直な気持ちで、『申し訳ありませんでした』の意を伝えればよろしい」

「め、迷惑ではないでしょうか・・・」

「あなたの気持を伝えることの、どこが迷惑だと言つのです。それを言つなら、このままうじうじとしている方が、沢山の人に迷惑をかけることになるでしょうよ」

呆れ気味に、メイド長は言つた。

「・・・はい」

先ほどよりも、心が軽くなつた気がした。次の道しるべが見えると、それに向かつて歩いて行くだけでいい。だから、くよくよと考え込まなくて済む。

「さあ、明日も早いのですから、もう寝ますよ」

「はい」

明日、手紙を書く。

けれど、なんて書き出せばいいのだろうか？

その問いに答える声は、ありはしなかった。

翌日、考へに考へた末に書いた手紙を夫人を介して送つてもらつた。その数日後、返事が来た。本文はたった一行。

『直接会いに来なさい』

どこに、とは書いていなかった。そして、クローヴィアが書いた手紙の内容に関すること。

「これでよし、と・・・」

雨は未だ止まず、薄汚れた窓をこれでもかと濡らしている。けれどそんなこと、気にも留めてはいない。時折鳴る雷さえも、彼女にはどうでも良かった。

「おや、随分と良い仕上がりだ」

「ありがとう」

本当は、姉をあの手女のもとへやるのは嫌だったけれど、断れ、なんて言えるわけが無く、かといって自分が行くわけにもいかず、彼女は泣く泣く『学校』へと向かった。恐らく、招待した王女も、茶会に言った姉も、彼女が嘘をついていると思っっていることだろう。確かに、彼女が来ているのは二人が思っている『学校』ではない。彼女、スピレイアが王女の茶会を断って向かったのは、学校は学校でも、机に向かつて、教師のする講義を延々と聞く学校では無い。現に、スピレイアの机の上にあるのは、教科書やノートではなく、いくつかの菓子類だった。

昔から手先が不器用な彼女は、少しでもそれを直したくて、この学校に通っている。ここにいるのは、貴族の令息、令嬢ではなく、街に住む中流階級の少年少女。飾った言葉も、世辞も必要のない、小ざっぱりとした人間しかない。

「お嬢さん、その菓子はどなたに差し上げるのかな？」

初老の指導教諭が楽しそうに言う。

「とても大切な人に」

「おやおや・・・」

にやにやと、教諭は笑う。きつと、ありきたりなことを考えているのだらうと思ったが、彼女は黙っておくことにした。

少し年季の入った教室には、同じエプロンをした、十数人の『生

徒たち』。等間隔で並ぶ一人ひとりの机の上には、思い思いの形の焼き菓子が乗っていた。今はその菓子をラッピングしている最中である。

「先生、虹色のセロハンがあります？」

「ああ、ちよつと待ってなさい」

慌てた様子で、教諭は教室を出て行った。この学校の良いところは、作品づくりだけしか面倒をみるのではなく、完成した後、ラッピングや包装といった装飾はもちろん、相手に渡す、その最後まで面倒を見てくれるところにある。歳を取っているとは思えないほど、可愛いデザインのパッケージやリボンに、渡す際に言う効果のある一言まで、なんでもござれなスペシャリストである初老の教諭に、生徒たちは皆疑問を抱いてはいたが、口には出していない。

「おやおやまあ・・・あの『花形の炭』を作った人の作品だとは思えないな。じいやにでも作って貰った？」

「けなしに来たの？」

突然の声に、彼女はいささか驚いたが、それを顔に出すなんていう失態はおかさない。

「何を勘違いしてるんだか・・・俺は褒めているんだけどなあ」

「褒めているようには聞こえないのだけど？」

「そりゃ失礼」

声の主は笑いを必死に噛み殺していた。

「笑いたければ笑えば良いわ」

そう言う彼女も、笑うのを必死に抑えていた。笑う要素など一つも無かったはずなのに、気付けばおかしくて笑いたくなる。声の主と話すといつもこうなってしまう。

「ねえ、レオン。あなたは誰にあげるの？あなたのことから、どうせ、無駄に凝ってるんでしょ？」

レオンは数秒黙ってから、面倒くさそうな顔で答えた。

「・・・意地っ張りな女に」

「意地っ張りなあなたの彼女さんに、ねえ・・・ていうか、あなた

みたいな人に彼女がいたのね」

意外、と言いたげな顔だった。それにレオンは顔をひきつらせた。
「女ってソツチじゃないんだけど」

「あら、あなたに仲の良い女の子のオトモダチなんていらっしやるの？」

「………そういうことにしといたら？」

「それ、どういう意味？」

「……」

盛大な溜め息をついて、レオンは自分の席に戻って行った。

いくつものクエスチョンマークを浮かべ、釈然としない彼女のもとに、先ほど教室を出て行った教諭の声が届いた。

「ほら、セロハン持ってきて来たよ。ええと、他にもいくつか持ってきたから、使いたい人がいたら前に来なさい」

すると、「やったあー」と言いながら生徒たちが前の方に群がって来た。

「ね、スピアちゃん。この後、ていうか帰り暇？」

突然、そんな声が聞こえた。もちろん、驚きはしないが。

「ああ、ユフレ」

セロハンが欲しくて席を立った生徒たちの流れに乗って、後ろの方から女子生徒が一人彼女の方へとやってきたのだ。

青みがかった長い赤毛のお下げに、黒ぶちの眼鏡と言う、昔からの典型的な優等生ルックの少女は、スピレイアがこの学校に通って出来た、数少ない友人の一人だった。

「帰り？まあ、暇だけど」

「なら、一緒に出かけない？新しく出来た喫茶店、寄っていきましようよ」

「喫茶店？」

「そのケーキが美味しいんですって」

「ケーキねえ……」

「あら、甘いものは嫌い？」

「好きよ。でも、手持ちが少ないのよ・・・あなたに借りるわけにもいかないし・・・」

「あら、珍しい。そんなにお金が無いの？」

ユフレは心から驚いた。なんせ、スピレイアは伯爵家の令嬢だ。この学校に通う生徒達にとって、スピレイアは歩く金の生る木のようなものだった。

「いくらなんでも、銀貨数枚じゃあ足りないでしょう？」

「・・・十分よ」

そして、この金銭感覚の違いが、彼女を周囲から浮き彫りにしていたのだが、それに当の彼女は気付いていない。

「そうなの？」

「スピアちゃんってほんとお嬢様よねえ・・・なんでこの学校にいるの？」

「通いたいから通っているの。何か文句ある？」

「イイエ。じゃあ、決まりね。雨だから傘を差さないといけないけれど、まあ、それも楽しいでしょう」

「歩きか・・・たまには良いわね、それも」

「いっつも馬車だと足が弱くなっちゃうでしょ？」

「まあ、そうよねえ」

じゃあ、終わったら。そう言って、ユフレは席に戻っていった。

もうすぐ、『授業』は終わる。あと数時間、いや、数十分でも構わないから、雨がやみませんようにと、スピレイアは心の中で祈った。彼女にとって、雨の降る外の世界を傘をさして歩くという行為は、一種の『イベント』になり得る代物だった。

授業が終わり、『校舎』を出てみたら、外は先ほどよりも雨脚が強くなっていた。ところどころヒビの入った正面玄関には、いくつもの雨でできたシミがあった。

「・・・ここまで降ってくれなくても良かったのにね」

ユフレの言葉に、スピレイアは

「うーん、でも、服が濡れてまで歩いたことなんて無いから、まあ、どっちにしろ『初めての経験』なのよ」

「まあ、良いか・・・」

「そう言うことにしておけば？」

一応持つてきておいた、日傘と兼用の傘を差そうとしたその時、後ろから声をかけられた。

「スピア」

「どうしたの？」

スピレイアが振り返った先にはレオンが立っていた。手には彼女曰く『無駄に凝ってる』プレゼントがあった。

「ほら、これ」

彼女の前に立ったレオンは、感情の読めない顔——彼が時折見せる顔——で、そのプレゼントを差し出した。

「？」

「やる」

そう言うや否や、レオンはスピレイアの手にそれを押しつけ、早速で帰って行った。

「え、あれ？」

先ほど以上にクエスチョンマークを大量に出している彼女に、ユフレは思わず噴き出したのだった。

第12話（後書き）

『欠席者』が何をしていたのか、が一つ明らかに。ある女の子の甘酸っぱい話は、書いている本人が恥ずかしくてならんのですが、結構楽しいです、あはは。

第13話（前書き）

お久しぶりです（汗

第13話

「その人のことを、好きになったのはいつだったか、実はあまり憶えてはいないけれど、でも、私は確かにその人のことを好きで、ふと気付けば、その人の姿を目で追っていて、頭の中では、その人のことばかりを考えていて・・・有体に言えば、私は恋に盲目になった、一人の少女となってしまったのです。」

幼少期から、色恋沙汰を自分からなるだけ遠ざけて生きてきた私にとって、今回の事柄は、大変な変事であり、事件であり、イベントです。なんせ、私がともに恋をするのは、今回が初めてのことだからこそ、だからこそ私は、焦ってはいけない。築くべきは、安全包囲網ではなく、確たる居場所。あとどれだけかかるかは分からないけれど、ゆっくりと着実に、築き上げて行かなければならない。あの人に、邪魔をされてしまう前に。だけれど、焦ったら、今まで築き上げてきたものが、壊れてしまう。

明日こそは、ずっと考えてきた『作戦』を遂行します。上手いくかどうか、分からないけれど。玉砕も覚悟で、私は作戦を実行に移すのです。』

「・・・そうね、フリー王女はどんな格好をしているか分からないから、無難なお洋服が良いかしら。前回とは違って・・・そうね、薄水色のドレスが良いかしら。シューズはヒールの高くない、これが良いでしょう。後は・・・でも、水色だと子供っぽいかしら？クローヴィア、あなたには白や黒が似合うのよ・・・でも、濃紺も捨てがたいわ。前は鮮やかだったし、今回はシックにまとめたほうがメリハリがあると言ったものよね」

フリー王女との茶会をあすに控えた今日、クローヴィアは夫人につかまっていた。前回のエマニエル王女との茶会の際に、彼女のコーディネイトをしたのも夫人だったため、彼女も安心してはいるのだが、前回以上に吟味の時間が長く、さすがに疲れ始めていた。二人のいるドレツサルームには、大量のドレスが積まれていた。殆どが夫人のものだが、クローヴィア自身の物もある。当の本人には、どれが自分のものか把握すらできていないのだが。

「うーん、このミントグリーンのドレスあたりが良いと思うのですが。」

「これ？でも・・・あなたは色白だから、緑を着たら、青白く、不健康そうに映るのよ。」

「だったら、こっちの黄色は。」

「子供っぽいわ・・・そうだ！」

手をパンと叩くと、夫人は持っていたドレスを躊躇なく床に落とし、くるりと踵を返した。

「少し待っていて頂戴。きつと、今のあなたなら着られるわ。」

「はい？何をでしょうか。」

問う声に応える間もなく、夫人はドレツサルームを出て行った。
「？」

クエスチョンマークがいくつも頭の上に浮かぶクローヴィアを置いて、夫人はパタパタと、らしくもなく廊下を走っていった。

数分後、荒い息をして、夫人が戻って来た。彼女が見たことも無い、不思議なデザインのドレスを持って。

「それは？」

「あなたのお母様が着てらっしゃった、ドレスの最後の一着よ。」
「母の？」

「そう、あなたの。」

そのデザインのドレスは、おぼろげに残る思い出の中には無く、彼女には見覚えが無かった。ただし、他の人が、似たようなドレスを着ていた気がした。さて、それは誰だったか。

「・・・このドレスはね、時の王女様のパーティで、あなたのお母様が着たものよ。私が作らせたドレスよりも、ずっとずっと似合っていて、どんな深窓の姫君でさえも敵わないくらいに、美しかった」生前の母を知る人は皆、口をそろえて『うつくしい人だった』と言う。言葉を発するその時に、目の前に母親がいるかのような、そんな感慨深い表情で、皆は言う。

どんな人だったのだからと考える。皆、彼女を見て、『母親そつくりだ。まるで行き写しのようだ』と言う。しかしながら、肖像画に描かれた母親の姿は、彼女とさほど似てはいない。確かに、髪の色や、肌の色、瞳の色は似ていると言えるのだが、顔立ちはそのままで似ておらず、かといって父親に似ているともいえず、一体誰の子ともなのだろうと考えたことすらあつたくらいだった。

「私に、似合うでしょうか」

「似合うわよ、きっと。あなたの色が出るから、お母様とも違ういで立ちになると思うわ」

「・・・はあ」

真っ白なドレスだった。それは、エマニエル王女が、自分との茶会で身に着けていたものと似ていた。

「王女様の・・・」

絵本の中に出てくるような、お姫様の恰好がとても似合っていたエマニエルのように、私にも似合うだろうか、と、彼女は心の中、一人ごちた。

時計の針が丁度三時をさした頃、エマニエルは、久し振りに姉のもとを訪れた。勿論、堂々と姉のいる宮殿に行く訳にはいかないから、昔と同じように、人のいない道を通り、遠回りをする事になった。

裏口からひよつこりと顔を出し、茶の席に参加しても良いかと問うたら、姉は喜んで彼女の参加を許可した。まるで、今日、来ることが分かっていたかのような顔だった。

日当たりのいい室内の、窓のすぐ横にあるテーブルの上には、姉が好きなフレーバーティーが淹れられた、繊細な装飾の施されたティーカップが、真つ白なクロスのかけられたその場所に置かれている。室内はさほど調度品が無く、生活に必要な最低限度の物しか置かれていない。どこか閑散とした印象を受けるその中で、姉の白銀の短い髪と黒と青の中間の、深い瞳だけが輝いていた。ドレスでは無くブラウスにスカートといういつものいでたちで、お姫様、というよりはどこぞのお嬢様のようなだった。

「久しぶりねえ、エマニエルちゃん」

「そうですね、お姉様」

席に向かい合って座ると、姉であるフリーはニコニコと笑っていた。それはとても珍しいことだった。何かいいことでもあったのだろうかと思案していると、フリーが口を開いた。

「それにしても、ビックリしちゃったわ。手紙が来たと思ったら、あなたからで、しかも、会わせたい人がいるだなんて・・・ねえ、どんな人？」

「私も、実は、詳しくは知りません。ですが、きっとお姉様はお気に召すと思いますわ。出会った最初の日に、そう直感いたしましたの」

「ふうん？その人は、私の境遇に同情したの？」

「こともなげに、フリーは言う。紅茶を上品に飲みながら、零れる言葉はどこか粗野だった。

「いいえ。その人、つまり明日、お姉様のもとへやってくる方は、何といたしますか、姉様と似てはいなくとも、違わないと言いますか・・・」

「はつきりしないわね。まあ、明日のお楽しみと言うことにしておきましょう。空気姫の館へやってくるくらいなもの、よほどの変人

「なんでしょうね」

「・・・お姉様」

カチャカチャとティーカップをかき混ぜながら、姉は言う。ミルクも砂糖も混ぜていないのに、ティースプーンでかき混ぜるのは、姉の癖だ。

「良いの。私のことを、皆、『空気姫』と呼んでいる。いなかったら困るけれど、ここにいさえすれば、誰も困らない。いるだけで良いなんて、都合のいい話よね」

「・・・・・・・・」

「外に出られないのは不便だけれど、まあ、花は沢山咲いているし、風も気持ちいいし、料理もおいしいし、居心地自体は良いのよ、ここは。あなたが会いに来てくれたりもするしね」

「辛くはないのですか？」

聞いてはいけないと知っていても、聞かずにはいられない問い。

いつそ、辛いと言って泣いてくれでもしたら、こちらとしても楽なのに、と聞くたびに思ってしまう。しかし、姉は、エマニエルが望む言葉を一つとしてくれない。

「辛いつて思っていたのは最初だけ。自分がみじめだと思ったのは昨日まで。自分が哀れだと思ったことなんて、一度も無いわ・・・そうそう、私、嫁ぎ先への出立日時が早まったの」

「え・・・いつですか？」

姉が嫁ぎ先、つまりこの国を出て行くのは半年後と予定されていたのだが。

「三月後。私の誕生日の一週間前に出立しろって、向こうが言うて来たのよね。そうだ、お菓子を持って来てもらいましょうよ。今日はドライフルーツを混ぜ込んだクッキーなの・・・ルーエン、用意をして頂戴」

「かしこまりました」

遠くの方で、姉よりもいくつか年上の男性の声が聞こえた。ルーエンと言うのは、姉の家庭教師兼、使用人の名前である。

自分のことだと言うに、姉の言葉はどこか人ごとで、自分のことだと思っていないような口ぶりだった。話が飛ぶときは、自身がどうでもいいと思っていることを話しているときだ。姉にとっては、自分がどうなるかと、関係ないのだろうか。そう思うから、聞いてしまう。自分を大切にして欲しいと、乞うてしまう。けれど、どれほど言っても、姉は変わらない。否、彼女、エマニエルには変えられない。

「・・・空がきれいな。今の私の心を映し出したみたいだわ・・・ねえ、エマニエル。あなたは私に辛いと言って欲しいのでしょうか？死にたくないと言わめいて欲しいのでしょうか？助けて、と縋って欲しいのでしょうか？でもね、私は辛くも無いし、死にたくないだなんてちっぽけも思っていないし、助かりたいと願っていないの。何故だかわかる？」

どうやら姉は、エマニエルの心中などをつくのとうに見抜いていたらしい。

「それ、は・・・」

「最初っから、そうなっているから、よ。私の人生は、生まれたその時から、死ぬ日が決まっているの。多少の変化はあれど、どこでどんなふう死ぬのかは、きまりきっているのよ。いつ自分が死ぬかを知っていたら、残された日をどう過ごそうかと考えるから、有意義な生活を送れるし、案外、楽しいわよ？それにね、エマニエル。私がこの役目から逃げても、私の代役が必要になる。つまり、私のほかに、娘が誰か、死ぬことになる。私は、誰かの命を背負ってまで、生きたくないわ。だって、自分の命を背負うだけで、精一杯なんだから」

実のところ、フィリー王女の影武者を用意してはどうか、という案は、根強くあった。しかし、当の本人が、それを拒んだ。根強く提案するのは、彼女の父である王その人。

「生きていたいとは思わなくもないけれど、良いの。これが私の運命だから・・・もしかして、あなた、そのえつと、クローヴィアさ

んだったかしら？その人に、こんなことを言ったのではないでしょうね？『存在価値を欲しがっている。自分の人生に、死ぬため以外の意義を欲しがっている』って」

カチャカチャカチャカチャと、かき混ぜる音が響く。その行為が、姉の精神を安定させるためのものだ、と、妹は知っている。

「だとしたら、どうされます？」

平静を装って、妹は姉に問うた。

「どうもしないわよ。ただ、それは私の妹が、あなたに会いに来てもらうためについた嘘だ、ってことを、伝えるか伝えないかの違いがあるだけ」

「・・・それが、あなたの気持なのですね」

「ええ」

昔も今も、姉、フィリーの姿勢は変わらない。『死ぬために生きている』という事実が、そうあることを無言で求めているから。

「ですが、それは、今日までの物です」

「というと？」

「きつと、明日、『彼女』に会ったならば、少しだけかもしれませんが・・・変わると、私は信じておりますわ」

「それは、楽しみね」

温度のない、無機質な声と笑みだった。

それからすぐに、クツキーの皿を持って、ルーエンが現れた。背丈は平均より高いくらいで、顔立ちは昔見た時とさほど変わっていない。つるのない銀の眼鏡をかけており、いかにも、という地味なこげ茶のスーツ姿だった。

「ありがとう。ああ、そうだね、ルーエン、明日のお菓子だけだね・・・エマニエル、その人の好物は？」

「あー・・・えと、飴が好きなようです。前も、飴の菓子ばかり口に運んでいましたし」

「飴ね、なら飴細工を用意しておいて頂戴。可愛いものがあるわ」

「かしこまりました。では、ケーキの上にも装飾がてら、施しておきましょう」

「お願いね」

深深と一礼すると、ルーエンは作業に取り掛かるのか、来た道を引き返して行った。

てつきり、昔のように、苦々しげな顔をするかと思ったのだが、ルーエンはまるでエマニエルのことなど眼中にないというような態度だった。心境の変化でもあったのだろうか。スーツも昔とは変わっていた。

「話が変わりますけれど、どうして機嫌がよろしいのですか？」

我ながらダイレクトな質問だと内心舌を出しながら、エマニエルは相手の返事を待った。

「そうねえ、それは――」

「それは？」

「秘密」

「あら、教えてくれないのですか？」

「ええ、教えてあげない」

そう言つて、姉は妹に微笑んだ。妹が、見たことのない笑みだった。

恋する少女のような顔だ、と思ったことは、勿論口には出さなかった。

第13話（後書き）

次の更新は、いつになるか未定です。なるだけ今月中に頑張ります（汗）

第14話（前書き）

長いです。王女の初恋物語。

書きあげてから気付きましたが、14歳って、リアル中二ですね・

・（遠い目

主人公が全く出てこない話です。申し訳ありません・・・

第14話

それは、まだ14歳の少女の、少し遅れた青い春がやって来た、ある夕暮れのこと。

彼女には、飲み込むことが難しかった。けれど、彼女は一国の王女だった。人前で泣くことすらも、許されてはいない。

逃げるように、彼女は人のいない場所へ駆けこんだ。広い王宮内には、人のいないところのほうが少ない。しかし、無い訳ではない。好奇心の旺盛な彼女は、散歩と言いつつ諷をして、あちこちを探検していたから、人のいない場所をいくつか知っていた。

逃げ込んだのは、あまり人前では見られない花が咲く、小さな池に囲まれた庭。白い塗料があちこち剥げた橋を渡ると、真っ赤な花が彼女を出迎えた。花の前に座り込むと、大きなため息が自然とこぼれた。

「・・・はあ」

冷たい風が頬をかすめ、花がゆらゆらと揺れる。ここにいれば、口うるさい乳母も、頭の固いメイドも、表面上は媚び諂ってくる人間とも会わずに済む。それだけで、彼女の傷ついた心は修復されていくようだった。

「もう少しで、夜になるわね。今日は月が綺麗だつて誰かが言ってたわよ」

だったのだが。

「！」

後ろから、のんびりとした声が聞こえた。慌てて振り返ると、見たことのない顔の、けれど身なりは良い、自分よりも年上の少女が立っていた。心臓が早鐘を打ち、見つかって叱られたときの演技はどのパターンが良いかを計算する。

「時々やってくる小さなお客さんは、あなただったのね。ええと、エマニエル王女・・・で合ってる？」

意図的に作り上げられた笑顔を傾け、少女は言った。

「あ、あなたは、誰？」

自分が時々ここにきていることを知っていたとは。こつそりと忍び込んでいるつもりだったのに。そう思いながらも、頭の片隅で恐らく自分を迎えに来るのは頭の固いメイドの一人、しかも年輩で小言がうるさい人になるだろうから、涙よりも真摯な反省の態度と本音を多少引き出さねば騙せないだろうから言葉を作っておかなくては、なんていう、随分と底意地の悪いというか、諦めの悪いことを必死になって考えているのである。

「私？私は・・・『空気姫』」

その名は、彼女でも知っていた。否、知らない方がおかしいくらいには有名だった。

「・・・フィリー王女？」

「そうよ」

同じ王族の血を汲む人間だとはいえ、あまりにも王族の数は多く、王女だけでもその数は数十人。エマニエルは王と王妃の間に生まれた直系の王女のため認知度は高いが、相手は側室が生んだ姫で、空気姫と言う名ばかりが独り歩きをしていたから、顔を見たことがなかった。

「初めまして、エマニエル様。わたくしはこのすぐ近くにある『ソレマンヌ宮殿』に住んでいるフィリーと言つものです。以後、お見知りおきをせぬよう・・・」

「は、はあ・・・」

優雅に礼をするその姿は、教養高い姫君の姿そのものだが、最後の言葉が流れを一時的にとめてしまった。最初の声とは違う、硬質なそれには、『部外者はとっとと帰れ』と言うような意味合いが込められているようだった。

「姫様にかような場所は似合いませんわ。お戻りになられたほうが

よろしいかと」

「・・・ここにいては駄目ですか？」

「何故、この庭が良いと仰るのです。姫様の為に作られたお庭があるはずでは」

直系の王女には、5歳になると必ず一流の庭師が作りあげた美しい庭が献上される。エマニエルも漏れることなく、彼女が好きな色鮮やかなバラが咲き誇る庭がプレゼントされた。しかし、彼女はその場所があまり好きでは無かった。何故なら、

「花が、笑っていないのですもの。無理矢理作られたようで、好きではありません」

「確かに、この庭の花は、わたくしが勝手に植えたモノですけれど・・・まあ、良いです。お疲れのようですし、お茶の一杯でも振る舞わねば、わたくしがしかられますし」

これで、不法侵入の件はやり過ごせそうだと彼女は安心した。もちろん、表面上はどぎまぎした様相を装っている。

どうぞ、とフィリーは手をエマニエルに差し伸べた。お世辞にもきれいとはいえない手だった。今の言葉が正しいのなら、庭いじりが趣味なのだろう。

「あ、ありがとうございます」

恐る恐る差し出した手を、フィリーはぎゅう、と握ると、少し急ぎ目に走り出した。

「え、ちょ、ちよつと・・・」

「今なら、まだ間に合いましたよ」

何に、とは言わない。もちろん、もう、何事も無かったことにはできない。

いたずらっぽい笑顔で、空気姫はそう言った。先程とは違う、自然と湧きあがったような笑みだった。

忙しい人だ、とエマニエルは思った。表情がころころと変わる顔は、山の天気のように予測ができないのだ。

「つきましてよ」

フィリーに連れられて来たのは、あまり大きくない、こじんまりとした宮殿の裏側だった。王宮内には王族が住む宮殿がいくつあるが、基本的にはその一族全員が一つの宮殿に住んでいる。たとえば、王と王妃の間に生まれた子息たちは王宮の中央にある宮殿に住んでいるし、側室の子なら、その子供達の為の宮殿がある。母である妃たちが住むのは後宮だが、病を患ったりすると、子供達のいる宮殿に一時的に移る。

しかし、フィリー王女、つまり『空気姫』は、生まれおちたその日に、大国の最上位に位置する巫女が『彼女は我が主の妃となるお方だ』と宣言し、遠くない未来、その国の神に嫁ぐことが決められたためか、王宮内でも端のほうにあるこの宮殿で、彼女と数人の使用人たちだけでひっそりと暮らしていた。何故、彼女がそのような立場に立たされることになったのか、相手の国は何一つ教えなかった。と言うのも、相手の国、『セルベザン帝国』は、他の大陸にも領地を持つ強大な国であり、力関係は子供でも分かるくらいの差があった。それでもなお、フィリーやエマニエルが暮らすクレネール王国が独立を保っているのは、国家予算の何割かを費やして毎年数回催される、帝国の役人や王族を招いた盛大なパーティや高品質と名高い特産の絹製品の献上などによるご機嫌取りがあるからだ。つまり、おいそれと『何故我が国の姫が貴国の神に嫁ぐのか』などと、聞くことは憚られたと言う訳である。それに、言わないと言うことは、何かしらの都合が相手にもあるということ。藪蛇は避けねばならない。

「ここが、『ソレマンヌ宮殿』ですか」

「そう。きつとルーエンが慌てふためいていることでしょうし、さつさと会いに行つてやらないと」

「ルーエン？」

「私の家庭教師兼、使用人よ。とっても女の子らしいことが得意だ

から、お茶を淹れたり、庭の手入れをしたり、刺繍したり・・・まあ、一人で何役もやってくれるの。人が少ないのは、ルーエンが器用貧乏だからなのよね」

「そう、ですか」

と言うことは、きつととても可愛いものの好きで繊細な女性なのだろうとエマニエルは想像した。もしかすると、先程まで、ルーエンとフィリーは二人で庭仕事でもしていたのかもしれない。

「ここで待っていてね。今、ルーエンを呼んでくるから」

「え、ちよつと・・・」

灯りも何もない場所に、エマニエルは一人取り残された。

「一緒に連れて行ってくれば良いのに・・・」

夕暮れ時で、まだ世界は明るい。しかし、あと少しで暗くなってしまう。さっき出会ったばかりのフィリーの帰りを、彼女は今か今かと待ち望むことになった。

一人残されたエマニエルは、フィリーについて、少ない情報を整理し始めた。どのような対応をすれば、上手く行くかと考える必要があるからだ。

まず、性格はさっぱりとしていて、女性らしいとはいえない。自分とは確か、二つ離れているから今年で16歳だが、それにしても大人びている。姫なのに身に纏っているのはドレスではなく、ブラウスに地味な色のスカート。もちろん、質の良いものではあるが、王女らしいとは言えない恰好だし、本来なら長く伸ばすはずの髪は短く切りそろえられていて、ズレのような物を感じる。

「・・・だけれど、一緒にいて、あまり違和感はない」

出会ってまだ短時間ではあるが、気を使わなくて良い気楽さが、エマニエルには有難かった。

「もっと早くに知り合いたかったな・・・そうすれば、今頃仲良くなれていたかもしれないのに」

「それはようござりました、と申し上げたいところではありますが、残念ながら不可能です」

「！」

驚いて後ろを振り向くと、一人の男性が立っていた。フィリーの時のように演技をする必要はないだろうと思い、特にアクションは起こさなかった。エマニエルは、失礼にならない程度に、相手のことをじっくりと観察し始めた。

背丈は平均的な男性のそれより少し高めで、歳はフィリーとさほど差が無いと思われる。髪は明るめの茶色で、瞳は黒に近く、つるのない銀色の眼鏡をかけている。身につけているスーツは漆を塗ったように真っ黒で、喪服のようだと、エマニエルは思った。

「あ、あなたは？」

「ああ、これはこれは失礼致しました。私は、フィリー王女の家庭教師兼、使用人をさせていただいております、ルーエンと言うものです」

「あなたが？」

「はい？」

素っ頓狂な声だったからなのか、その質問自体がおかしかったかなのか、使用人は眼を細めた。

「あ、いえ・・・」

先程のフィリーの言葉で、彼女はてっきり、ルーエンは女性だとばかり思っていた。

「エマニエル王女様。今日はもう遅いですし、姫様の乳母のmanaさんには連絡をしておきましたので、こちらにお泊まり下さい。部屋を用意させていただきました」

「ありがとうございます」

「礼は結構です。もう日も沈みますので、中へどうぞ」

慇懃だが、冷たい態度を崩さない使用人に案内され、彼女は宮殿の中へと入った。フィリーはどうやら中で待っているらしい。

宮殿とはいえ小さいためか、天井は彼女が普段暮らしているとこ

るよりも低い。だがその分、心はとても落ち着いた。彼女の住む宮殿は、この国の王であり、彼女にとっての父親も暮らすため、勿論それはそれは豪華な作りだが、本人からすれば、この小さな宮殿のほうに、気を張らずに済むから、好きになれそうだった。本来王族の住む宮殿には、必ずその時代の王の定められた『色』のじゅうたんと敷く、という決まりがあるのだが、ここは主が主のためか、少し濃いヒマワリの色ではなく、深い青——主の瞳の色——に近い色のじゅうたんが敷かれていた。

「えっと、ルーエンさん」

前を歩くルーエンに恐る恐る声をかけた。「ルーエンで結構です」と、間髪いれずに声が返って来てビックリしたが、こちらもすぐさま声を返した。

「あの、この宮殿を建てたのは、どなたですか？」

「・・・はい？」

「ですから、この宮殿を建てた、建設者です」

「ああ、そういうことですか。確か、もう引退された方だったと思います。名前は・・・」

「フレット・バーロン」

「あ」

「よくご存じですね、姫様」

音もなく、使用人の動きは止まった。

驚きもせず、ルーエンは少し離れたところに立つ自身の主人を見やった。ルーエンの後ろから、こっそりとエマニエルは顔を出す。

「どうしてそんなことを聞くの？」

フィリーは不思議そうな顔でエマニエルを見た。

「私、王宮の外に庭を作っていただけになったのですけれど、その隣に、一応外泊用の屋敷、有体に言うと別荘も建てる予定なので・・・」

『セルベザン帝国』の皇太子とその妃がやってきた際に開かれたパーティで、手ずから作った刺繍入りのスカーフを皇太子妃にプレ

ゼントしたところ、大層妃が気に入ったため、皇太子から異例の礼状が後日届けられた。その褒美として王が、何か欲しいものをやると言ったら、エマニエルは『城の外に自分の庭が欲しい』と言ったのである。

「この小さな宮殿が気に入ったの？」

「はい、とても」

真剣な面持ちで、彼女は答えた。

「あなた、物好きねえ」

「そうでしょうか？」

「普通なら、豪奢な、それこそあなたが暮らしているような宮殿を、と望むわ。」

「別に、沢山の人を招く訳ではありませんから」

エマニエルは単に、王女として振る舞わなくて良い隠れ家が欲しかっただけ。だから、自分の望む場所にまで、王女としての『エマニエル』をひっぱっていきたくなかった。

「ふうん」

「・・・姫様、エマニエル王女様に対してそれはあまりに失礼では今まで黙っていたルーエンが、とうとう苦言を呈した。

「良いのです、フィリー様は私よりも年上ですし・・・」

「ですが」

苦々しげな顔の使用人が、ちらりとエマニエルの顔を見やった。

「本人が良いって言うてるのだし、固いことは無し。どうせ、今日だけのだから」

フィリーは踵を返し、すたすたと歩き出した。

「・・・」

ため息をつき、使用人は主人の後を追う。遅れないよう、慌てて彼女はついて行く。

現実には引き戻された気がした。フィリー王女と今まで会ったことが無かったのは、会わなかったのではなく、会えなかったからだ。本来なら、会って言葉を交わすなど、一生あり得ないこと。特例は、

滅多にないから『特別』であり、何度もあることではない。

「ルーエン。私は、今日は泊まらないで帰ります」

「ですが、もう遅いですし」

「迎えを読んでもらえますか？色々、後処理が面倒になるのは、どうかと」

「確かにそうですが」

ルーエンの性格からしたら、自分がここに泊まるのは面倒事以外の何物でもないし、フィリーにしたって、口には出していないが、後々やっかいなことになるのは分かっているはずだ。ならば、こうなった以上、長時間ここに滞在するのは、双方にとって得策ではないだろう。

「お分かりのようでしたら、最初から、お越しにならなければよいものを・・・」

ボソツと呟いた言葉は、彼女に突き刺さった。しかし、それは正論でもある。

通された部屋はフィリーの自室だった。部屋に着くなり、ルーエンは一礼してさっさと出て行ったので、姉と二人きりになった。

「まあ、その席に座って」

指差す先には、窓の脇に置かれたテーブルとイスがあった。

「ありがとうございます」

一言ことわりを入れてから、エマニエルは椅子に腰かけた。その向かいに、フィリーも座った。

「最初で最後のお茶会ね。どうせ、お夕飯は食べないで帰るおつもりでしょ？」

「はい。これ以上お手数をおかけするわけにはいきませんし」

「物分かりのいい子ね。あなたなら、きっと生き延びていけるでしょう」

陰謀渦まく王宮では、たとえ直系の王族でも落とし穴におとされ

る。それくらいはエマニエルだって知っている。現に、彼女は見てきたのだ。陥れられ、王宮を去っていった王子王女の姿を。

「ねえ、エマル。あなたは恋ってしたことがある？」

突然、フリーはそう言った。脈絡など全くない、いきなりすぎる話題転換だった。

「エマルとは、私のことでしょうか」

そして、あえてエマニエルも、ワンクッション置くためにとぼけてみせた。

「そう。だって長いじゃない」

「確かにそうですね。・・・えと、恋ですか？私には、経験がありません。あるほうが問題かと」

「優等生の答えね。その通りよ、エマル。私達は王女だから、どこぞのお偉方の子息と結婚する将来しか待っていない。しかも、それが一番幸せな未来。上手くいかなかったら、何かしらの事件事故に巻き込まれて葬られるかもしれないしね」

「だけど、と姉はいう。

「恋をすることは、私たちにも許されたことなのよ。何故だかわかる？」

「分かりません」

その類の話はいくらか聞いたことがあった。醜聞、つまりはスキヤンダル。色恋沙汰のそれらは、はかりごと謀のかっこうの道具になる。しかし、恋は盲目とも言うように、一度はまってしまったらなかなか抜け出すことは出来ない。そうして、術中にはまり、被害者は姿を消していく。数年前までは、それによっておこる使用人達の人事異動や退職が後を絶えず、王宮内がとても騒がしかった。

「あなたはきつと、恋なんてしたら、足元をすくわれる、と思ってるでしょう。もちろんそれは正しいわ。だけど、だったら、最初から、恋と言うものに諦めと言う名の境界線を作ってしまえば良いの。・・・まあ、こんなものは、『恋』とは言えないし、当事者からは『外道だ』と言われてしまうけど」

「具体的に、どんな？」

「一言で言うなら、そうね……」
数拍、姉は考えた。

「完全なる、『自己完結型』ね」

「つまり、勝手に、それも一方的に恋をして、想いを伝えることなく、その人への想いだけを募らせていく……ということですよ
ね？」

「そう。片思いの究極とも言うべき形よね」

「危ないのでは？それだったら、想いが強くなりすぎてしまったりしたら……」

その先は、いともたやすく想像できる。その先を、彼女は目にしているのだから。

「元も子もない。でも、やっぱり恋って、しないと駄目なのよ、女の子って言う生き物は。それにね、婚約者に恋する王女もいるし、幸せな結婚生活を送っている人も、少ないながら、確かにいるけど、そんなのは稀。だから、孤独な闘いに身を投じる必要があるの」
「あなたも……？」

さっぱりとした性格だと思っていたファイリーがここまで言うと言うことは、つまり。

「ええ」

あっさりと、姉は頷いた。

「それは、空想上の人ですか？それとも……」

「残念ながら、実在するわ。そしてその人のことを思って、涙を流すの。もう会えない人だと知ってるのに」

窓の外に、視線が行く。哀しげな顔。きっと、その人のことを想っているのだらうと、ぼんやりと彼女は考えた。それと同時に、見のうちに燦ぶる想いに気付かないふりをする。

「不毛ですね。哀しくならないのですか？」

「……哀しくはならないことのほうが無いくらい。だけど、それでも、想いを断ち切ることは出来ないの。伝えることも、当然なが

「出来ない」

「私に、出来るでしょうか。そんな、途方に暮れる行為が」

恋なんて、思っていた。縁遠いものでしかない。王女として生まれ、生き、そして死んでいく自分には、尚更。それでも姉の言葉には心が揺り動かされる。

「出来る出来ないではないの。やるかやらないか。鋼のような決意と覚悟がいるし、大変だし、こんなことなら、想いを断ち切る方がずっとずっと楽ではないかと何度も思う。それでも、という強い想いを抱くことができるのなら」

「矛盾・・・ですね」

「ええ、矛盾。その矛盾すらも飲み込んで、滑稽だと思いつつも、愚かだと知つても、それこそ不毛だと分かつていても、恋をするの。とても歪んだ形の恋心を抱いて、生きていくの。辛いなら、簡単よ。やめてしまえば良い。だけど、楽だと分かつても、一度恋におちたら、やめることは難しい」

「麻薬のようですね。分かつていても、やめられないだなんて」

「そうよ。恋なんて麻薬。錯覚に過ぎない。その錯覚に踊らされるけど、それでも、の先があるのもまた事実」

「・・・それは、一瞬でも良いのでしょうか？」

「時間なんて関係ないの。恋をしたという事実は、あなたの中にずっと残ってくれるわ。所詮は、生殖本能の後付けかもしれないけど、相手は、誰でも良いのでしょうか？」

「もちろん」

「・・・私、実は、姉様に、この宮殿に連れてきて頂いたとき、正直後悔したのです。ああ、面倒なことを起こしてしまったと。けれど今は、そのように後悔をした自分に後悔している私がいるのです」
この短時間のうちに、彼女の世界は目まぐるしく変わっていた。

「そんなに、たいそうなことを言った覚えはないけど？だって、あなたの最初の後悔はまっとうな、とても正しい後悔だもの。規範って言う枠から見ればね。でも、あなたはそんな枠の中に収まろうと

する自分の姿よりも、粹からはみ出した自分を選んだ。正直な話ね、この話は、褒められるものではない。それくらいは、あなたにだってわかるでしょう。だけど、言っておくべきことだとは思う。だって、あなたも一人の女の子だから」

一人の女の子。王女でありながら、ただの女の子としての自分がどこかにいる。その自分は、どんなふうなのだろう。恋をして、目の前の姉のように、哀しいと知って。

「そういえば・・・私が幼い時、母が言っていたのを思い出しました。『諦めなさい。私たちは、一度諦めることで、開き直り、前へ歩めるの。だから、意地を張ってはいけないわ。女の意地の張りどころを、間違えては駄目よ』」

「あの方らしいお言葉ね」

フィリーはカラカラと笑った。

「姉様、最後に一つよろしいですか？」

直感で、もうすぐお茶が来るだろうと思った。でも、お茶は飲まない。それは、せめてもの意地ではなく、小さな小さな決意。

「なあに？」

帰ることが分かっていたのか、姉は妹の姿をしげしげと見る。

「姉様に、『自己完結型』の恋をお教えになられたのは、どなたですか？」

「・・・私が考えついたとは思わないわけだ」

「姉様の言葉は、姉様の救いになっっているように思うのです。でも、姉様は、その言葉にある種の尊敬の念のようなものを抱いてらっしゃる。だから、」

「誰かの受け売りだと考えた」

「・・・はい」

今更になつて、口を滑らした、と気付く。しかし、時、既に遅し。「あなた、鋭いわ。・・・教えてあげる。私に、この、救いでもあり、苦しみでもある『恋』を教えてくれたのはね、」

「あなたは気付いていないでしょうね。私が、誰に恋をしていたかなんて」

誰もいない部屋の中、彼女は一人、笑う。

「きつと、思つてもいないでしょう。だって、あなたの心の中には、『あの人』しかいないのですものね・・・」

今でも、思えばすぐに、描くことができる、その姿。ずっと、ずっと、思つてきた相手だから。一瞬の恋を、一生の恋にしても良いと思えた人だから。しかし、その視線の先は、彼女では無い。それでも。

「でも、それでも良いのです。私は、あなたと出会い、言葉を交わした短い時間の中で、確かにあなたに恋をしたのですから」

彼女の手には、封を切られた封筒があつた。もう片方の手には、その中に入っていたであろう、便箋。

「私は、哀しいけれど、でも、幸せだったのです。だから、あなたに出逢つて、あなたの言葉に触れて、あなたに恋をして、本当に良かったと、今でも思いますの」

辛かつた、『その後』。恋を知つて、苦しみを味わつた。胸が張り裂けそうなんていう比喻は、小説の中の、恋に盲目な、お気楽な少女のためにあると思つていたのに。気付けば、自分はその少女と同じだった。

「あなたに恋をして、その辛さを忘れようともがいた私は、色々な人を思つたのですよ？」

クス、と小さく笑う。視線は、便箋の文字の羅列を追っている。何度も何度も読み返したのに、読むたびに、新たな発見をするように。

「本当に沢山の人を思つたけれど、あなたへの想いは留まることを知らず、誰かを思っているはずなのに、気付けばあなたを思つてい

るのです」

過去を懐かしむように、丁寧に、言葉を紡いでいく。それは、誰に聞かせるでもなく、自分のために。

まだ幼かった14の彼女は、一生分の恋をしたのだと信じきっていた。

「私は、確かに誰かを思うことができます。でも、それは、所詮執着なのです。気付けば、想いは冷めているのです。恋だと思ってても錯覚だと悟ってしまうから、想いは霧散していくのです」

淡々と、言葉は零れていく。紡がれ、そして、零れ落ちる。視線はなおも文字の羅列を追っている。既に2回も読んだのに、自然とそのコハク色の瞳は、3度目の文字を追う。

「私の恋は、あなたに捧げられたのだと、思っていました。ただ、さみしいと知ってしまったから、その心を埋める何か欲しかっただけ、人恋しさのようなものだったのだと、私は信じていました」
「だけど、と言葉が途切れた。その顔は、薄暗くよくは分からないが、笑っているようだった。」

自然と便箋を握る手に力が入る。

「私は、あなた以来、二人目となる、想い人が出来てしまったのです。きつと、あなたがこのことを知ったなら、喜んで下さるのです。それに私は、嬉しさと寂しさを抱くのです」

嬉しそうな声色で、彼女は言う。

3年間も耐えて、ようやく訪れた冬の終わり。最後はきつと、冷たい風が吹いて、次には暖かな風が吹いてくれる。冷たい氷が溶けたのは、何時だったのだろう。そんなことすらも、もう分からない。
「これは、あなたから、卒業するということなのでしょう」

確かに恋だった。強い想いだった。気付けば恋に落ちていた。そして、今、その思いから、彼女は。

「でも、確かなことがあるのです」

頬を伝う雫は、名残。後を引かない、潔い、一滴。

「私の初恋の相手はやはり、あなたなのです」

だから、前へ進む決意が出来た。

ハンカチで目元を抑えた後、彼女は、四度目の文字を追って行った。その手紙への返信は、何度も書き直して、書き直して、悩んだ末、とてもぶっきらぼうなほど、簡潔な一行のみの文になってしまった。

クローヴィア

『あの人』は、来るだろうか。

涙の真意に、気付いてしまっただろうか。

それでも良いと、彼女は思った。一つ年上の、けれどどこか幼くて、そして儚い、霞草のようなあの人になら。

第14話（後書き）

はい、次は、実は結構凄い話になります。王女様にとっては、ですが。

エマニエル王女は、スピレイアと並んで凄く考えたキャラクターの一人です。ヒロインは、最初にこれでもかと決めておいたので、変更は特にはないのですが、エマニエルの立ち位置は、ローアとエマールのお茶会の直前に大きく変わりました。それによってお話の変更がいくつもあったのですが、今はこれで良かったと個人的には思っていたり。その『良かった』に行くにはまだまだかかるのですがね。スピレイアは、今は登場が少ないですが、今の『お茶会』の件が終わったら、思いっきりスポットに当たる予定です。個人的に、スピレイアには思い入れがあったりするので、ローア並みに濃い人生を歩んでもらおうと思っています。

なんでこんなことを書くかと言うと、次で一応の小さな区切りになる予定だからです（ずれ込む可能性もあります。優柔不断で申し訳ない）。

これからの話は、ビックリするくらいどろどろしてきます。色々なしがらみがあって、色々なつながりが不可思議なところである物語です。先はまだまだ長いので、これからもお付き合い願います。

第15話（前書き）

お久しぶりすぎて、ちと申し訳ないです・・・そして、長いですが、これで半分です。

第15話

王宮に上がるのが生まれて初めてのクローヴィアは、妹のスピレイアに、こっそりと助言をもらった。それを頭の中で何度も再生しながら、馬車の窓を流れていく景色を眺める。惜しいことに、今は明るいから、月や星は出ていない。だから、視線で追いかけて続けられるものは、眩しくて直視できない太陽だけだった。

『まず、足音を立てて歩いては駄目よ。絶対に。お城はにぎやかな場所のようで、いつも静かなものなの。後宮の妃も、女官も、姫たちも、決して足音を立てたりはしないわ。滑るように、気配を消すくらいの心づもりで歩くの。それから、お辞儀は優雅に。どんな時も、社交界でいろんな人から注目を浴びているくらいの気持ちでするの』

「・・・お辞儀は優雅に、歩くときは滑るように・・・」

『そして、椅子に座るときも音を立てては駄目よ。そして、腰かけるときは、浅く、姿勢は美しく。絶対に背もたれに背中がふれては駄目よ。背もたれの無い椅子に腰かけていると思うの。お茶をいただくときは香りを楽しんでから。お菓子を頂くときは本当に小さく、味が分かるくらいの量だけを口に含んで、ゆつくりと味わうの』

「音をたてないで座って、香りを楽しんで、本当に小さく・・・」

『最後に、絶対に本音は避けること。たとえ白が正解であったとしても、相手が黒だと思っているのならば、自分も黒を選び、自分は右の方が良くても相手が左を選ぶのなら、左を選ぶ。王族の機嫌を損ねたら、この家はいと簡単に没落する。別にそうなくても良いけれど、ここで働いている人たちの生活も考えると、分かるでしょう？』

その通りだった。この屋敷には、彼女のために食事を別に用意してくれるリマがいて、数少ない友人のレティがいて、そしてメイド長がいる。

「あなたは、このフェリエス伯爵家の代表として、お城に上がるの。だから、そのことだけは、忘れては駄目よ」

「分かっています。分かっています、お嬢様」

ふと、先ほどのことを思い出す。スピレイアから助言をもらい、さて、行くかと玄関ホールへと向かったときのことだ。

「・・・レティは、何であんなことを言ったのかしら」

行く直前に、彼女は玄関ホールで待っていたレティと少しだけ話をした。レティの話だった。

「私ね、あなたのことが妬ましかった」

「妬ましい？」

「あなたには、どんな関係であれ、親がいるから」

「レティは？」

「私の親はね、もうどっちもないの。両親とも、病気で死んだから」

「・・・」

「だから、最初のころは、あなたのことが気に入らなかった。悲劇のヒロインであることをアピールしているみたいで、ね。だから、嫉妬だったの。けどまあ、私、やっぱりクロアのこと好きよ」

「あ、ありがと・・・」

「まあ、私が単なるおバカさんなのかもしれないね」

「そ、そんなことは無いよ、だってレティは私よりも物知りだし・・・」

「」

「少しは緊張、ほぐれた？」

「え？」

「少なくとも、さっきまでよりかは、マシな顔してる」

「そう、かな・・・」

「ええ。頑張ってきてね、私たち女中のためにも」

「うん！私だって、その女中の一人だから」

「じゃ、行つてらっしゃい」

「ありがと、レティ。・・・あ、ねえ、今度、あなたの御両親に

会いに行っても構わない?』

『私の、親に?』

『そう、あなたの親に』

『どうして?』

『あなたは、初めてできた私の友達だから、親にも自己紹介くらいしない?』

『・・・だよ』

『え?』

『いや、遠いから、ここからだの数日かかるんだけど』

『そっか・・・じゃあ、まとまったお休みをもらえたら、一緒に行きましようよ』

『そうだね、でも、それなら秋に行かないとね』

『秋?』

『私の親は、マリイブツセの花が好きなの。その花は、秋にしか咲かないから』

『そうなんだ。じゃあ、来年の秋にでも』

『その前に、あなたがこのお茶会を無事に終えて帰ってくる事が出来るかどうかの問題が待ってるけどね』

『ま、まあ、ね』

『改めて、行つてらっしゃい』

『はい、行つてきます』

今思えば、何故、今から招待された茶会に出向く人間に、自身の身の上話を聞かせたのだろうか。結果的に緊張はほぐれたが、緊張をほぐすのならば、もっと良い話があるのではなからうか。

彼女のそんな何処まで行っても到達点の無い思考は、城に到着するその時まで続いた。

フィリー王女の住まいである『ソレマンヌ宮殿』に到着する頃には、正午を過ぎていた。案内役の女性は、クローヴィアが今まで生きてきた中で一度も会ったことの無いような類の人だった。珍しい榛色の瞳と髪、女性があまりかけないつるの無い眼鏡。そして、女性でありながら、スカートを穿かないで男性が着るようなスーツ姿といういでたち。

歩く速度は速すぎず、遅すぎず。時折、クローヴィアの様子を窺うように後ろを振り向くが、決して言葉を発さない。

「あの、何故・・・紳士服を着てらっしゃるんですか？」

勇気を振り絞って尋ねた彼女の問いに、数歩前を歩く女性は、ぴたりと立ち止まった。

「そうですね・・・まあ、スカートが嫌いなんです。女として生まれたことを後悔したこともありますし、女らしい恰好が好きではないのですよ、私は」

そう言って、振り向いた女性は、にっこりと笑って見せた。とても魅力的な、女性独特の笑顔だった。

「・・・はあ」

その後は、二人は言葉を一言も交わさなかった。女性は、宮殿の入口のすぐそばにつくと、礼をして去ってしまった。随分と早歩きだった。

一人取り残されたクローヴィアは、いきなり宮殿内に入ることも出来ず、外観をしばし眺めた。

少しして、あることに気がついた。

「王女様の、『隠れ家』みたい」

さほど似ているという訳ではないのだが、雰囲気似ていた。それでっただけ勇気が出た彼女は、ゆっくりと時間をかけ、宮殿の中に足を踏み入れた。

ペンキが塗り替えられたばかりだと分かる白い橋を渡り、赤い花が咲く一本道をしばらく進む。誰にも会うことはなかったし、とても静かだった。水のせせらぎや、風の梢しか音が無い、王宮と言う

場所にしては、いささか珍しい。

長い一本道の終わりに、ようやく人が立っていた。こげ茶のスーツを身にまとった若い男性だった。

「お待ちしておりました。ご案内いたします」

深々と礼をすると、男性はゆつくりと歩き出した。

そうして、クローヴィアは女性の案内から約30分後に、やっと宮殿と言う建物の中に入ったのである。

若い男性は、時々クローヴィアの方を振り向くだけで、案内の女性同様、無言だった。先ほど、どうにかレティのおかげでほぐれた緊張は再び高まり、彼女の手袋をはめた手は、汗で濡れていた。しかし、指は氷のように冷たく、心臓は早鐘を打っている。その緊張をどうにかほぐすべく、宮殿内を失礼にならない程度に見回す。

天井は低めで、全体的にこじんまりとした印象を受ける。それこそ、王女の『隠れ家』のように。そして、装飾品がとても少なく、廊下はこざっぱりを超えて少々閑散としている。けれど、豪華な廊下を歩くよりはずっとずっと気楽だった。壁に立派な額縁に入れた絵などが飾られていようものならば、逆にその絵に自分が値踏みされているように思うし、上品な花瓶に美しい花が活けられてでもするならば、自身がその花を引き立てる立場だと錯覚してしまう。しかし、この廊下にはそう言ったものは一切合切存在していない。まだ会ってすらいらない王女の人となり、少しだけ見えたような気がして、クローヴィアは一人安心した。

男性が立ち止まったのは、通り過ぎてきたそれらよりも幾分も上等な扉の前だった。男性は黙ってドアを開け、そして部屋にクローヴィアを通すと、すぐに退出した。

「・・・」

部屋は広い。その割には調度品の数は少なく、廊下同様閑散としている。

そして、部屋で唯一の窓のすぐ脇に置かれたテーブルの席に着いている人。クローヴィアがここに来た目的の人が、そこにいる。

「突っ立っていてもはじまらないでしょう」

そう言つて、フィリー王女は席を立つた。

「こちらにいらつしやいな。自己紹介から始めましょうね」

何とも言えない笑顔を浮かべた王女は、青い目を細め、彼女を手招きした。

恐る恐る、クローヴィアは王女の方へと歩み寄つた。今になって、スピレイアが言つたことを思い出す。滑るように、と心がけ、短い王女までの距離を歩く。

「そんな、気を使わなくて良いわ。公式の、格式ばつたものじゃないのだから」

「は、はい」

ついこの間の、王女との、不可思議な茶会を思い出す。エマニエルは最初、隙の無い見事な笑顔を浮かべてみせた。それを見た時、一つ年下のはずなのに、自分の方がずっとずっと幼いように思えたのを、覚えている。そして、今は、一つしか変わらない目の前の姫君を見て、自分とは何もかもが違つるようにしか思えなかつた。

ゆつくりとフィリーの前まで歩き、硬くなり過ぎない程度に丁寧な礼する。つい最近までは縁の無かつた所作には、ぎこちなさが残つていた。

「ええと、クローヴィアさん、で合つてる？」

首をかしげ、目をぱつちりと開く。あべこべな所作は上手にかみ合っていないようだった。

「はい。クローヴィア・リュヘテ・フェテリエスと申します」

「初めまして、ローアちゃん。私はフィリーよ」

ローアというあだ名をつけたのはエマニエルだ。おそらく彼女から聞いたのだろう。

「突っ立っているのもなんだから、席に座つて頂戴な」

「はい」

席に着くと、不思議そうな顔で王女がクローヴィアを見ていた。

「ところで、帽子、脱がないの？」

「え？あ、ああ・・・」

今になって、自分が室内にいるにもかかわらず、ハットをかぶったままであることに彼女は気付いた。慌てて脱ぎ、膝の上に置く。

その一連の動作を見ていたフィリーは、面白そうに目を細めた。

「同じ姉妹でも、随分違うものなのね」

「妹と、面識が？」

「いいえ。エマルから聞いただけよ」

私は、ここから出られないから、とその後フィリーは小さく付け足した。

「そういえば、エマルが、あなたのことを話していたわ」

「ど、どのような・・・」

「なんだったかしらねえ」

楽しそうな、意地の悪い顔で、フィリーはクローヴィアを見ていた。完全に遊んでいる。

「まあ、そんなに悪いことは言ってなかった・・・ような、そうでもないような」

「ど、どっちなんですか？」

「さあて、どうだったかしらね」

「・・・」

客人の顔から色が無くなって行くのを見て、王女はからかうのをやめた。

「そんな、大げさな話ではないでしょう」

いじめがいのない子ねえ、と言うその顔は、先日出会ったコハク色の目をした王女と似ていた。

「でも、私は一応家の代表としてここにいるので、その・・・」

「粗相があれば、家の未来にかかわる、かしら？」

「はい」

「でもあなた、確かメイドとして働いてるんじゃないの？」

「そうなんですけども・・・」

おかしな話だ、と王女は思っていた。妹であるエマニエルも思ったことだろう。

何故、曲がりなりにも伯爵の血を引く実の娘を働かせているのかと。普通、冷たく当たるとしても、夫人が、ならば納得がいく。しかし、その夫人は目の前の娘をいたく可愛がっているという話だ。それも、自身の娘、スピレイア同様に。

「あなたのお父様は、何故、あなたを追いださなかったのかしらね。だって、働かせるってことは、あんまり仲が良いわけではないでしょう。そりゃあ、まあ、あなたはスピレイアの代わりになり得るけども」

「はい、私もずっと疑問でした。滅多に会わないので、会えたときにはいつも聞くのですが、答えを教えてくださいないのです」

「おかしな話ね」

「おかしな話です」

最初、その話を聞いたときは、フィリーはこう考えた。つまり、伯爵自体は娘であるクローヴィアを大切に思っているが、夫人が妾の子供を可愛がるなど許さない、という具合なのではないか、と。だが、夫人は妾の娘を可愛がり、可愛がるであろう伯爵は冷たく当たる。どうしてこのような関係が成立するのか。

可能性としては、愛する妻以外の女性との間に生まれた子供であるから、だとか、本当は自身の血をひいていないから、だとか、何か災厄をもたらした、等。

しかし、このうち、当てはまりそうなのは一つ目ぐらいで、二つ目は、偽造のしょうが無い事柄だから、あり得ないし、三つめに関しては、今なお栄えているフェテリエス家には一番縁のないことだ。つまり、愛妻家である伯爵には妾など、我慢ならないことだった、ということだろうか。

最後に、可能性があるとするなれば、

「ねえ、変な話なのだけど、あなたの御継母とお父様は仲がよろし

いのよね？」

「え、ああ、それは・・・」

クローヴィアは、さすがに答えに困った。事実を言うのは良いことではないとあらかじめスピレイアから言われていたし、これに関しては、王女と言えど、返事をすべきことではないからだ。

「ねえ、ローア。もしかして、御継母は離縁を伯爵に持ちかけたりしてない？」

「・・・え」

初対面の相手の家の諸事情に首を突っ込んでいる自分に内心驚きながらも、フィリーは更に言葉を重ねていく。

「離縁まで行かなくても、関係があまり良好ではない、とか」

「・・・」

クローヴィアからすれば、初対面の相手から、家の内情を根掘り葉掘り聞かれている。それはあまり話して楽しくなるような類のものではない。それも、上品な談笑が流れるはずの茶会であるようなものでは到底なかった。けれども、彼女自身が気になることもあった。

言葉を選びながら、ゆっくりとクローヴィアは話し始めた。

「その、なんて言えば良いのか分からないんですけど、最近、伯爵・父はあまり屋敷に帰ってこなくなりました。本邸に戻っているわけでもないようですし、戻ってきてても、二人の間に流れる空気はピリピリしています、あつ、このことは内密に・・・」

「安心なさい、個人情報のお守秘はしてあげるから・・・なるほどねえ。ところで、あなたのお母様は、お亡くなりになつてゐるわよね？」

「え、ええ」

考えられるのは伯爵の浮気。しかし、それならクローヴィアに冷たく当たる理由が無い。

「・・・あの、ええと、」

「ああ、御免なさいね。変なことを聞いて・・・流しましょう。えっと、飴が好きなのよね？」

王女にとって、フェテリエス伯爵の夫人は、赤の他人として流せる人では無いため、その行き先については、気になるところではあった。しかし、いくらなんでも初対面の相手とすべき話では無かった。

「は、はい」

「今日のお菓子に、飴細工を用意させたの。気に入るといいのだけど」

「飴細工、ですか」

飴細工なるものを、クローヴィアは直に見たことが無かった。せいぜい本に載っていたのを見ただけだ。そもそも、飴細工は見るものであつて、食べるものではないのではなかったか。

「あなたを案内した使用人がいたでしょう」

「は、はい。えっと・・・どちらですか？」

「男の方。彼が、腕によりをかけて作るものだから、まあ、それなりに期待できるわ」

「器用な方なんですネ」

確かに、男性らしい、というようなふうではなかった。手先が器用だと言われて、ああ、確かに、と頷くことは難くない。

「彼、ルーエンと言うのだけだね、究極の器用貧乏とも言えは良いのかしら・・・庭仕事も、花の手入れも、裁縫や刺繍も、料理も、何もかも、殆ど一人でやってしまうの」

「だから、人が少ないのですか？」

「ええ、まあ、そう。私は訳ありだから、余計にそうなんだけど、歳があまり私と変わらないのに、随分と博識で、変なことに詳しくあったり」

「その、ルーエンさんはいくつなんですか？」

「確か、今年で、」

いったん区切ると、フィリーは顔を横に向けた。

「23で、合ってるわよね？」

「はい」

扉を開けて、当のルーエンが入って来た。フィリーはにっこりと笑うと、彼に『用意して』と小さく指示を出した。

「さて、その、お菓子をご賞味いただきましょうか」

ふと、クローヴィアはある変化に気付いた。けれども、それこそスピレイアの助言通り、口にすることはなかった。

菓子を食べ終えて少ししてから、王女は庭を案内すると言って、クローヴィアを外に連れ出した。二人が部屋で話しているうちに、外は雲に覆われていて、二人が庭に出た頃には、空は完全に雲で覆われていた。

「あらあら、良い天気だと思ったのに」

「でも、お庭を拝見させていただけるのは、とても嬉しいです」

前回の茶会では、雨で庭を見ずに終わってしまった。彼女の中では、あの茶会は茶会と言えるものではないのだが。

庭は王族の姫のものとは思えないほどつつましかった。とてもこじんまりとした庭には、あちこちに様々な種類の赤い花が咲いていた。

「赤がお好きなのですか？」

「ええ、まあ好きと言えば好きかしら」

しかし、一番ポピュラーであるはずの赤いバラは一つも無かった。ただし、白いバラの木はいくつかあった。

「・・・うーん、かの女王様がいらしたら、怒って庭師の首をはねてしまいそうですね」

「でもその前に、赤く塗るからどうにかなるかもしれないわ」

「ああ、そうですね」

柵が庭を六角形に囲み、中央には屋根のある東屋の様な建物がある。花はその建物を取り囲むように植えられ、6つのエリアごとに植物が分けられている。

小さな石造りの道を歩きながら、フィリーはたわいのない話をし

た。噂話の類やら、今まで自分のもとで働き、やめていった使用人の話など。本人がどうでも良いと思っっているであろうことを、ただらと話していた。

「でね、私はこう言っただけで、それが気に食わなかったのか、たった三日でやめたのよね」

「三日ですか、随分と早い」

「でしょう？私もさすがにびっくりしちゃった」

適当に相槌を打ちながら、クローヴィアは核心を絶対に触れないよう気をつけている隣の姫の表情をちらりとうかがった。

笑っているが、どこか退屈そうだった。

ならば、と意を決して、クローヴィアは話しかけた。フィリーがクローヴィアに対して気になっていることがあったように、クローヴィアも、フィリーに対して言いたいことがあった。

「あの、フィリー様」

「なあに？」

「・・・どうしても、フィリー様に相談したいことが」

「相談？ふうん・・・」

しばらく黙ると、フィリーは東屋を指差した。線の細いテーブルと二つの椅子が、薄暗い中にたたずんでいた。

席に着くなり、王女は

「で、相談事って何？」

「は、はい・・・」

気持ち落ち着かせ、クローヴィアは口を開いた。

「その・・・えっと、この間、エマニエル王女のお茶会で、どうやら私は王女の機嫌を損ねてしまったようで・・・」

「ああ、なるほど」

そこまで詳しくは聞いていないが、フィリーは大体のあらましを把握していた。機嫌を損ねたと思い込んでいる理由がよく分からなかったが、とりあえず、

「怒ってはいなかったわよ。ただ・・・」

「た、ただ？」

青ざめた顔で、こちらを窺ってくる一つ下の娘に、王女は安堵を与えるべきか、不安を抱かせるべきか逡巡し、そして、

「まあ、どうしてあなたが手紙を送って来たのか、不審に思っていたようね」

「・・・」

青ざめた顔が、再び色を全て落とした。百面相も良いところだと嘆息しながら、空気を変えるべく姫は言う。

「あなたが顔色をいちいち変える理由はなんなのかしら。家？それとも、単なる自分の未来？」

どちらも、結局エマニエルとは関係の無い問題。その程度のものならば、相談に乗る理由も無いし、適当に話をまとめて終いだ。

そう、思ったのだが。

「・・・仰ったんです。王女様が、私に」

「なんて？」

「『友達になつてほしい』と」

「あら」

その言葉に、姫は目を丸くした。あの妹が、友達などと言う単語を発するとは。

「だけど、私・・・無理だつて言っただんです」

「何故？」

「怖かつたんです」

「怖い？」

「エマル様と仲良くなったら、自分が今まで見たこともない物や、世界を見ることができると思ってしまったから・・・」

「それは、あなたにとって幸せなことではないの？」

今まで見たことの無い物や世界を知ることができるならば、それは普通、その人の人生に様々な影響を齎すだろうし、それと出会えたことを、当人は幸福だと思つのではないだろうか。当然、それを見なければ、知らなければ、幸福であつたのに、と悔やむことも少

なくはないが。

つまり、クローヴィアが恐れていたのは、エマニエルを怒らせて罰せられることではなく、エマニエルにひどいことを言ってしまうのではないか？という後悔なのだろう。だが、釈然としないのは、その本人が、よく状況を理解していないように見えることだ。

一体どういったことを考えているのだろうと、姫は青ざめ、しおれている霞草を見やった。

「ねえ、ローア。あなたは、どうして私に会いに来たの？」

「え・・・」

唐突な問いに、今度はエマニエルが目を丸くした。

「それは、エマル様に」

「頼まれたからでしょう？なら、どうしてあなたはその頼みを引き受けたの？」

「エマル様の、思いを知ったから・・・」

「つまり、あなたにとって、エマルはどうでも良い人じゃあないのでしょうか？」

「え、それは、その・・・はい」

「だから、あなたは引き受けたんでしょう？そして、あの子は、それを望んだ。だから、あなたはここにいる・・・違う？」

「違います。その通りです」

「なら、エマルにとっても、あなたはどうでも良い人じゃない。だから、面倒で、針の穴よりも小さい私への道のりを、ちゃんと正攻法で踏破した」

『空気姫』こと、フィリーに会うのは、王族の、それも直系の者であつても難しい。現に、父である王がここに来るのにだって、基本的には随分前から様々な手続きを要する。つまり、ただの伯爵家の傍系の娘がこの宮殿に足を踏み入れるのは、本来ならば不可能に近いことだった。しかし、それをエマニエルはやってのけた。自分の今まで築き上げてきたもの、手に入れたもの、全てを総動員して、フィリーとクローヴィアの茶会を実現させた。

その知らせが届いたとき、フィリーはもちろん、滅多に顔の表情を変えないルーエンまでもが『よくまあ、やってのけたものです』と言って驚いた。

「あのね、ローア。あなたが思っている以上に、ここの敷居をまたぐのは簡単なことじゃあないの。でも、それをエマルはやった・・・分かるでしょう？」

「・・・」

クローヴィアは黙るしかなかった。まだ一度しか会ったことの無い、けれどとても強烈な印象を彼女に焼き付けた姫。向こうにどんな意思があるにしろ、この茶会は、姫が望み、そして、クローヴィア本人が選んだこと。

「あなたみたいな人、初めてだわ。普通、誰かと会ったら、面と向かって話している人のことを考えるものだけど、露骨なまでに他人のことを考えている人なんて、私、会ったことがない」

「あ、す、すいません・・・」

「良いわよ、面白かったから」

話を聞いていると、自分の立場やら未来と言ったものを、一時とはいえ、忘れることができた。ただの、何でも無い、フィリーという、エマニエルの姉というだけの存在になれた気がして、楽しかった。

「初めて、笑いましたね」

「え？」

目をぱちくりとさせ、姫は首をかしげた。

「先ほどから、楽しそうなお顔をされるときはありましたけれど、につこりと笑ってらっしゃる姫様を拝見するのは、これが初めてです」

そう言つて、クローヴィアは安心したように笑った。

さっきまでの、青白い顔が息を吹き返していた。

「ローア」

「はい」

けれど、忘れることができて、現実が消えない。時間は止まらない。終着点へと近づいて行く足音が、聞こえないふりをしていただけ。

「楽しかったわ。とても」

どうして、エマルが目の前少女を友達に、と望んだのか、その理由がなんとなく分かった気がした。

とは言っても、フィリーとエマニエルが顔を合わせて言葉を交わしたのは数えるほど。フィリーは妹の人となり、そこまで知っているわけではない。

「ねえ、お願いが一つ、あるのだけど」

太陽は傾き、話し始めた時は暗かった建物の中には、光が差し込んでいた。

「なんででしょう？」

「私のことを、エマニエル王女から聞いたでしょう」

「少し、ではありますが」

今までエマルと呼んでいたのに、エマニエル王女と呼び直したということは、それなりの意味がある。クローヴィアは背筋をただした。

「3ヶ月後に、私は死ぬわ」

「・・・はい」

「その前にね、思い出を作らせてほしいと陛下に頼んだの」

「思い出？」

「私、この城の外に出たことが無いの。だから、一度だけ、城の外に出させてくれとお願いした、というわけ」

「なるほど」

つまり、この国を出ていく前に、思い出を作るべく外の世界に出たいということか。

「最初は一人で行こうと思っていたのだけどね、折角だから、誰か誘おうと思って」

「確かに、思い出を作るなら、人数がいた方が良いでしょうね」

一人きりより、幾人かで楽しい思い出を作った方がずっと良いだろう。普通の楽しい思い出が少ないクローヴィアにだって、懐かしむことのできる過去には、不特定多数の『誰か』の影がある。

「それで、あなたと一緒にいこうと思うのだけど、どう？」

「え？」

スピレイアの助言などとうに忘れていたクローヴィアは、気の抜けた声をかけてしまった。

てっきり、エマニエルを誘いたいから、クローヴィアの方からもそれとなく言ってくれないか、というようなものだと思っていたのだ。

「嫌？」

「い、いえ、その・・・」

「ああ、エマルを誘うと言うのだと思ってた？」

「はい・・・」

エマニエルは、14の春にフリーに恋をしたのだという。それが、一生分の恋のはずだった、とも言っていた。

「あの子と行こうかと考えはしたけど、でもまあ、それはやめておいた方が良くことが分かったから、良いのよ」

「？」

首をかしげる彼女に対し、王女は笑いはしても、答えは言わなかった。

昨日の茶会で、エマニエルが気付いたように、フリーも気付いたことがあった。当然何も言わなかったが、二人は互いの腹の内を知らず知らずのうちに探り合っていた。

「それで、どうなの」

「い、行きます！」

「よろしい」

勝ち誇ったかのごとく、姫は笑った。

気付けば、相手の都合のいい結果。どこかで、同じような目に遭ってはいないか、と霞草は思い返す。

「・・・油断なりませんね」

鳥が羽ばたいて行く様を見つめる瞳は、どこか遠い。

「何が」

「青色って」

話が終わると、王女は花壇に水やりをする時間だと言って支度を始めた。せっかくだからと、クローヴィアも手伝うことになった。しかし、ちょうど3つ目のエリアに咲いているパンジーの水やりが終わった頃、ルーエンが慌てた様子でやって来た。

「どうしたの？」

「それが・・・」

訝りながらも耳を貸したフィリーは、話を聞き終えると大仰な溜め息をつき、そして薄汚れたエプロンを乱暴に脱いだ。しわくちやのエプロンは、ルーエンに押しつけた。

「ごめんなさい、ローア。突然迷惑極まりないお客がここに来るんですって」

不機嫌な態度を少しも隠すことなく、フィリーは言った。

『お客』とは誰のことか、と考えるまでもなかった。ここに来ることができる人間は、あまりにも少ないのだから。しかし。

「いえ、私のことは気になさらないで下さい。楽しかったですし」

「そう？なら、良いのだけど」

表情を和らげたのもつかの間、遠くから大仰な音が響く。この宮殿独自の、『ノック』の音である。

「もう、来たのね・・・」

「わ、私はどうすれば」

正式な手続きを踏んだとはいえ、クローヴィアがこの場に留まることははばかれる。

「裏口がございます」

「裏口？」

顔色一つ変えず、使用人は言う。

「はい。私が案内いたします」

「それは良いのですが、裏口からどうやって戻れば？」

初めて足を踏み入れた場所のため、クローヴィアは右も左も分からないし、一人で放り出されたら、無事に帰ることは極めて困難だろう。

「裏口からですと、少々遠回りではありますが、馬車のある場所まで一本道です」

「それなら、大丈夫そうですね」

話がまとまりかけたその時、ずっと黙っていたフィリーが口を開いた。

「忘れていたのだけだね、エマルから伝言を預かっているのよ」

「伝言？」

「『後で来るように』、ですって」

後で、来るように。

何処へ？

この間の隠れ家？

それとも、

「ええとね、ローア。エマルがいるのは、これから来る『お客』の暮らす宮殿内だから、ここからだとして少し遠いわ」

『お客』の暮らす宮殿は、この国で一番豪華な建物と言って相違はない。広大な宮殿には、妃の住まいや直系の息子、娘の住まいもある。そしてそこに、彼女はいる。クローヴィアを、待っている。

しかし、気軽に行ける場所では到底無い。しかも、今のクローヴィアには、招待状という通行手形はないのだ。

「あの、門前払いをされるのでは」

「それは無いでしょうよ。ねえ、モリゼさん」

「ええ、まあ」

「！」

突如、後ろから聞こえた声に、驚いたローアは、持っていた如雨露を思わず落としてしまった。ガラス製の如雨露は、いともたやすく壊れ、跡形もなかった。

「あ、ああ・・・如雨露が」

「そんなことは良いから、後ろをいい加減向きなさい」

あきれ顔のフリーに促され、ゆっくりと後ろを向くと、先ほど道案内をしてくれた、一風変わった女性が立っていた。

「どうも。それでは、ここに留まるのはあまり好ましくありませんし、さっさと行きましょうか」

自分の左手で、クローヴィアの右手を握ると、モリゼは走り出した。

忘れてはいけないこととして、クローヴィアが履いているのは、運動靴ではなく、色つきガラスの飾り靴。そう、ガラスで出来た、走るために作られたわけではない代物である。よって、

「きゃっ」

クローヴィアは盛大につまずくことと相成ったのである。

「・・・先が思いやられるわ」

自分の用事を棚に上げ、フリーは何度目かの溜め息をついた。

「姫様、支度を」

「ああ、はいはい」

お互いに、似ているところは実は結構あるのに、あまりにも違う点が目立つから、全てが違う、共通点など何もない、そんな風に互いが互いに対して思っている。霞草は、白薔薇の咲く庭の主を見て、白薔薇は、同じ色の、けれど違う花を見て。

自分と友達になってほしいと願った、ある姫から話を聞いたとき、霞草は、ふとこんなことを思った。『霞草は、引き立て役だから、目立ってはいけない。だから、そんな大層なことをしてはいけない』。

しかし、同時にこんなことも、思った。『引き立て役ならば、私

は、一体、誰のために？』。

真っ白な薔薇は、たとえ霞草が引き立てても、雪の色。そう、花の形は違えど、色は、同じ。

第15話（後書き）

あまりにも長いので、切りました。私はどうやら、ぐだぐだとした会話を書くのが好きなようです。いえ、一応話は数時間分進みましたけども・・・

この話で一区切り、と前の話のあとがきで書きましたが、長すぎるので、次回で一まとまりとなりそうです。中途半端な登場の仕方をし、時間が止まっている人たちの時計の針は、17話以降で再始動となります。自分でも、やらかした感が否めないのですが、第一回目のお茶会の日だけで、色んな人が色んな場所で色んな事をしています。なので、17話からは、スタートから16話までの時間軸の話と、主人公の物語になる現在の話が入り混じることになります。

次回の更新は、申し訳ないのですが未定です・・・

第16話（前書き）

大変長らくお待たせいたしました。申し訳ありません。そして、
長いです。

第16話

砂糖菓子の世界で、息をひそめて生きてきた。

そんな世界で身に着ける、笑顔の仮面は美しく、素顔などさほど重要ではないと思わせてしまうほどには、彼女の笑顔は完璧だった。誰も、内面など気にはしないのだ。誰も、そんなものを求めはしない。欲しいのは、いつだって自分に都合のいい事実でしかないのだから。

彼女は、生まれた時から綺麗事だけの世界で生きる資格を持っていた。醜いものが、一切入り込めない世界。そんな楽園のような世界で、彼女は息をし、成長していった。

けれど、それは同時に周囲の大人にとって、都合の悪いことは何一つ教えられない、そんな世界でもあった。とても閉鎖的で、『誰か』にとても都合のいい、独善的な世界。何も知らされなかった彼女は、無知であることを本能的に選択していた。賢くなることは、かえって自分の身を危険にさらす行為だと、分かっていたから。

しかし、ある日を境に、そんな世界は音を立てて崩壊した。

壊したのは、他の誰でもない、彼女自身だった。

砂糖菓子の、甘いメッキが剥がされた世界は、当然、彼女に優しくなどは無かった。それでも、彼女は無慈悲な事実を知ることができる世界で、生きて行くことを決めた。

それは、ある種の反抗であり、同時に決意の表れでもあった。

「良いこと？あなたには、夢を見ることは許されないの。だから、」
この国で最も地位の高い女性は、そんな彼女に厳然と言い放った。それを受けて尚、彼女は怯まなかつた。

「分かっています、王妃様。だから私は、今ここに、立っているのです」

自分の身を、自分で守らなければならない世界で生きて行くこと

を決めた、まだ幼い娘に、母親は、その手を差し伸べた。迷わずその手を握った娘に、母親は、微笑んでみせた。

同じ世界で生きて行く、仲間への歓迎の意を込めて。

少女が、10の歳を迎えた夜のことだった。

恐る恐るノックをすると、すぐさま返事が返って来た。手汗で濡れた手をハンカチで拭き、小刻みに震える手でどうにかこうにか、クローヴィアはドアを開けた。

「・・・ねえ、どうしてあなたはそうも、怯えた様相でいられるのかしら」

あまりの緊張ぶりに、さすがのエマニエルも面食らったようだった。まさかここまで露骨に怯えているとは、誰が予想できようか。「も、申し訳ありません・・・」

頼りない足取りで、ゆっくりと室内に入ってくる彼女は、一応エマニエルよりも一つ年上のはずなのだが、年長者の威厳など全く感じさせないありさまだった。今にも回れ右をして部屋を出て行きそうな勢いである。だがしかし、エマニエルにも幾分か責任はあるのは否めなかった。

モリゼに案内され、クローヴィアが王宮の最奥部であるこの場所にやって来たのは、今から30分ほどまえのこと。当然広大な王宮内を歩くのだから、最短距離でも直系の姫の部屋に行くまでには数分かかる。が、それ以上に時間を要したのは、案内を終えてさつさとモリゼが戻ってしまい、一人になったクローヴィアがどうすればいいのか分からず、右往左往してしまったからに他ならない。

本来ならば廊下が無人であると言うことは無いはずなのだが、今日に限って言えば、長い廊下に存在しているのはクローヴィア一人で、幸運なことに彼女の奇行を目にするものは一人もいなかった。

30分前に足音が二つ、近づいて来ていることが分かっていたエマニエルからすれば、30分もの間、クローヴィアがうろろしている足音をずっと聞かされる羽目になったと言うことである。もちろん、エマニエルが「さっさと入って来なさい」と言うこともできたのだが、そんな親切をするほど、彼女は良心的な姫では無い。

王女の私室は、思っていた通りにとんでもなく広かった。クローヴィアが普段メイド長と寝起きを共にする部屋がゆうに4つは入るであろう広さだった。しかし、壁が見えないほどに置かれたいくつもの本棚やその他の調度品のせいか、そこまで広いと感じさせはしなかった。

「そのソファに座って頂戴」

入って来た時、エマニエルはなんと着替えの最中で、今も着替えを続行している。前にクローヴィアの前でも平気で服を脱いでいた彼女だが、遠慮と言うものがまるでないような態度である。

「分かりました」

ようやく気分が落ち着いてきたのか、言葉は震えていない。スピレイアからの助言を思い出し、姿勢よくソファに腰掛けた。

「それで、どうだったの？」

ようやく着替え終わったエマニエルが、向かいのソファに腰掛けた。王女としての教養があるからなのか、所作はやはりそれらしかった。

彼女は、前回同様真っ白なドレスに身を包んでいた。

「フィリー王女との茶会の件ですよね？」

「それ以外に何があるの？」

ソファとソファの間にある、こげ茶色のいかにもなテーブルの上に置かれたティーセットでお茶の用意を手早くしながら、エマニエルはじとつと視線をクローヴィアに向けた。

「ええと、なんて言えばいいのか分かりませんが、とりあえず、茶会は上手く行ったと言って問題ないはずです」

「変な言い方ね」

「大成功でした、とは言いつらい感じなんですよ、それが」

この前の茶会で慣れたのか、今のクローヴィアは入室時の緊張が嘘のようにあっけからんとしている。

「ふうん・・・？でも、それなりに上手く行ったのね？」

「まあ、そうですね。それで、フィリー王女が、思い出作りにと今度お出かけになるそうなんですが」

それまで視線をティーセットに集中させていたエマニエルが、顔を上げた。

「もしかして、それにあなたも同行して欲しい、っていうことかしら」

「その通りです」

「なるほどね」

この話は、予想していたことだから、さほど驚くことではない。

最初は、フィリーが自分を誘うつもりだったことも。しかし、思っていた以上に姉は、クローヴィアを気に入ったと見た。

「何を話したの？」

「色々話しましたし、色々とお聞きしましたね。特定のジャンルと言うよりは、世間話から個人的なことまで、本当に多岐にわたって話しましたから」

「世間話？」

その言葉に、エマニエルが疑問の色を示したのは当然のこと。外界との接触ができないことをさほど気にしていない姉に世間話をして、興味を示すとは思えない。

「世間話と言うか、何と言うか・・・まあ、身の上話のようなものです。フィリー王女の世間はとてもせまいですから」

「そういうこと」

ようやくエマニエルは合点したようだった。

「今まで自分に仕えてきた使用人の話や、苦労して栽培に成功させたハーブの話が主な内容です」

「それはいいのだけど、よくもまあ、躊躇いもなく話せるわね」

フィリーとの茶会を頼んだのは他でもないエマニエルだが、会話の内容を一から十まで話せとはさすがに言っていない。それに、フィリーにもプライバシーと言うものが存在する。

「フィリー王女本人が、『どうせエマニエルがどういう塩梅だったかを聞くだろうから、隠さず話してあげなさい』と仰ったので」

「・・・」

さすがのエマニエルも、絶句せざるを得なかった。

フィリーは彼女にとって、初恋の相手にして、最も関心の強い相手の一人であることに違いは無いが、会った回数は数える程度で、自身の人となりをそこまで把握されているとは思っていなかったのだ。なんせ、彼女はフィリーの前ではクローヴィアに対する時とは違い、あまり本音を出さないように努めていたのだから（それで隠しおおせていたかどうかはおいておく）。

「まあ、姉様らしいと言えはそうね・・・」

ポットに並々入った紅茶を、一セットで屋敷が立ちそうなティーカップに注ぎながら、エマニエルは自身の平静を取り戻すように言った。

「さてと、この話題はそれぐらいにしておきましょう。続きはまた今度、ゆっくりと聞かせてもらってから」

紅茶の注がれたカップを手渡すと、彼女は表情を変えた。

何故、呼び出したのか。

もちろん、姉との茶会の件を聞いたかったからというものもある。

だが、それが本題では無い。相手もそれくらいは分かっているはず。

先ほどまでとは違い、真剣な面持ちになった王女につられて、クローヴィアは直しようが無い姿勢を形だけ直した。

「ねえ、ローア」

「はい」

「それで、返事は？」

「え？」

「だから、返事は？」

「あの、何の、でしょうか」

「・・・」

どうやらクローヴィアは、皆目見当がついていないらしい。

「私、あなたに言わなかったかしら」

「えっと・・・え、もしかして」

ようやく見当がついたらしい。

「でも、私は、無理だと前に」

「言っただけど、私はこうも言っただけ。『考える時間をやる』って」

「・・・そうですね」

生まれて初めて、他人に友達になっただけと言ったエマニエルにとって、この『お願い』は、博打のようなものだった。だから、少しでも自分に不利な状況を作らないために、つまりは確立を上げるために、保険を用意しておいたのだ。

それは、『時間』。面と向かっていきなり友達になっただけと言っただけ、困惑するのは目に見えていた。だから、考える時間を与えて、もう一度頼み込むのを前提で、あの時クローヴィアに対して言っただけだ。

「あの、エマル様」

「何よ」

言っただけではないかもしれない、とクローヴィアは躊躇っていた。しかし、言わなければこの状況を打開することは出来ない。

「友達というものが、私にはよくわかりません。私には、友達と呼べる間柄の人が、あまりにも少ないのですもの」

「それは、私も同じだけ？」

「だから、その・・・よく分からないのは承知ですけど、『友達になれ』と言われて、『はい、分かりました』と言うのが、友達だとは思えないのです」

「それで？」

「なので、友達になっただけと言ったエマル様の望みは、叶えることはできません」

怒るだろうか、嫌われるだろうか。それとも、呆れるだろうか。どれにせよ、自分にとってあまり望ましい展開にはならないだろうとは思っていた。

本来なら、あの日の時点で、友達になつてほしいと言う要求に、クローヴィアはイエスと答えるべきだった。それが、彼女の背後にあるフェリエス家にとつて、とても良い結果に繋がることは、分かり切ったことだったのだから。だから、後悔も大きかった。きつと、断ったから、だから王女を泣かせたのだと、クローヴィアは考えていた。

しかし、今回の茶会に行く直前、夫人は彼女に対してこう言った。『本音を言うことは確かにまずいことだけれど、お二方の前には、きつと本音しか通じないだろうから』

スピレリアは、本音はまずいから隠し通せと言った。夫人も、本音を言うことは良いことではないと明言している。けれど、例外があることも、夫人は知っていた。

フリーもエマニエルも、本音でぶつかってくるのを望んでいた。実際、クローヴィアが家のことばかりを気にするならば、フリーはあそこまで気を許すことは無かった。エマニエルだって、クローヴィア個人に対しての『お願い』をしたのであって、その後ろのしがらみなど、眼中にはなかったのだ。

そして、今回の回答は、紛れもない、クローヴィアの本音。たとえこれでエマニエルの機嫌を損ねても、彼女はもう、後悔はしない。

だからこそ、王女の反応は、予想だにしないものだったのだが。

「・・・そう。なら、仕方ないわね」

王女の態度は、実にあっさりとしたものだった。

「あの、えつと・・・」

あまりにもあっさりとし過ぎていて、断った本人が面食らうこととなった。

「あなたが断ることくらい、分かっていたもの」

「そう、ですよね」

エマニエルと言う王女は才色兼備であることで名高い姫だ。これくらい、とつくの昔に予想出来ていたのだろう。

しかし、それにしても、言うには言ったが、これからどうするべきか。言うことも言ったし、腰を上げて、部屋を出ていけば良いだろうか。正直なところ、ここから先、どうすればいいのか、クローヴィアには分からなくなっていた。

「言うべきことは言った。さて、これからどうしようか・・・と悩んでいるよね」

「・・・仰るとおりです」

見得を切ったのは良いものの、その先までは考えていなかった霞草は、体を縮こまらせた。

「じゃあ、私の話し相手になってもらえるかしら」

「話し相手、ですか」

「一方的に話すから、適当に相槌を打てばいいのよ」

「はあ・・・」

そうして、エマニエルの一方的な話が始まった。

全く手をつけていない紅茶は、既に冷めつつあった。

「・・・それで、私は決めたの。婚約者のことも、何もかも、全部抗えないことならば、自分が納得する形で未来を選ぶようにしよう。まあ、正直に言ってしまうと、婚約者なんて公式な場で数回会っただけだし、向こうも私に興味が無いことくらい、分かり切ったことだから、上手くいきそうにはないのだけど。それを言ってしまうば、嫁ぐことで生じる、嫁姑問題だってあるし、はつきり言っ
てサイアクよ」

「大変なんですね、王女様って」

「そうね、気楽なものではないわね。でも、それが、この豪華な生活の代償なの」

「・・・」

「王族のお姫様、それも、私みたいに直系の、血の濃い姫は、綺麗な世界で生きていけるのよ。よっぽど何かが起きない限りはね。でも、それは将来、政治や外交の道具になることが決まっているからだから、キズものにならないように、真綿にくるんで大切に育てられるというだけのこと」

「富や権力を持つ者は、贅沢な暮らしをしても咎められない。それに見合った代償を支払えば、の話だが。」

「クローヴィアにとって、身近な該当者と言えば、父親である伯爵がそれなのだろうか。」

「彼は、広大な領地を治め、伯爵としての責務を全うしている。だから、あんなに大きな屋敷を持ち、多くの使用人を従えている。」

「目の前のエマニエルもそれは同じ。生まれた時から将来が決められていて、好きかどうかも分からない相手と結婚する。自分のためではなく、国のために。だから、綺麗な洋服に身を包み、煌びやかな世界で生きる。」

「質問しても良いですか？」

「なあに？」

「王女をやめたいと思ったことは？」

「・・・そうね、あるわよ。何度も何度も、でも」

「どれ程願っても、私は死ぬまで王族の一員なの」

「砂糖菓子の世界で、一生を過ごすことも不可能では無かった。どのような残酷な事実も、あの世界では、何重にも砂糖で塗り固められ、優しい嘘に姿を変える。だから、傷つくこともない。」

「けれど、事実を知ってしまった以上、ひびが入ってしまった以上、未練はなかった。」

「さて、話を続けましょう。相手の国は、私たちが生まれる少し前に、この国と戦争をしていたの。それで、勝利したのはこちら側。」

けれど、大きな痛手を食らったのもまた事実。だから、同盟を結んだの。不可侵同盟とか、そんな大層な名前のやつを。で、同盟の証にと、王族の姫を相手の国に嫁がせることになったのですって」

「それで、エマル様が選ばれたと？」

「そういうこと。正式に向こうに嫁ぐのは私が18になってからだから、あと半年と少しね」

「・・・よく考えたら、18って結婚適齢期ですものね」

「そうよ、だからあなただって近いうちに嫁ぐことになるかもしれないのよ」

「全く考えていませんでした」

「でしょうねえ」

クローヴィアは現在18歳。世間的に言っても、もう嫁いでおかしくない年齢だ。当然、縁談の話など聞いたこともないが。

王族の姫君となれば、10代半ばで嫁ぐことだって珍しくはない。そう考えれば、エマニエルは行き遅れともとられがちな年齢なのだ。「私は生まれた時から18になったら嫁ぐと決まっていたから、縁談なんて厄介なものは何一つ無かったけれど、あなたはこれからそういうものに悩まされていくでしょうよ。実際、20歳で独身つてなったら、もう貰い手だっていないかもしれないのだからね」

「そうですね、今まで考える余裕も無かったのですけれど」

「女として生まれた以上、避けられない宿命よ。たとえ、相手のことが全く好きでなかったとしてもね」

今まで彼女の思考を支配していたモノと言えば、どうすれば効率よく仕事を終えられるか、だった。裏庭の整備や家畜小屋の掃除、その他もろもろをどうすれば無駄なく手早く終えることができ、日付が変わる前に布団に入れるか。こんなことばかりを考えていたクローヴィアにとって、結婚など、縁遠い世界のものでしかなかった。当然、彼女を良く思っていない、あからさまないやがらせをする同年代のメイドたちは、縁談の話や結婚についての話題でよく盛り上がっていたが。

フェテリエス家には、礼儀作法やマナーにうるさいメイド長がいるので、働いているメイド達は礼儀礼節が叩きこまれている（クローヴィアもしくり）。そのためか、縁談の話はたびたび耳にする機会があったし、それで辞めて行った先輩たちも少なくない。

しかし、前述の通り、クローヴィア自身には縁談の話など少しもやってこない。それは、曲がりなりにも伯爵の娘だからなのか、それとも他に理由があるのかは、分からないが。

「許嫁って、どういうものなんですか？」

彼女の口から飛び出したのは、全く関係の無いことだった。

「どういう、って？」

「その、なんて言えば良いかわからないんですけど、小さい頃からこの人と将来結婚するんだ、と知っているのって、どういう気分なんですか？」

首をかしげ、めずらしくきょとんとしているエマニエルは、解答を導き出すのにたつぷりと一分間用いた。

「そうねえ……まあ、あまり良いものではないわ。仲が良くなければね」

「仲がよろしくないんですか？」

「うーん……悪いと言うよりかは、互いに何とも思っていないのよ」

いつもなら淀みなく話すエマニエルの口調が、今はどこか齒切れが悪い。

「何とも思っていない？」

「私も向こうも、正直どうでも良いのよ。だから、仲が悪いなんて次元では無いの。ま、向こうにはどうやら他に好きな人がいるようだし、私の存在は、はつきり言って邪魔くさいかもしれないけどね」

「難しいものなんですね」

「しょうがないわよ、それが定めなのだから」

少しも手をつけられていない、なみなみ入ったティーカップの存在に気付いて、エマニエルが立ちあがった。

「紅茶に少しくらい手をつけてくれたっていいのにねえ」

「あつ、すいません・・・」

素でその存在を忘れていたクローヴィアは、冷え切った紅茶をどうしようかと考え始めたが、結論が出る前に、出されていたカップをエマニエルが下げてしまった。

「ところで、すっかり忘れていたのだけれど、」

あらかじめティーセットと同じように用意されていた焼き菓子と淹れなおした紅茶を運びながら、何かを思い出したように口を開いた。

「なんですか？」

「あなた、私に謝罪の旨の手紙をよこしたでしょう」

再びティーカップがクローヴィアの前に出された。今度は手をつけようと思ったが、エマニエルの発言に手が止まった。

「え、ええと、はい」

彼女の体が強張ったのは無理もない。それが彼女の一番の懸案事項だったのだから。向こうが気にしていない、もしくは忘れているようだったから、先ほどは自分の意志を伝えたところでさてどうしようかと悩んでいたのである。

「きつとあなたは、別れ際、私が泣いたから、機嫌を損ねてしまったのではないか、と考えたのでしょうか？私に友達になれって言われて、断ったのもあつただろうけれど」

「はい」

ようやく恐る恐るカップを手にとったクローヴィアは、ちらりと相手の様子を失礼にならない程度に窺った。

怒ってはいない。

どころか、少し首をかしげているような。

「正直ね、あの手紙が来たときは、驚いたのよ。だって、あなたが謝るようなことって何も無いじゃないの」

「え？」

「え？じゃないわよ。あのねえ、あなたは私の機嫌なんか損ねてい

ないし、気にするようなことなんて何もないの」

「・・・」

なら、今までこの件についてずっとキノコが生えそうなくらいにウジウジと悩んでいた時間はなんだったのか。

「さすがに、別れ際に泣いたのは・・・ごめんなさいね、あなたのせいじゃないから」

「い、いえ、結構です」

「は、何が？」

「え、あ、何でもありません・・・」

今までずつとのしかかっていた重荷が、一瞬で無くなった感じがした。これでようやく、就寝前にメイド長に早く寝るよう叱られることが無くなるだろう。

「でも、嬉しかったわ。あんなに心のこもった手紙を貰ったのは、初めてだったし」

「それは、良かったです」

便箋は、恐らく夫人が用意したのだろう、上品なものだった。そこに書き連なる言葉は、お世辞にも綺麗な字体とは言えなかったが、不思議と読みづらくは無かったし、読むのが苦にはならなかった。

そして何より、書くのに随分と時間を要したであろうことが、見てとれた。きつととても悩んで悩んだ末に書きあげたのだろう。所々よれたり汚れた便箋が、それを物語っていた。

「あの、そういえば・・・『直接会いに来なさい』と手紙に書かれていましたよね？」

「確かに書いたわね」

手紙の返信に悩んだ王女は、何度も書き直した末に、あの簡潔な一文を書きあげたのである（せっかくの綺麗な便箋を何枚も何枚もぐしゃぐしゃにして散らかしたその姿は、締め切り前の小説家の有様だったとモリゼは後に語っている）。

「でも、私の力ではどうしようもできないので、もう一度手紙を書くかと思っていたのです」

会いに来いと言われて、はいそうですか、とはいかないのである。なんせ、相手はエマニエルなのだから。気易く会いになどは到底いけないし、通行手形となる招待状が無ければ、門前払いを食らうのがオチだ。

「確かに、会いに来いって言われても、簡単には来れないものね」

そのことにエマニエルは今気付いたようである。フリーとの茶会が無ければ、こうやって面と向かって話すことも出来なかったかもしれない。

「今、こうやってお会いすることが叶ったので、良かったです」

もしあのまま、それっきりと言うことになっていたら、さすがにずっと後悔し続けることになっただろうから。

「そう」

珍しい、とクローヴィアは思った。純粹な、何の思惑もない、彼女の笑顔は。

しかし、それを口にすることはせず、先ほどの失敗を繰り返さないよう、紅茶をすすった。

「それにしても、これで会うのが二回目なのに、そんな気がしないわね」

「それは、多分…」

「何よ？」

きつと、初対面の時に話さないようなことをあっけらかに話したからです、とクローヴィアの口が紡ごうとしたとき、室内に、ノックの音が響いた。

「あら、誰かしら」

音もなく立ち上がると、エマニエルはどうぞ、と入室を促した。入って来たのは、モリゼだった。

「ご歓談中、失礼いたします」

「どうしたの、モリゼ」

「それが……」

「え？」

モリゼの報告を聞いて、クローヴィアは持っていたティーカップを落とした。落ちたカップはテーブルの上で、あっけなく砕けた。

「それは、本当ですか？」

「ええ、ですから、クローヴィア様、急いでお帰り下さい。馬車はこちらまで来てもらいましたので」

そう言つて、こちらに来る時と同様に、モリゼはクローヴィアの手を引つ張つた。

今度は、転ばなかった。

二人が部屋を出て行つたあと、エマニエルはテーブルの上に零れた紅茶と、散らばつた花柄のティーカップの残骸を見つめていた。

「どんなに綺麗な花だつて、いつかは枯れるのにね」

散らばつた破片を一つつまみ上げて、彼女は呟いた。破片には、

今はもう咲かない、金色の花が描かれていた。

「この花も、あの人も、同じようなもの」

優しい人は、優しいがゆえに傷付きやすい。

「この花、マリイブツセの花言葉は、慈愛・・・だつたかしら。：

ああ、そういえば」

すっかり渡しそびれたものを、今になって思い出した。

「これ、渡せばよかったわね」

彼女の手の上には、破片と、そして金と銀の黒ずんだ鍵があつた。

第16話（後書き）

大変長らくお待たせさせて頂きまして、申し訳ないです。来年は、もう少し頻繁に更新できるように頑張ります・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6162s/>

董姫と霞草

2011年12月27日19時46分発行